

---

# Descended

奇之助

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Descended

### 【コード】

N3800B

### 【作者名】

奇之助

### 【あらすじ】

『どこまでを人殺しというのかな。』  
僕の幼い頃に父が呟いた、謎の言葉。父の死後、出会ったばかりの少女の口から、全く同じ台詞を聞いた。10年ぶりに訪れた故郷。再会した親友と、かつての恋人。昔の記憶と、昔馴染んだ人々の隙間から覗く、自殺した父の影。その影の向こうに隠れていた圧倒的な真実に、僕はただ、打ちのめされるほかなかった。

## Prologue

罪とか罰とか、過ちとか戒めとか。

今でも僕には、何が正しくて何が間違っているのかなんて大それたことも、償いの価値も真意も、判らない。

判ったところで、きつと、何も、変わらない。

それでも容赦なく、血は巡るから。今も僕の体の中で脈々と、無責任なまでに淡々と。

少なくとも僕にとっては、抗うことなんて出来なかった流れ。抗おうと思つことすらできなかった、流れ。

なのに彼女はあの華奢な足で、踏みとどまって、もがいて、それでも笑っていた。

だから、輝いて見えた。

揺ぎない現実を求めていたはずの僕のファインダーなんて、彼女と比べれば所詮、仰々しい理想だとか信念だとかいう名の、人の虚勢ばかりを捕らえていたのだと、思い知らされた。

彼女は、そんな僕にも微笑んでくれた。

少し僕を卑下した、少し皮肉気味の、少し哀れむような目を、携えてはいたけれど。

2年前。

彼女のいた、春とも夏ともつかない曖昧な季節の日々は、今も僕の記憶の中で、宙を舞う羽根のようにふわふわと彷徨って、消えてしまいうそで、消えない。

## 1 . Beyond The Fence

彼女を始めて見たのは、故郷の島へ向かうフェリーの甲板だった。春の終わりで、夏の直前。梅雨を間近に控えた、晴れた海の上の朝。

一夜をかけて都心の桟橋から島へと渡る船の中で、僕はその日、浅い眠りから覚めた。

客室とは名ばかりの、壁を取り払った雑魚寝の大部屋。もう一度寝付けるとも思えず、肌にとわりつく湿気から解放されようと甲板へ出た。

そこで、彼女を見つけた。

朝陽に薄れていく靄の彼方の、目的の島の薄黒い影。それを望む船首とデッキとを隔てる柵の、向こう側。

本来なら乗客は立ち入れないその場所に、彼女はこちらに背を向けて立っていた。もう3歩も踏み出せば海の中、という船のへりに、淡い赤と白のネルシャツに、デニム地の短いスカート。とても乗務員には見えない彼女が、多分乗務員だけが立ち入れる場所に、当たり前のように佇んでいる。なんだかそれが少し滑稽に思えて、好奇心をくすぐられて、だから、思わず声をかけた。

「そこ、危ないですよ。」

僕の声に、彼女はぴくりと肩を震わす。でも振り向きはしなかった。

「だって気持ちいいんだもん、こっちのほうが。」

思ったよりも幼い声が、背中越しに返ってくる。

体型、もあるが、彼女の背負っている雰囲気そのものがどこことなく引き締まっていたから、その声で想像できる年齢よりも、少し上だろうと思っていた。

声を聞いて、納得する。

彼女はきつと、若い。多分僕よりも、5つか、6つか、もう少し。

二十歳を越えたばかりか、その少し、手前くらい。

若い頃にありがちな衝動。常識とか良識の、少し外側を覗いてみたくなるような、その時期特有の好奇心。彼女を柵の外へと駆り立てたのも、きつとそんな気まぐれなんだろうと思うと、放っておいた方がいい気がした。

「じゃあ、乗務員に見つからない程度に、ね。」

言い残して背を向けようとした時、彼女が振り向いた。回りかけた僕の肩が止まった。

消えていく朝靄と一緒に溶けてしまいそうなほどの、彼女の肌の白。それが眩しくて、僕は目を細めた。頬の辺りの丸みにまだ少し幼さが残っていたが、綺麗だった。素直に、そう思った。小さくとかんと、胸が脈を打った。

「それはヤダ。面倒臭い。」

彼女は僅かに眉をひそめ、おもむろに足を上げた。スカートから伸びた腿があらわになって、僕は思わず目を逸らす。

そんな僕の戸惑いを気にかける様子も無く柵を飛び越えると、小さく吹き出すように彼女は笑った。

「見えた？」

少し意地の悪い声を放って、伏せた僕の顔を覗き込む。その時一瞬、彼女の表情が強張った気がしたが、すぐにもとの、挑発するような笑顔に戻った。

「いや、見えてない。本当に。」

慌てて首を横に振る僕の頬を、軽く握った拳で彼女が小突く。

「スケベ。」

悪戯っぽく言って、彼女はすつと踵を返し、客室へ向けて歩き出す。かと思うと、数歩だけ歩いたところで、唐突に止まった。

「あなた、臆病なタイプの人でしょ？」

背を向けたまま、彼女が言った。

「・・・臆病？」

彼女の意図するところがわからなくて、僕は思わず聞き返す。

「なんとなく、そんな気がする。」  
言って彼女は、再び歩き出した。

彼女に小突かれた頬に手をあて、僕はその背中が客室に消えていくまで、呆然と眺めていた。彼女の、裡から沸き立つような奔放さに圧倒されて、眺めていることしかできなかった。

臆病。

何を根拠に彼女がそう言ったのかは判らない。が、鋭いな、と思っ

た。  
確かに僕は、臆病だ。

臆病だから、高校を卒業してこの島を出てから10年、僕は一度も、ここへ足を向けられなかった。今だって、そんな自分の弱さを取り繕うことのできる大義名分がなければ、この船に乗ることなんてきつと、できなかつた。

父の死。

それが僕の、大義名分だつた。

ニューヨークのアパートメントにかかってきた母からの電話で、父の死を知った。

自殺だった、ということも。

母は泣いていた。憚らず、受話器の向こうからきれぎれの嗚咽を漏らして。

この期に及んで何故あの男のために泣くのだと、誰に向けていいのか判らない憤りが僕の中で湧いた。

父に対して、と一瞬思ったが、やめた。

死んだ人間に何かを押し付けても、結局苦しむのは生き残った人間なのだから、と。父の所為でそうなってしまっただけは悔しすぎるし、癪にさわる。

そう。

僕は、父を憎んでいた。

だから父の死を知って、母と同じようにうるたえ、嘆き、悲しむことは出来なかった。

なら、どんな想いだったのかと訊かれても、それは、判らないけれど。

新鋭の画家。

そんな肩書きを背負って、僕が生まれる少し前、身重だった母と幼かった兄を連れて、父は僕の故郷となるこの島に移り住んだ。

住む、といってもそれは建前で、父が家に帰ることは滅多になかった。僕が生まれた日の朝も、本土の、東京のアトリエに引き籠もっていたという。

月に一度、見るか見ないかの父の顔。それよりも、父の手の方が、幼い頃の僕の記憶には鮮明に残っている。

幼心に、父の不在はやはり寂しかった。時折家に帰ってきても、

大した会話も無く仕事部屋にもぐりこんでしまう父。でもその前に必ず、並べて立たせた兄と僕の頭を、ごつごつと骨ばった大きな手で少し乱暴に撫でた。小学校に上がっていた兄は露骨にそれを嫌がったが、僕は、少し痛くて少しくすぐりたい、僕の髪の毛をかき回す父の手の感触が好きだった。

その頃は確かにまだ、僕は父を好きだったんだろう。父の手の硬さを、いつも感じていたと思っていて。いつも感じていられないことに、寂しさと、虚しさと、ほんの少しの苛立ちを抱いていた。

小学校に上がって少しした頃にひとつ、気付いたことがあった。母を見る時の艶の無い父の瞳と、それに反した母の、すぎるような潤む瞳。言葉や態度には、すれ違う二人の瞳の違和感は現れなかったから、二人の間に何が起こっているのかなんて、まだ子供だった僕には判らなかった。

ただただ、漠然とした不安感が、薄黒い靄のような曖昧な形で、僕の胸の中をゆっくりと蠢いていた。その頃は、感触でしかなかった。それが僕の中を蠢くことでいい気分にはならなかったにしろ、僕の中だけで完結するただの異物感のだと、自分に言い聞かせた。でも、僕が中学に上がった頃、否応無く、逃げ回る余地すら与えずに、はつきりとした形になってそれは、僕を打ちのめした。

中学3年の夏。

夏休みも終わりにさしかかった日の、朝早く、一人の女が家を訪れた。

乱暴に叩かれる玄関のドアの軋む音で、僕と、夏休みで本土にある高校の宿舎から帰郷していた兄は、飛び起きた。

粘っこい夏の朝の湿気を切り裂くような、木の軋む鈍い音と、僅かな振動。

いつやむとも知れないその音に、2階の、隣り合わせた兄と僕のそれぞれの部屋の窓から、僕たちは真下にある玄関をのぞき見た。

女が、いた。

ヒステリックに家のドアを叩く女が、そこに立っていた。

明るく染め上げた髪。黒い、肩を露にしたキャミソール。島に訪れた若い海水浴客の一人だろうと、僕は思った。でもそんな女が、観光客向けの海水浴場からは離れた僕たちの家を、訪れる理由は判らなかつた。

慌てて玄関口に出た母が、興奮気味な女を宥めるように家に招き入れた時、妙な不安感が唐突に湧いた。危機感、と言ってもいい。母を守らなければ、という衝動が、僕を駆り立てた。気付いた時には部屋を飛び出して、玄関脇へと下る階段へと走っていた。兄も、同じタイミングで。

二人で競うように階段を駆け下りようとした時、下から母が僕らを見上げて無言で制した。口元に薄く笑みを浮かべ、大丈夫、と言葉に出さないまま僕らに語りかけていた。女は母とは対照的に、階段半ばで固まる僕らを、睨めるように見ていた。

それから暫く、女の叫ぶような嘆きと罵声と嗚咽が、階下から交互に聞こえてきた。何と言っているのかはつきりとは判らない。でも聞こえるたびに、窓際の勉強机に座り、部屋のドアに向けていた

僕の背中がひりひりと疼いた。何度も、振り向いて部屋から飛び出して、母の元へ駆け寄ろうという衝動が湧いた。が、必死に抑えた。母はきつとそれを望まないと、なんとなく、感じていたから。

昼をすぎた頃、ようやく女は帰っていった。

僕と兄はそれぞれの部屋の窓から、飛び交う蝉の声に押しつぶされてしまいそうな華奢な女の背を、その姿が見えなくなるまで眺めていた。玄関口で、女を見送っていた母も、同じ様に女の背を目で追っていた。

ふと僕たちに気付いた母が顔を上げる。気配でそれを察し、僕たちも母を見下ろすと、僕たちを階段で制したときと同じ薄い笑みが、母の顔に張り付いていた。何故か僕は、母のその優しげな笑みに、ぞっとした。

「あれは、親父の浮気相手だ。」

母が家に入ってから、窓越しに兄が言った。浮気、という言葉の意味は判っても、それが本当にどういふことなのか、実感は無かった。頭の奥のほうの、どす黒い紫色をした暗闇の片隅に、その言葉が不意に浮いてきて、思わず思考を逸らした。その言葉について、あれこれと考えてはいけない気がした。

「あいつ、東京にああいう女をいっぱい囲ってるんだ。俺たちをこの島に縛り付けて、見えないところで好き勝手やってんだ。」

階下の母に悟られぬよう、蝉の鳴き声にかき消されそうなほどか細い声で、兄が言った。でも、語気は強かった。兄の憤りが、そこかしこから漏れ落ちていた。

僕にとって兄の語る言葉の意味は、その時はまだ、白い膜のようなものに覆われていて、僕の頭の中ではっきりとした輪郭を描くことはなかった。

その日の深夜、トイレにたった僕が階下に下りると、リビングの灯りが廊下に零れ落ちていた。時間が時間だけに不思議に思い、そっと覗くと、ダイニングテーブルに腰掛ける母の背中があった。小

刻みに震えていた。暫くして、ああ、泣いているのだ、と判った。時折漏れる小さな嗚咽。そのたびに母の背は、ぴくっと小さく跳ねた。

脳裏に、昼間僕たちに向けていたあの母の笑みが浮かんだ。

とりつくろうとか、兄と僕の前では毅然としていようとかいう類の、笑みじゃなかったと、僕はおぼろげに思った。何かに失望して、もう笑う以外ない。そんな、自棄を含んだ笑み。

あれは、親父の浮気相手だ。

兄の言葉が耳の裏側で甦る。

つくりものの世界でしか触れた事のない、言葉。

やはり、実感は湧かなかった。

そんな言葉よりも、僕にとっては目の前の、震える母の背中のほうがとてつもなく生々しく、リアルで、それは僕の胸の奥を鷲掴みにして、容赦なく掻き回した。それまでは大人しかった、あの胸の中の靄のような異物感が、ぐるぐると激しく蠢きだし、痛かった。その生々しさから目を逸らしたかった。痛みから、逃げたかった。父を憎むことでそれができるのだと、しばらくしてから、知った。

「帰ってきて。お願い。最後に一度だけ、お父さんに声をかけてあげて。」

嗚咽交じりに受話器からもれてくる母の言葉に、暫くのあいだ、僕は何も返せなかった。

この人はこの期に及んでまだ、家族という絆にすがりつこうとしている。そんなもの、とうの昔に父が壊してしまったのに。

残骸になってもそこにしがみつく母を、哀れだと思った。そしてそう思ってしまう自分と、そう思わせる母の両方に、苛立った。

「わかった、帰るよ。」

ようやくそれだけ言って、受話器を置いた。

置いた後の部屋の静けさが、やけに重かった。

#### 4・Old Friend

港に着く頃には、陽射しがこの季節には似つかないほどに強く、容赦なく、無防備な棧橋のコンクリートを照らしていた。

眠気と、旅先に到着した高揚感とが緋い交ぜになった複雑な表情を浮かべ、乗客たちがその棧橋を涉って行く。彼らの足取りが心なしか軽く見えるのはきつと、眠気よりも高揚感が勝っている証拠なんだろう。

僕は、その流れには乗れなかった。

見えない何かが絡みついたように、足が重い。

ここに及んで未だに僕は、心のどこかでこの島に戻ってくることに抵抗している。そんな自分自身が滑稽で、今更、と自嘲するような笑みが無意識に、浮かんだ。

船着場に隣接するロータリーにでると、小さく二度、クラクシヨンが鳴った。振り向くと車が一台止まっていて、その脇に立ち、運転席の窓から車に腕を突っ込んで笑っている、昔よくなじんだ顔が目にとまった。

啓太だった。

僕を迎えに来ると期待していた相手ではなく、啓太が、そこに立っていた。

少し驚いて呆然としてみると、啓太は車に突っ込んだ腕で、もう一度、クラクシヨンを鳴らした。早くこっちにこいよ、と急かしているのだ。僕はそれに応えるように、足早に啓太に歩み寄った。

「おう。」

僕が傍に寄ると、啓太はそっけない言葉を投げってくる。そっけないはあるが、その言葉の裏側に、照れを感じた。

「ひさしぶり。」

返した僕の声にも、同じような色が出る。久しぶりの再会が、少しくすぐったかった。気まずさとは違う、ぎこちない言葉と言葉。

そのぎこちなさが逆に、心地よかった。

アメリカで7年暮らしても、社交辞令的に、そして必要以上に大袈裟に感情を表すあの国の風潮に僕は、どこか馴染みきれないところがあった。旧友に再会して、この歯がゆい感じのやりとりがしつくりとくるのは、やっぱり僕がどうしようもなく、日本人だからなんだろう。

「10年ぶり、だっけか。お前、変わらねえな、淳。」

啓太の言葉に、そうなのかな、と僕は思う。自分では変わったとも、変わっていないとも言えない。どちらにも、実感がない。

啓太は、変わった。間近で啓太の顔を見て、そう思う。浅黒く焼けた肌は昔からだだったが、頬の辺りにあった余計な脂が削げ落ちて、昔より引き締まった感じがした。

でも、素直にそんな事を口にはしない。

「啓太は、ふけたよな。」

言って、冷やかすように笑いながら、啓太の胸を小突く。

「うるせえ。」

少しふてくされて啓太も、小突き返す。そして苦笑を浮かべたま顎を振って、車に乗れと促した。

「拓郎は？」

僕は助手席に乗り込むと、本当なら今日僕をここに迎えに来るはずだった、もう一人の旧友の名を口にした。

「ああ、なんか今日から泊まる客のためにいろいろと準備があるってな。昨日の夜になって急にお前を迎えに行ってくれて、頼まれてよ。」

啓太はあくび交じりに返して、「ま、俺も昼間は暇だし。」と付け加えた。その眠そうな表情で、漁の帰りに寄ってくれたのだと判った。

「客って俺のこと？」

僕が訊くと、まさか、と啓太は笑い声を上げる。

「お前自分を客だと思ってるわけ？」

「客じゃないのかよ。ちゃんと払うし、宿代。」

「払ってももてなさねえぞ、きつと、あいつ。」

「ひどいな、それ。」

「昔から酷いヤツだったろ？ 拓郎はよ。」

啓太はからからと乾いた声で、笑う。その無邪気で無防備な笑い方は変わってないな、と思つて、少し安心して、僕も一緒になつて笑つた。ほんの一瞬だけけれど、啓太と僕の間にあるはずの10年の空白が、まるで最初から無かつたように感じられて、嬉しかった。

「直接、拓郎のところ、で、いいんだよな。」

唐突に真剣な顔になつて、啓太が訊く。あまりにもがらりと表情を変えるから、僕は咄嗟に反応できず、ああともうともつかない曖昧な返事しか返せなかつた。啓太はそれ以上、何も訊かず、無理矢理何かに納得するように小さく小刻みに頷くと、ゆっくりと車を発進させた。

暗に、実家に帰らなくていいのと言いたかつたのだろう。ただ直接そう訊いてしまうには、ためらいがあるのだ。啓太にも。僕の父に対する思いを、啓太も知っていたから。

不器用な啓太が、不器用なりに気を使っている。そう感じて、昔の、僕の知っている啓太なら絶対にないその反応に、僕は思わず吹き出すように笑ってしまった。

「な、なんだよ、なんか変なこと言つたか？ 俺。」

「やっぱり啓太は変わったなつて、歳くつたなつて、思つてさ。」

僕の言葉に、うるせえよ、と呟くように言つて、啓太は口を尖らす。拗ねる感じは昔と変わりない。

あからさまに変わってしまったっている啓太と、変わらない啓太とが交互に出てきて、その矛盾が、不思議な感じだった。不思議で、なぜか、微笑ましかつた。

走る車の車窓から見える風景は、昔とはだいぶ変わってしまったつていた。

小奇麗になつたというか、こじんまりと纏まつてしまつたという

か、新興の観光地によくあるような、不自然に整然とした並木が、海岸線を走る街道に沿って並んでいた。それがどこかよそよそしく思えて、少し寂しかった。昔の、開けっぴろげな田舎の観光地という雰囲気、懐かしく思えた。

ふと、その景色の中に溶け込まない淡い赤が、目に止まる。彼女だった。

フェリーの中で見かけた、あの彼女。肩に大きなバックをかけ、小振りなキャリアケースを引きずりながら、彼女は海沿いの歩道を歩いていた。

思わず、目で追った。

スピードに乗り始めた車は、ほんの一瞬で彼女を追い越す。その瞬間、彼女がこちらを見た気がした。目が合ったように思えた。が、きつと気のせいだろう。僕は再び、視線を前方へ戻す。

「やっぱりお前も変わったな。このスケベ。」  
言われて振り向いた。啓太がハンドルを握り、前を見ながらやついていた。

「なんだよ、スケベって。」  
「今の女の子、見てたる？昔はお前、嫌いだったじゃねえか、女の子に声かけるのとかよ。」

「違うって。そんなじゃないよ。」  
苦笑する僕を、啓太が横目でちらりと見る。  
「車、止めるか？」

唇の片側を吊り上げて、意地の悪い笑みを浮かべる。僕はそんな啓太の本性を見抜く。

「お前が声かけたいんだろ。」  
「あたり。」

「まだそんな事やってんのかよ。」  
苦笑と共に、思わず溜め息が漏れた。

啓太と拓郎と僕。

3人でいた頃の毎日を、ふと、思い出した。

二人とつるむようになったのは、高校に入学したばかりの頃からだ。

島の南にある中学校を卒業した僕と、北にある中学を卒業した二人。同じクラスになった僕の前後に彼らが座り、休み時間や放課後、他愛ない話を絶え間なくしていた彼らの輪の中に、いつの間にか僕も引きずり込まれた。そんな、月並みといえば月並みな、本当に、些細なきっかけだったのだ。

そして、この島の人間で、同じ高校に進学したという事実もまた、二人が僕に親近感を抱かせるもうひとつの要因でもあった。

例えば兄のように、その先の進学を考えている島の子供達は、本土の進学校へ通う。そして僕のように無計画で、将来に何の危機感も抱けないような楽観的な子供らが、島の高校へ進む。これは、目に見えない、声には聞こえない、おぼろげで曖昧な大人たちの期待や圧力を感じられる者と、そうでない者とは振り分けられる、この島独特の儀式のようなものだった。だから、同じ島の高校へ進学した啓太と拓郎も、根っこのところでは僕と同種だと思っていた。

大雑把で、豪快で、不器用な啓太と、大人ぶった素振りや斜に構える拓郎。最初はこれでよく一緒にいれるものだと思うくらい、異なる性分を二人は持ち合わせていた。しばらくして、違ってからこそ上手くかみ合う人間関係というものがあると、その後も非常に役に立つ教訓を、僕はこの二人から学ばされた気がする。

「だから南中出身は・・・」

その頃僕は二人によく、声をそろえてそう言われた。

啓太と拓郎の『ノリ』に僕が付いていけないと、必ず。

僕の家のある島の南側は、彼らの住む北側とは違って、果物を栽培する農家や、養殖に携わる漁師が多く住む地域で、そこに住む人

々には、地味で穏やかな風潮があった。その風潮は子供達にも例外なく引き継がれ、観光地向けに栄えた北側の連中のような垢抜けた感じが、僕ら南部の出身者には無かった。それを、二人によくからかわれた。

からかわれたといっても、決して悪意は無く、だから、よく都心であるような子供どうしのいがみ合いなんてものも、存在しなかった。北と南で慣習や性分に違いがあっても、やはりどちらも田舎の孤島の人々なのだ。ぎすぎすとした歪みが入り込めるような雰囲気は、皆無だった。

人の出入りの多い北側に住む啓太と拓郎は、いい意味でも悪い意味でも外向的だった。

夏、若い観光客がどっと押し寄せると、二人は決まって船着場へ出張って、島を訪れたばかりの女の子だけのグループを探し出し、しきりに声をかけた。そういうことに慣れていない僕が気後れすると、またいつもの台詞が飛んでくる。

「だから南中出身は・・・」

僕はどうしてもそういうことに気が向かなくて、断ろうとはするものの、決まって拓郎が強引に引き止めて、何故僕を誘うかという持論を、展開する。

「淳はさ、こう、母性本能をくすぐるタイプだろ？俺らが声かける女の子なんて、大学生とか、大抵ちよっと年上なんだからさ、淳みたいのがないと上手くいかないんだよ。」

いい迷惑だとは思いつつも、二人の屈託の無い明るさが好きで、なんだかんだ結局僕は、二人に着いて回っていた。

とにかく、二人といるのが好きだった。でもそれは、二人と一緒にでありさえすれば、家に帰る必要がない、という別な思惑も孕んでいた。

母の震える背中を見て以来、僕は父とも母とも、顔を合わせる事が苦痛になっていた。父や母の姿を見るたびに、真夜中の食卓で震えていた、あの痛々しい母の背中が瞳の裏側に甦ってきて、僕を打

ちのめした。

啓太と拓郎と一緒にいることで、できるだけ、家から遠ざかろうとしていたのだ。ある意味では、二人を利用していたのかもしれない。二人に対して後ろめたさを抱えつつ、その頃の僕は、どこか取り繕ったような笑顔を携えて、彼らの背中を追っていた。

拓郎の家、つまり彼の母親の経営する民宿は、木造の古びた一軒家のはずだった。海沿いの町でよく見かける、真夏のシーズン以外は釣り客ばかりを相手にするような、昔ながらの船宿。それが、昔の面影などこれっぽちも感じさせない、白い壁に覆われた小さなペンション風の洋館に立て替わっていて、目にしたとたん僕は、思わずたじろいだ。

「これ、拓郎の家、だよな？」

車を降りるなり、呆然とその洋館を見上げる僕に、啓太が苦笑を返す。

「なんだかな、俺は昔の方が好きなんだけどよ。」

目を細めて、啓太は言った。なんとなく、啓太の気持ちに同調できる気がした。ネガティブな感傷なんかじゃなくて、昔よく馴染んだ、今はないものを空想して懐かしむ感慨。啓太が浮かべたのは、そんな表情だった。

「ボロいとか臭いとか、崩れそうとかよく燃えそうとか言ってたの、お前じゃないか。」

突然背後で声がして、振り向いた。線の細い、長身の、太平洋に浮くこの島には似つかない白い肌をした男が、そこに立っていた。

拓郎だった。

「言ってたか？そんなこと。」

とぼける様な口調で言う啓太の脛を軽く蹴ってから、拓郎は僕に歩み寄ると、僕の二の腕をポンと叩いた。

「久しぶり。」

そっけない、淡々とした声色。

ただ、そうやって拓郎も、啓太と同じように照れを隠しているのだと、少し落ち着かない目線を見て、悟った。僕は小さく笑んで、頷いて、その声に答えた。

「ずいぶん淡泊な挨拶だな。10年ぶりなのによ。」

啓太もきつと判つていながら、わざと冷やかすように言う。自分のことは棚に上げて。

拓郎もそれを察して、戒めるように、さっきより強く啓太の脛を蹴りつける。啓太は大げさに、痛がつて見せる。懐かしい、昔ながらの二人の戯れ方が、微笑ましかった。

「思い切つて建て替えたな。」

僕はもう一度、劇的に様変わりした拓郎の家を見上げて、言った。

「俺は前からこんな感じにしたかつたんだけどな。昔みたいのじや、釣りに来たオツサンくらいしかよりつかねえだろ。夏場はともかくさ。やつぱりほら、商売事は女性客の心をつかまないと。」

どこか誇らしげに言つて、拓郎は腕を組み、鼻を膨らます。

「女性客、ね。」

結局拓郎も、そういうところは変わつていないのかと、僕が苦笑を漏らす。

「いや、やつぱりそこは重要だつて。」

啓太が言つて、拓郎に同意するように頷く。

その他愛ないやりとりに、僕は、不思議な暖かさを感じた。

長い間会つていなかった時間が、どこか僕らにぎこちなさを抱かせていたのは確かだ。でも、心のずっと奥のほうでは驚くほどスムーズに、二人の思考が入り込んでくるような感覚がある。きつとこんな感覚が抱けるのは、十代の頃に出会つた彼らに対してだけの、独特な連帯感のせいなんだろう。そんな連帯感を抱けることに少し、胸が熱くなった。

「今日は、戻らないんだらう？あつちの家には。」

急に、何かをぼやかすような口調で、拓郎が訪ねる。

啓太と同じように、僕の家のことに触れようとすると、拓郎も曖昧な、腫れ物に触るような声色になる。その重く湿つた雰囲気僕が抱かせてしまつているのが判るから、申し訳なく思う。

「明日、帰るつもりだよ。おふくろにも明日ここに着くように伝

えてあるし。今日はまだ、到着してないことになってるんだ。」  
できる限り明るく、取り繕うように、僕が答える。

「よし。それなら今日の夜は『潮騒』で飲むぞ。」

拓郎も僕に習って、今度は軽い口調でそう返すと、「野郎3人ですか？」と啓太がからかうように横槍を入れた。それで、場の空気が元に戻る。行き過ぎる時もあるけれど、啓太のこの軽薄さは昔から、僕や拓郎では補いきれない場の淀みを、拭い去ってくれることがあった。

「美咲と優希も誘ってあるんだ。淳に会いたがってる。」

その時、不意に拓郎の口から漏れた二人の名前に、僕の胸が軋んだ。正確には、優希、という名に。

「あの二人かよ。」

露骨に落胆してみせる啓太に、「贅沢言つなよ」と、拓郎が啓太の頭を小突く。

「優希は、こっちに帰ってきてるのか？」

ふてくされる啓太を尻目に、少し動揺する面持ちを抑え、そっけなく装って、僕は拓郎に尋ねた。

「ああ、大学出てすぐ。ずっとオーシャンヴィユで働いてるよ。」

拓郎は商売敵でもある、この島で一番大きなホテルの名を少し忌々しげに挙げて、そう答えた。

優希が、この島に戻っている。

意外だった。僕が優希を一番知っている頃のことを考えれば、彼女がこの島に戻っていることには、違和感があった。

そして気がかりな事が、もうひとつ。

果たして、彼女だけなんだろうか。この島に戻り、この島で暮らしているのは、彼女独りなのか。

脳裏に浮かぶ彼女の姿の後ろ側に、もうひとつの人影が過ぎる。見たことのない、小さな、人影。

また、胸がきしりと、音にならない音を体の中に響かせる。

「んじゃ、俺は帰って寝るよ。淳は夜まで、どうすんだ？」

啓太の声で、我に返った。慌てて、返す言葉を捜す。でも、見つからない。

「島を回ってくるなら、バイク貸すぞ。」

僕が答える前に拓郎がそう言ってくれて、助けられた気分になる。「借りるよ」と、勢いでそのままその提案に便乗した。声が、微かに震えていた。

「なんだよ、仕事明けじゃなけりや俺も付き合っのによ。」

悔しそうに漏らす啓太の言葉は、しっかりと僕には届かない。胸の中ではまだ、歪な、軋むような音が響いていた。

美咲と優希は、啓太や拓郎と同じく、北中出身のクラスメイトだった。

少し釣り上がった目尻の与える印象どおり、気の強い気質でどこか攻撃的な美咲と、大きな瞳を伏せがちにして、いつも自信無さそうに眉を下げて微笑んでいる優希。対照的な雰囲気を負っている二人は、いつも一緒だった。そして二人とも、同級生に留まらず、上級生から下級生まで、同じ高校に通う男子生徒たちには人気があった。否応なしに異性を惹きつける容姿を、二人揃って携えていたからだ。

でも、美人が二人並ぶと近寄りがたい、という少し不可解なオスの心理を、僕も含めた、同じ高校に通っていた男子生徒の殆どが、この時実感していただろう。二人がどんなに魅力的でも、実際は遠巻きに二人を見つめているだけで、誰も彼女らに進んで、「そういう目的」で声をかけるようなことはしなかった。

声をかけない、というスタンスにおいては、驚いた事に啓太と拓郎も同じだった。が、彼らの場合、僕や他の男子生徒たちとは、根拠が違った。

「タメには興味が無い。」

冷めた口調できっぱりと二人は言い切っていた。そして、強がっている様子でもないのが、僕には不思議だった。いつも島の外からやってくる女の子たちの後を追いかけているにもかかわらず、すぐ側の、彼らの言葉を借りれば「スペシャル」に分類されるであろう彼女たちには、本心から興味を抱いていない。殆ど無差別に声を掛け捲るくっつけているくせに、美咲と優希に対するその態度は、理解しがたかったし、今でも二人の真意は判らない。

ただ、啓太と拓郎が声をかけなくても、あちら側が興味をもてば、話は別だ。いや、正確には、興味ではなかったのかもしれない。

「あんた達さ、あんまり島の恥をさらすような真似しないでよ。」  
僕ら、正しくは啓太と拓郎が、旅行者に声を掛けるという、悪趣味な日課に精を出しているところを見かけると、決まって美咲がからんできた。

本土からのフェリーが行き来する港の商店街で、両親が土産物屋を営む美咲にとっては、恐らく啓太や拓郎のこの日課が、営業妨害になると半ば本気で憤って、半ば呆れていたんだろう。

そんなことは気にも留めず、はいはい、と軽くあしらうような返事を返す啓太と拓郎。それに触発され、更に興奮して彼らを一通り罵ると、

「あんたも本当はそういう人種じゃないでしょ。何でこいつらに付き合うわけ？」

と、美咲の憤りの矛先は、最後はいつも僕に向いた。打つても鳴らない鐘のような啓太や拓郎より、僕を攻撃して何とか気を紛らわそうとしていた。そういうサディスティックなところが少し、美咲にはあった。

そしてエスカレーターしていく美咲の勢いに僕がたじろいでいると、美咲の後ろから困ったような細かい声が飛んでくる。

「サキちゃんもういいでしょ？」

苦笑を浮かべながら親友にブレイキをかける優希に救われて、僕らはいつも、何とか解放された。そしていつのまにか、そんなやりとりが日常になっていた。

仲が良いとか悪いとかいう事の、本当の本質は僕には判らない。でも、歪な形にせよ、そういう毎日が続き、一緒にいる機会が増えたことで、僕らと彼女らとの間に、不思議な仲間意識のようなものが生まれたのは、確かだった。美咲を煙たがりながらも、啓太も拓郎も、そのシチュエーションを楽しんでいるような雰囲気、しばらくしてから見せるようになった。

『潮騒』という名の、島では唯一、高校生の僕らにお酒を飲ませ

てくれるお好み焼き屋が、いつからか僕ら5人の溜まり場になっていた。

俺はもともと東京のやくざ者だったと、いつも嘯く坊主頭の店長は、確かに良く見ると強面ではあったけれど、睨みを利かすよりもニヤケ面の似合う、スケベそうで、いい加減な感じのオヤジだった。逆にそのいい加減さが、僕らにとっては、周りにいた他の大人たちよりも窮屈な感じがしなくて、馴染みやすかった。

高校2年の夏休み直前、そんな店長の、「バイクくらい転がせねえと、女にはモテねえぞ。」なんて口車に乗せられたのは、啓太と拓郎だった。

二人はさっそく僕も巻き込んで、教習所へ通うための費用を捻出するべく、『潮騒』でアルバイトを始めた。僕だけは最初から、人手の足りない夏場の店の経営に、人件費格安の高校生を使いたくて、店長が意図的にそんな事を啓太と拓郎に吹き込んだに違いない、と気づいていたが、盛り上がる二人に水を差すことができず、二人はまんまと担がれ、僕はいつももどおり、引きずり込まれた。

お盆がすぎたあたりでバイトから開放されて、合宿形式の教習に慌てて参加して免許を取った時には、夏休みは終わっていた。そこで啓太と拓郎も、ようやく自分らが良いように利用されたことに気が付いた。

「私は知ってて、あえて教えなかったんだけど。」と、美咲は僕らを笑った。バイト期間中、何度も冷やかしに店に顔を出していた美咲が、何かを含むようににやけていたのを、僕は知っていた。

ブレーキ役の優希はこの時、美咲を止めるといふより、僕らを哀れむような表情で、決定的な一言を漏らした。

「肝心のバイクは、どうやって手に入れるの？」

その台詞に茫然自失とした啓太と拓郎の表情は、傑作だった。同じく当事者であるはずの僕までも、思わず噴出してしまっほほどに、可笑しかった。

バイクを手に入れる当てなど無く、ただただ闇雲に、免許を取る

ことだけに二人が意識を集中してしまっていたのは、バイクそのものに乗りたいのではなくて、あくまでも女の子の気を引く道具として考えていなかった、二人の邪な姿勢が招いたものなんだろう。

「自業自得。ホント、バカ。」

美咲もそれを察して、更に二人を突き落とす。厨房の向こうから聞こえてきた店長の下品な笑い声が、最後にとどめを刺した。

退屈なように退屈でない、無為であるように貴重に思える、毎日だった。

啓太と拓郎、そして美咲と優希がいつも僕の周りにいた日々は、そんな矛盾した不思議な感覚を僕の中に残して、ゆっくりなのか早いのか判らない曖昧なスピードで、でも確実に、過ぎていった。

シートから伝わってくる振動が心地よかった。久しぶりのバイクの感触に、暫くの間僕は、無心で酔った。

島を一周する街道を北へと走り、北端から今度は、島の東側へ回り込んで、南下する。キャンプ場が乱立する地区を越えると、熱帯植物が群生する森と、乾いた砂の更地とが交互に過ぎ去っていく。砂の更地は、僕が生まれる以前に起こった噴火の爪跡だと聞いた事があるが、生まれたときからずっと、島の中央に静かに佇むあの山が噴火したなどと、体験したことのない僕にとってはリアリティが無かった。

フェリーの着いた棧橋とは、その山を挟んでちょうど東の反対側にある小さな岬で、僕は拓郎から借りたバイクを停めた。

ドラッグスター400。

免許を取って、あの時のショックから立ち直った拓郎が、ようやく本当の意味でバイクに興味を持ちはじめた時、しきりに欲しい欲しいと漏らしていた、アメリカンタイプのマシン。ロングフォークの不安定なデザインは、飛ばしたがりの僕向きではなかったけれど、それでも、バイクに乗る機会すら無くした今となっては、シートを跨げるだけでもそれなりに幸せだった。

バイクを降りて、街道脇からなだらかな勾配の続く岬の先端まで、一応は踏み均なされた、獣道のような緩い坂を登って行く。

昔から、観光客はおるか、地元の間人も滅多に、訪れることのない場所だった。観光地でよく耳にするような不吉な噂話があった訳でも、誰かの私有地で、立ち入りが禁じられている訳でもない。単純に、ひと気のない島の東の端の、このちっぴけな岬に誰も何も、用事がなかっただけなんだろう。

別に、図ってここへ来た訳ではない。が、坂を登りきり、岬の先端に到着した時に、僕は、そういえば父はこの場所が好きだったな、

と不意に思い出した。

父も、ここがひと気の無い場所だということを良く知っていた。知っていたからこそ、父はこの場所が好きだった。女性との関係には無秩序で無差別なくせに、それ以外の人間関係を極端に嫌っていた父は、独りになれるからという身勝手な理由で、この場所によく足を運んでいた。

一度だけ、父と二人で、この岬を訪れたことがある。やはり今と同じような、梅雨の前の時期。黒いキャミソールを着た女が家を訪れたあの夏休みを、迎える直前だったはずだ。

『どこまでを人殺しと言うのかな。』

岬の先端で、僕と並んでレジャー用の折り畳みチェアに腰掛けたその時の父は、スケッチブックの表面に芯の柔らかい鉛筆を走らせながら、呟くように言った。

『え？』

その真意を汲み取れず、間拔けな声で聞き返す僕に、父は、忙しく動かししていた手を止めて、弱々しく笑って見せた。そして再びスケッチブックに目を戻すと、黙々と、静かに波を弾く眼下の海岸線を、白い紙の上に描き始めた。

今でも父が漏らしたその言葉の意味は判らない。でも、父の見せたその時の、何かに打ちひしがれたような表情は、僕の瞳の裏側に、何故か妙に鮮明に焼きついていた。

ふと人の気配を感じて、僕は我に返る。

いつの間にか、誰かが背後に立っている、とその気配で察した。

いったい誰がこんな辺鄙な場所を訪れたのだろう、と思い、自分もそんな場所にいるんじゃないかと、苦い笑みを漏らしながら振り返り向いた。

「独りでにやっていると、キモいよ。」

若い女の、高くて、少しからかうような乾いた声と同時に、まず淡い赤が視界に飛び込んできた。その後、短いデニム地のスカートと、そこから伸びる白い脚。ああ、あの娘かと、顔を見る前に判

った。

「なんかさ、視線がエロいつて。やっぱりスケベオヤジだね。」  
馬鹿にしているのか、呆れているのか、それともその両方なのか、  
掴みづらい表情を浮かべながら、彼女は笑った。

「オヤジと呼ばれるほど、歳は離れてないと思うんだけど。」  
言いながら、変なところを気にかける自分が滑稽に思えた。オヤジ  
と呼ばれることに、むきになって抵抗しているようで、ちょっと情  
けなくもなった。

「何でこんなところにいるの？こんな辺鄙なところに。」  
彼女が問いかけてくる。こんな辺鄙、とさっきまで僕が思ってい  
た通りのことを口にしたので、どきりとする。

「君だって、なんでいるんだ？こんなところに。」  
胸の中に沸いた小さな動揺を誤魔化すように、僕が返した。少し  
卑怯な返答だな、と思った。思ったそばから、彼女は容赦なく、そ  
こを突っ込んでくる。

「私が先に聞いたんだから、先に答えてよ。」  
虐めを楽しむ子供と同じ、軽薄で、乾いていて、無責任な好奇心  
が籠った口調。僕がたじろいで黙っていると、別に良いけど、と呟  
いて、僕の横をすり抜け、岬の先端に彼女は立った。

「うん、確かに綺麗だ。」  
岬の淵に建て付けられた木製の手すりに手を置き、上半身を少し  
乗り出すようにして、彼女はそこから見える眼下の海岸線を眺めな  
がら、言った。

僅かに吹きつけてくる海風に、彼女の長い髪がさらさらと、揺れ  
る。それまでは、少し艶のある彼女の存在感が、島の純朴な景色か  
らは浮いて見えていた。でもこの時の彼女は不思議と、目の前の風  
景に溶け馴染んでいるように思えた。

「親父の好きな場所だったんだ。」  
彼女の華奢な背中に向けて、僕は答えた。

父のことを口にするのは少し抵抗があったけれど、変に取り繕う

のも面倒だった。

「だった？過去形？」

背を向けたまま、彼女が言う。

「死んだんだ。」

わざと軽い調子で僕が言うと、彼女は、「それは……」と少し困ったように間をおいてから、「どうも。」と、多分、彼女にできる最大限の憂いを込めて、付け足した。

「君はこの場所を、誰かに聞いたの？」  
今度は僕が尋ねる。

「知り合いに。」

彼女の、そっけない返事。やはり僕に背を向けたままで、言う。

「その知り合いは、この島の人？」

「ちがうよ。」

「よくこんな場所を知ってたね、その人。地元の間人だって、そうそう来ることないのに。」

「マニアックなの、そいつ。」

彼女は背を向けたままだったけれど、僅かな肩の揺れで、笑ったな、と判った。その知り合いを冷やかすようできて、どこか、情とつか、暖かさを含んだ声色だった。

それとなく、その相手は男性なんだろう、と察した。恋人かな、とちらりと勘ぐった。何を考えているんだと、慌てて、その空想をもみ消した。

それから僕は、後に続く言葉を見つけられずに、黙り込んだ。無理に探すのも億劫だったから、暫く黙ったまま、彼女の背中とその向こうの海を、見ていた。

彼女も何も言わず、動かなかった。彼女の長い髪だけが、柳の枝のようにしなやかに揺れていた。

静かだった。殆ど凪いだ海が海岸に打ち付ける小さな波の音も、耳鳴りのように遠くに聞こえて、この空間だけ時間がゆっくりと進んでいるのではないかと、錯覚した。

「ねえ。」

不意に彼女は言っ、振り向いた。あまりに唐突だったから、僕は思わずびっくりと、体を震わせた。

振り向いた彼女を、正面から見据える。やっぱり、綺麗な顔立ちだった。シャープなようできて、ここぞという所の曲線が、絶妙なバランスだった。そして、そこかしこに残るあどけなさの奥に、しっかりと芯の通った強さのようなものも感じた。不思議な魅力だなと胸のうちで関心するように頷いた。

「どこまでを人殺しと言うのかな。」

それは、唐突だった。

何の前触れも脈絡もなく、その言葉が、彼女の口から漏れた。僕は一瞬、幻聴かと思った。ついさっき脳裏に蘇った父の声と恐ろしいほどにシンクロして、不吉に、それでいて妙に澄んだ波長で、僕の頭の中に響いた。

金縛りと言うのは、こういう感じなんだろうか。体が動かなかつた。膝だけが、僕の意味とは無関係に、小刻みに震えていた。冷たい汗が、頭皮をじわりと湿らした。

「なんて、ね。」

と呟いた彼女の声が、僕をこの訳のわからない呪縛から開放してくれる。体からすっと、力みが抜けた。呼吸をするのも忘れていた。少しあがった息を、彼女に悟られないように、静かに、整えた。

彼女はいたずらっぽく微笑むと、何事もなかったかのように軽やかな足取りで、再び僕の横をすり抜け、街道へと続く坂道を降りていった。

今のは、なんだったんだろう。

どこかから誰かの意思が、この丘の上の空間に迷い込んできて、彼女の体を借り、さりげなく顔を覗かせたような、感触。

誰の？

・・・父の？

思っ、大きく身震いした。

僕は多分、単純に父の浮気を許せなかったわけじゃない。

それだけのことで、こども胸の中を乱されたりはしない自信はあった、と思う。

家を半ば捨てたような父よりもむしろ、母の中途半端な弱さのほうに、僕にとっては苦痛だった。

そう、中途半端なのだ。逃げ出すわけでも、立ち向かうわけでもなく、かといって潰されてしまうほど弱くも無い。その半端さのほうに、とてつもなく痛かった。父を憎んだのは、その痛みをごまかす為の虚勢のようなものだった。

それを確信したのは、高校3年の7月半ば、夏休み直前に、僕が季節外れの大風邪をひいて寝込んでしまった時だ。

啓太と拓郎に、僕と父や母との間に横たわった歪みを知られてしまった時でも、あった。

その日、タイミングの悪いことに、父が数日前から家に戻っていた。

僕の寝込んでいる間、母は看病にかこつけては、父を避けるように僕の部屋に頻繁に出入りしていた。本当は父にすがりたいくせに、父と真っ直ぐに向き合うことを恐れて、そんなふうな僕に逃げ場所を求める母に、苛立ちと鬱陶しさを感じながら、僕は自室のベッドに籠っていた。

夕方近くになって、朦朧とする意識の向こう側から、二つの異なる排気音が聞こえてきた。部屋のすぐ下の玄関前でその音が止んだ時、ようやくそれが、啓太と拓郎のバイクであることに気付いた。

4ヶ月ほど前の春休みに、二人は家業を継ぐ事を条件にして、親から貰った資金で念願のバイクを手に入れていた。

『どうせ家の仕事以外、俺らに将来はないんだし、このまま黙っ

てても継ぐことになるのによ、こんな口約束だけでバイク買って貰えるなんて、親も馬鹿だよな。』

啓太は自分のマシンを手に入れた嬉しさに、無防備に顔をほころばせながら、そう言っていた。

でも、僕には判った。啓太の親も拓郎の親も、きつとそんなことは承知の上で、あえてそうしたのだ。それが、普通の親が子に対して抱く愛情で、ただ、ストレートに表現してしまうには、威厳だとか、体裁だとか、照れだとかいうものが邪魔をしてしまうから、それっぽい建前で本心をぼやかしているのだ、と。当たり前前の愛情を当たり前のように与えられている二人に、僕は身勝手だとは判りつつも、嫉妬していた。

部屋のドアがノックされ、僕が返事を返す前に、二人が部屋に入ってきた。

僕はふらつく頭を僅かに上げて、よう、と擦れた声を投げた。

「生きてるみたいだな。」拓郎が言い、「生きてる、生きてる」と啓太が続ける。軽い、からかうような口調だったが、どこか安堵を滲ませた声色だった。それが判って、少し嬉しくて、少し、照れた。

「初めてなんだよな、淳の家に来るのってさ、意外なことに。」

啓太は、僕の部屋のあちこちに視線を走らせながら言い、

「何でか知らんけど、お前、避けてたもんな、俺らがこの辺に近寄るの。」

拓郎も啓太につられて、部屋の中を物珍しそうに見回した。

二人の不思議がる事は、僕にとっては当然の事だった。この家から遠ざかる為に二人とつるんでいたのだ。二人といる時にここに帰るなんて、その時の僕にとっては本末転倒でしかない。でももちろん、そんなことを口にはできない。だから、「避けてねえよ、バカ」と、曖昧な返事でごまかした。

それからしばらく、二人はいつものように、どうでもいいことをだらだらと話し続け、僕はぼやけた意識のままそれとなく、相槌を

打った。

一通り話し終えて、話題が尽きた頃だった。

「お前もさ、親に頼んで買ってもらえよ、バイク。」

啓太が唐突にそう言い出した。

二人がバイクを手にした頃から、いつかは聞かれるだろうと思っていた事だった。予測はしていたから、どうやって話をそらすか、頭の中で何度かシミュレーションをしてはいた。でも、実際に目の前でその台詞を聞かされると、上手い具合に頭が回らなかった。熱のせいだったのかもしれない。口ごもっていると、拓郎も、啓太の言葉に続けた。

「そうだよ。お前の親父って画家なんだろ？儲かってんじゃねえのか？この家もでかいしよ。結構、俺らの親なんかよりもあっさり買ってくれたりして。」

二人とも無責任に軽い口調だった。悪気がないのは判っていても、触れて欲しくないことをあっさりと口にされ、僅かに頬が震える。

「いいよ、別に。」

絞り出すような声で、僕はそう答えた。そうとしか、答えられなかった。

何も知らないくせに軽々しく言うなど、お前らは親を忘れさせてくれる為の存在じゃないのかと、理不尽な憤りがふつふつと胸の奥で沸いた。理不尽だと十分に判っていたから、それを 必死に抑えた。

でも、まるで僕が必死に抑えているその高揚を更に煽るように、啓太がしつこく食い下がる。

「お前さ、親の脛をかじれんのも今だけだよ。言うだけ言ってみろって。」

拓郎も、「良いこと言った、今。」と煽る。「だから、いいつて。」と返しつつ、僕は膨れる苛立ちを、抑える。そこで、ノックと同時に部屋のドアが開いた。

母だった。

何で今、入ってくる？

母を睨んだ。母は気付かなかった。もしかしたら気付いていて、気付かない振りをしているだけだったのかもしれない。とにかく、母の視線は僕の視線と交差しなかった。

トレンチに乗せたコップを二人に手渡しつつ、「お見舞いありがとね。」などと、愛想笑いを浮かべる母が、妙に醜く見えた。それまでは啓太と拓郎に向いていた憤りが、母へと向き直り、その激しさを更に増していった。

出て行け。

心の中で叫ぶ。でも、母には届かない。

「ごめんね、今の話、聞こえちゃったんだけど、もし良かったら私からお父さんに頼んでみようか？」

目を合わせずに、母が僕に言う。何を言い出すのかと、その横顔を睨む。

出て行け。

もう一度、無言で叫ぶ。やはり届かない。母は僕に顔を向けたが、視線は、僕に向かない。僕の顔の僅かに脇をすり抜けて、その後ろの壁を、母の視線は捕らえている。微妙にズレたその視線が、胸をむかつかせる。母を助長するように、「おばさん話わかるね」とはやし立てる啓太の音が、曖昧にぼやける。

やめろ。やめてくれ。

「お父さん、ちょうど帰ってきてるし、今、ちょっと聞いてみるね。」

母は僕の想いを反故にするように、続ける。そこで、弾けた。

「ふざけるなよ！」

僕は、叫んでいた。今度は、声に出して。啓太と拓郎の見開かれた眼差しを頬に感じた。目の前の母も固まっていた。でも、それでも、僕は止まらなかった。

「そうやって理由をつけなきゃ親父と話もできないのかよ！違うだろ？本当はそんなことを親父に聞きたい訳じゃないんだろ？東京

で親父が困ってる女のことだろ？ほっぽらかしてるこの家のことだ  
ろ？ちゃんとあんたを見て欲しいってことだろ？なあ、違うのかよ  
！それができないからって、俺をいいように利用するのはやめろよ  
！」

一息に言った。

僕の声の後に、キン、という金属音が尾を引き、それで、空気が  
固まった。沈黙が、重かった。息苦しかった。窓の外から入り込ん  
でくる蝉の声だけが、妙に空々しく、部屋の中をぐるぐると回って  
いた。

あの岬からずっと、背中に得体の知れない気配がこびり付いていた。それを振り払おうと、僕は拓郎のドラッグスターを夢中で走らせた。島を取り巻く街道を、ただ、ひたすら周回した。

『どこまでを人殺しというのかな。』

走っている間も、父のものなのか彼女のものなのか、はっきりと区別できない声の響きが、耳の裏側で何度も蘇っては、消えた。その度に体が震え、危うくバランスを崩しそうになったりもした。

あの、一致。

あれは単純に偶然なんだろうか。それともやはり、どこかに残っていた父の意思が、彼女の中に入り込んだのか。

また、身震いした。毛羽立つ悪寒を払おうと、クラッチを抜き、アクセルを派手に吹かして、再び、走り出す。同時に、くだらないことにびくついている自分が滑稽になり、ヘルメットの中で小さく声に出して、笑った。

一体、島を何周しただろう。

いつのまにか、東の空から夜の藍色が降り始めていた。道が暗がりに包まれたし、突然視界が狭まった圧迫感で、僕はようやく正気に戻った。

路肩にバイクを停める。フルフェイスのヘルメットを脱ぐと、湿った潮の香りが直に鼻を衝いた。そのままその香りを深く吸い、そして吐く。それで何とか、泡立つ胸中を鎮めることができた。

遠くで、波が碎ける音がする。まるで小さなノイズのように、それは僕の鼓膜を僅かに揺らした。

懐かしい音だった。この島に暮らしていた頃は、殆ど毎日、このどこか物憂げで、どこか甘ったるい音の響きを、耳の中に溜め込んで、揺らして、独り、もてあそんだ。暗いやつ、と言われればそれまでだが、でも、いつもささくれ立っていた僕の胸中は、そうやっ

ていると決まって、なだらかになった。

ふと、『潮騒』で飲もうといっていた、拓郎との約束を思い出した。拓郎の家へ戻らなければと、辺りをうかがった。あまりに夢中で走っていたから、すぐに自分が今いる位置がわからなかった。

少し前方の木々の隙間から、神社の鳥居が見える。

島の北端に差し掛かる手前にある、小さな稲荷神社。赤い鳥居が夕陽を受けて鈍く光り、夕闇の中で不自然に浮いている。ここからなら、今来た道を引き返して南下する方が、このまま進むより遙かに早かった。

ヘルメットを被りなおしてから、バイクをターンさせ、ヘッドライトを燈す。まだ若い夜の紫に染まりかけた路面が、鈍く反射して浮き上がる。

あの声がまた、頭の奥に響く。それをもみ消すようにアクセルを二回吹かして、バイクを走らせた。

拓郎の家についた頃には、夕暮れの朱色よりも、夜の藍色の方が強さを増していた。

玄関先にバイクを停める。目の前に建つ洋館は、2階の端の部屋にだけ灯りが燈っていて、1階も他の部屋も暗く、人の気配が無かった。

玄関口に歩み寄ると、メモ紙が貼り付けられていることに気がついた。それをはがして、手に取る。殴り書きで、先に行く、早く来い、とだけ書いてあった。昔よく目にした、啓太の乱暴な筆跡だった。

踵を返し、『潮騒』へ向かおうと思った瞬間、気配を感じた。反射的に振り向いた。

誰もいなかった。

夜を前に脆弱になった夕陽を受けて、赤黒く染められている拓郎の家の壁が、そこにあるだけだった。灯りのついた二階の端の窓が、妙に違和感を放ちながらおぼろげに輝いていた。

拓郎の部屋、じゃ、ないな。

なんとなく、そう感じた。

そういえば港に着いたときに啓太が、僕以外に客が泊まる予定だと言っていたことを思い出す。だから卓郎は迎えにこれなくなった。きつと、あの部屋にいるのは、その僕以外の客、なんだろう。気を取り直して前を向き直り、再び歩き始めた。

『潮騒』は、拓郎の家から程近い、この島で一番大きなビーチの南端にあった。

シーズン前の、閑散とした海沿いの道を抜けると、その、昔と変わらない、古びた木造の建物が目に入り、途端に、僕の足取りは重くなった。

美咲と優希も誘ってある。

そう拓郎は言っていた。それが多分、僕の歩みを鈍くしたものの正体だ。

優希、と口の中で小さく呟いてみた。刹那、昔の記憶のディテールが頭の中であふれ出しそうになり、慌てて思考を逸らす。

馬鹿か、俺は……。もう一度、口の中で呟いた。

店の軒先に立つと、更に僕は臆した。暖簾の向こうの引き戸越しに聞こえてくる啓太とおぼしき豪快な笑い声が、否が応でもその対面に座る面々を想像させて、僕を踏みとどまらせた。

しばらくそうやって店の前で立ち竦んでいると、唐突に肩を叩かれた。

あまりにも突然だったから、僕は驚いて、飛び跳ねるように振り返った。肩を叩いた相手も、まさか僕がここまで大きなリアクションをすると思っていなかったのか、「きゃっ」と小さな悲鳴を上げた。

立っていたのは、優希だった。

両手で口を押さえ、驚きで目を見開いて、彼女は僕を見据えていた。

「・・・ひさしぶり。」

硬直したままで、僕がようやくそれだけ言うと、彼女は口に当てていた手を胸に置きなおし、安堵したように大きく溜息を突いた。そして、小さく笑った。

「驚かすつもりは無かったの。ごめんね。」  
言って、眉を下げ、笑みを深くする。

昔と変わらない優希の笑顔が、軒先から漏れる店の灯りに照らされて、闇の中に淡く浮いた。それまで会うことに躊躇っていた自分を無意味に思わせてくれるくらい、邪気の無い、無垢な笑顔だった。

「こつちこそ、ごめん。逆に驚かしたみたいで。」  
ようやく僕の肩からも、力が抜けた。

「ひさしぶり、だね。」優希が言った。  
「そうだな。」僕が、返した。

優希はしみじみと、僕を見つめる。照れくさくて、僕は視線を逸らした。逸らした途端に、またふと、小さな悪寒と共に疑問が沸く。優希は今、独り、なのか。

過去が、再び僕の頭の中にあふれた。今度は、上手くそれを追いやることができなかった。

「別に、淳に何かをしてくれとは言わない。でも淳の言う通りには、できない。」

6帖の狭い部屋の中に、優希の少し震えた、それでいて芯の通った声が響いた。夏の夜の湿った空気の中でそれは、思いのほか反響して、永遠に余韻を残し続けるのではないかと僕に錯覚させた。

島を出て2年が過ぎ、僕が二十歳になった頃。

ようやく、自分が目指すべき先が見え隠れし始めた、アメリカへ渡る二ヶ月ほど前の時期だった。

高校を卒業してすぐに、僕は島を出た。

別に何か目的があつた訳じゃない。ただ、自分の居場所がなくなることを恐れて、知らない世界へと逃げ出しただけだ。

自分の、居場所。

高校生の時は、啓太や拓郎の存在自体が、唯一気を休められる僕の居場所だった。そしてそれはいつまでもずっと僕の側にあるものなのだと、根拠も無く信じて疑わなかった。でも、違った。

卒業の日が近づくにつれ、僕らが学校の外で会う時間は、徐々に減っていった。

親の後を継いで漁師になると決心した啓太は、学校の無い日は前日の夜から、彼の父と一緒に海に出るようになった。拓郎も拓郎で、家業の民宿を手伝うからと出歩かなくなり、二人ともそれまでのような、自由に浪費できる放課後の贅沢な午後を失くしてしまった。

僕は、取り残された。

僕と同じだと思っていたその頃の二人には、原因や理由はともかくとして、もう既にしっかりとした将来のビジョンがあつて、僕には無かつた。それが悔しくもあり、寂しくもあり、身勝手だけれど、裏切られた気分にもなったりした。

だから卒業後、僕は島を出た。目的も無く、ただ、逃げるように取り残された自分を、うやむやのままに消し去りたくて。

僕と同じ時期に島を出たのが、優希だった。

僕らの高校では、年に一人いるかないかの、大学進学者として。

「私、役者になりたいの。」

別に示し合わせたつもりは無かったけれど、島を出るフェリーは優希と一緒にだった。甲板の上で、優希は初めて、上京の本当の目的を僕に語った。

「ちっちゃい劇団でいいんだ。ちっちゃくても、仲間と自分達だけの劇団を、持ちたい。別に誰でも知ってるほど、有名になんかならなくてもいいの。自分のやりたい芝居をやりたいようにやって、それなりのお客さんが入って、芝居だけで食べてさえいければもう、それでいいの。」

物静かだった優希からはなかなか想像できないほど、熱く、彼女はそう語った。僕に、というより、自分に言いかけせるような口ぶりだった。

そして東京の棧橋で別れた。それきり、3ヶ月は会わなかった。会ってしまうと、負けた気分になるような気がした。

負ける？誰に？

判らない。

とにかくその時は、そう思った。

僕は僕で張り通さなければならぬ意地があったし、優希には、親にすら告白できていない本当の意味での上京の理由があった。そんな同郷の二人が寄り添ってしまうのは、何故か、負け、としか思えなかった。

でも、東京と言う街が若い来訪者に強いる孤独は、想像以上に大きくて、きつとそれは優希にとっても一緒に、だからなのか、島を出て半年後には、僕たちはどちらともなく呼び出しあい、会うようになり、そして、付き合い始めた。

昔から優希が好きだったのか、優希も昔から、僕を好いていてく

れたのか、それは判らないし、判ったところで現実はきつと変わらなかつただろうと、今でも思う。とにかく、独りで立っていることが、東京と言う街ではとてつもなく苦痛だった。だから、寄り添った。同郷の出身というだけで、新しい誰かを見つけるよりも、寄り添うことが容易かつた。

そう。

他の若い来訪者たちが、苦勞して、その孤独を紛らわす相手を探すプロセスを、僕たちはお互いの存在を利用して省いたのだ。

動機が不純だったからなのかどうかは、判らない。けれど結末は、まるでその安易さを否定するように、僕らの意志の決定的なズレから生まれて、胸を深く抉<sup>えぐ</sup>った。

傷。

思いのほか深く、染みて、痺れる、傷。

人と人が寄り添うことを、僕ら、いや、少なくとも僕は、軽んじていたように、今は思う。

きっかけが安易で、自分の本当の気持ちの置き所もわからずに優希と付き合った、その軽薄さに対する報いが、罰のような形で、僕の目の前に舞い降りてきたような感じがした。

アメリカ行きを決意した時、僕は同時に、優希と別れることを決めた。

曖昧に、そして未練がましく、縮めるこのできない距離を間に挟んで今の関係を続けることが、僕にとっても優希にとっても、良いことではないと、言い訳がましい建前を胸の中で何度も繰り返しながら。

そして当時僕の借りていたアパートに優希を呼び出して、その思いを告げた夜、優希も僕に、繼げた。

妊娠した、と。

僕としか関係を持ったことが無いから、僕の子で、間違いない、と。

そして、産む、と。

一瞬思考が止まり、次に僕を引き止めるための嘘だ、と勘ぐった。すぐに、優希がそんな性分じゃないことに思い至って、僕は、返す言葉を見つけられずに、黙り込んだ。

「別にね、一緒になっただけでほしいとか、認知して欲しいとかは、思っ  
てないの。淳を引き止めるつもりもないし、養育費とかそういう  
のも、淳に求めてない。ただね、産みたいの。産んで、育てたいの。」

どこか淡々とした口調だった。でも、胸の中に溢れそうな感情を  
必死に抑えながら言っているのだと、僅かに震える語尾で判った。  
判ってしまった。

「芝居はどうすんだよ。子供がいたら、無理だろ？」

あえて、自分の思いとか、動揺とかにフォーカスされないよう  
な質問を選んで、口にした。卑怯だと思ったが、それを卑怯と認め  
られないほどに、僕は若かった。

そんな胸中をまるで見透かしたような、僕を鋭く射抜く優希の目  
線に、僕はたじろぐ。

「芝居は続ける。それはもう、死ぬまで、ずっと、絶対。子供も  
育てる。」

優希の声は、熱く湿っていて、らしくなかった。「無理だよ」と  
呟いた僕の声を、沈黙で撥ね退けるくらい強固な決意が、その後ろ  
にあった。

窮屈さを感じた。目に見えない何かに縛り付けられて、身動きが  
取れないような錯覚。その錯覚が妙に生々しくて、そこから開放さ  
れなくて、僕は、絞り出すような声で、言った。

「墮ろして、くれよ。」

言ってしまった後で、後悔と、開放感とが同時に僕の胸に満ちて  
きて、交わることの無い二つの感情に振り回されて、混乱した。そ  
の混乱すらわずらわしくて、僕はあえて開放感を選び取り、後悔を、  
無理やり胸の中から払いのけた。

その一言で、優希の背負っていた空気も変わった。

熱と湿り気をしきりに発していた彼女の纏った空気が、ずっと彼女の中に引っ込んでいくような感触だった。その感触が少し、怖かった。

「別に、淳に何かをしてくれとは言わない。でも淳の言う通りには、できない。」

それが、僕が優希から聞いた最後の言葉だった。

優希は言って黙り込み、暫く、ヤニで茶ばんだ僕の部屋の天井を見つめていた。そして気配も無く立ち上がると、僕の部屋を出て行った。出て行って二度と、戻らなかった。

「とりあえず、入る。みんな待つてるよ。」

優希の言葉で、僕は我に返った。

僕の顔に鬨りが落ちたことを、優希が悟ったかどうかは判らない。悟ったとして、そこにどんな意味が込められているのかと、彼女が想像したのかどうか、知る由も無い。

とにかく僕は、反射的に取り繕うように笑みを浮かべて、優希に頷き返すことしかできなかった。柔らかい微笑みを返してくる優希の本心は、やはり、見えなかった。

「いらっしやい！」

優希に背をおされるように戸を開けると、店長の威勢のいい、でもどこか投げやりな声が飛んできた。僕の顔で視線が止まると、おお、と大袈裟に奇声に似た声を上げた。

「やっと帰ってきたか、この親不孝者。」

店長は狭い店内を小走りに駆け寄ると、乱暴に僕の頭を撫でながら、至近距離で大声で言う。耳がキン、と痺れる。

「すみません。ご無沙汰しちやいました。」

その勢いに気圧されて、身を引き気味に僕が言つと、店長は笑みながらも押し黙り、かみ締めるように何度も頷いてから、僕の頬を軽く張った。少し、目が潤んでいるようにも見えて、僕もつい、胸が疼いた。

その店長の背後の座敷席から、親不孝者、という言葉に必要以上に敏感に反応している啓太の引き攣った顔が覗く。僕は暗に、気になるな、と言う意味を込めて笑みを返した。僕の笑みに啓太がほつとしたように表情を緩める。同時に、懐かしい、昔よく聞いた声が耳に飛び込んできた。

「おそーい。」

ふてくされて、間延びした声。美咲だった。啓太と拓郎の対面に

向き合つて座り、手に持った空のビールジョッキを、憂鬱そうに僕と優希に向けて左右に振っていた。

「ごめん、拓郎にバイク借りて乗り回してたら、つい夢中になっちゃって。」

苦い言い訳をしながら啓太の横に腰を下ろすと、美咲に、手に持ったグラスで頭を小突かれた。

「その前に、言うことあるでしょ。」

美咲は言つて、ふてくされる。美咲が僕に求めている言葉は、すぐに判った。昔から変なところで、彼女は妙に儀礼的で潔癖なところがあつた。それは10年経つた今も、変わっていないのだと、僕は悟つた。

「ただいま。」

少し照れの混じつた苦笑と一緒に、でもそれなりにうやうやしく僕が言つと、美咲は満足そうな笑みを浮かべ、「おかえりい」と返した。酔いのせいか語尾があやふやにぼやけていたけれど、暖かさを感じさせる、柔らかい声色だつた。

「お前、あんまり下手なこと言うなよ。もう5杯空けて、結構いっちゃつてるからな、こいつ。絡まれると面倒だぞ。」

啓太の背中越しに、拓郎が小声で毒づく。美咲はすぐに察して、くしゃくしゃになつたお絞りを拓郎の横顔に投げつけた。

「余計なこと吹き込んでんじゃないの。昔からあんた達がそんな風にあること無いこと大袈裟に吹き込むから、淳がどんどん汚れてくんだから。本当は凄くいい子なのに、ねえ。」

まるで小さな子どもに言い聞かせるように、美咲が僕に同意を求めめる。僕が苦笑だけ返すと、それも気に入らなかつたのか、「しゃんとしろ！」と言いなから、今度は優希に出されたばかりのお絞りを僕に投げつけた。

「サキちゃん。」

落ち着いているのに妙に威圧感のある声で、優希が美咲を宥める。美咲の「み」の字を省いた、優希特有の美咲への呼びかけ方は、今

も変わっていないんだな、と僕は懐かしさに笑んだ。美咲が優希の言葉に素直に従ってしよげるところも、昔のままだった。

それからしばらく、僕は懐かしむように、高校の頃の話に夢中になった。

最初のうちは、どんな話題でも自分が中心に居座ろうと美咲が無理にしゃしゃり出ていたけれど、時折行き過ぎをたしなめる優希の合いの手と、まわり始めた酔いとにだんだんとその勢いも消されていつの間にか、壁にもたれるように寝入ってしまった。

そこで僕はふと、気付く。

意識して避けていたのかどうかは、判らない。でも誰も、こついう席ではありがちな、近況報告のような事は口にしなかった。ただひたすら過去の、僕らが毎日一緒だった日々の記憶をしきりに言葉に置き換えるだけで。それがどこか不自然で、僕の胸の奥ですつと、何かが引つかかっていた。優希の『今』を知りたがっていた僕が、単純に意識し過ぎていただけなのかも知れないけれど。

でも、そう。まるで狙い済ましたように、と僕が思ってしまうのもおかしくなくくらい、話の節々のどこからも、優希の『今』を感じ取ることができなかつた。何故この島に戻ってきたのか、そして彼女は僕の子と、どんな暮らしをしているのか。その気配すら、微塵も、感じられなかつた。

考えてみれば当たり前だ。

優希が僕の子を連れて、僕と一緒にではなく、独りで、この島に戻った。そんな話を、今、この場では聞きたくないし、他の誰も、わざわざすすんで話したがるはずも無いだろう。とにかく今だけは明日からまた繰り返される現実を忘れて、久しぶりに再会した旧友とただ単純に昔を懐かしみたい。そう思うのは、僕も、他の3人も同じなんだろう。だから誰も、『今』を口にしない。

でも、それでも・・・

時折盗み見るように、僕は優希に視線を投げた。けれどやはり、高校の時と同じように、少し後ろに引いて笑顔を絶やさない彼女の

内側を、その表情から覗き見ることはできなかった。

店長が店の中に暖簾をしまいこむ頃には、啓太も酔いつぶれて、小上がりの座敷の隅っこのほうで、大の字になっていびきをかいていた。その反対側の隅には、拓郎の上着をブランケット替わりにして丸くなる美咲が、やはり小さな寢息を立てている。取り残されるようにテーブルを囲い、安物の角瓶を水で割って啜る、拓郎と優希と僕。どれもみんな、高校時代によく、僕らがこの『潮騒』で陥った構図だった。昔のように店長が止めに入らない事実が、僕らも大人になったのだと訴えているのに、それでも、僕ら3人を取り残して、二人は寢息を立てる。

「変わらないのな。」  
「たまらずに、僕が言う。」

「今日はまだマシなんだよ。」  
優希は溜息混じりに、交互に二人に視線を投げてから、小さく笑った。

拓郎は舌を打ち、「そろそろ帰るか。」と言いながら、携帯電話を取り出す。

もう、終わりか。僕は二人に気付かれないように、胸の内側で溜息をついた。

結局優希からは何も、聞けずじまいだった。胸の奥にわだかまりを貯めたまま、今日は布団に潜り込むしかないな、と覚悟した。

「そうそう、いつも通り、『潮騒』ね。」  
拓郎は呆れたふうな口調で携帯に向かってそう言うと、電話を切り、溜息混じりにそれをズボンのポケットに捻じ込む。

「タクシー呼んだからさ。俺、こいつら送ってくわ。お前ら、さきに帰ってるよ。淳、お前の部屋、2階の端から二番目な。」

「じゃ、いつも通りお任せしていいかな。」  
言いながら優希は立ち上がり、身支度を整えだす。  
本当にいつも、こういう流れなんだろう。手際よく二人は、店を

立ち去る準備を始める。

僕はてきぱきと動き出す二人を、始めは呆然と見つめて、ようやく自分も席を立つ準備を始めたときに、気付く。

思いもよらずに、優希と二人きりになる機会が転がり込んできた、と。

シーズン前の、ひと気のない夜のビーチに響く波の音は、想像よりもはるかに大きかった。

耳のすぐ側で紙を擦り合わせているような感触が、鼓膜にまとわりつく。けれど不思議と、不快ではなかった。

砂浜に転がっていた流木に腰掛け、月明かりに淡く、微かに反射する波の白い泡粒を、焦点の合わない目線で見つめる。すぐ隣に腰掛ける優希の気配の温かさが、ひりひりと腕に染みてくる。

誘ったのは、優希だった。

拓郎と、酔いつぶれた啓太と美咲とを乗せたタクシーのテールランプを眺めながら、「海、見てかない？ひさしぶりに見たくない？故郷の海。」と言って、誘ったのは、優希だった。

どうやって話を切り出そうかと思っていた矢先だった。まるで僕の心の中を見透かしたようなタイミングに驚きながら、僕は曖昧に頷き、二人で、ここへ来て、あつらえたように転がっていた流木を見つけて、並んで腰掛けた。

横目で盗み見るように、ほんの僅かに優希に顔を向けると、ちょうど優希も、僕に向き直る瞬間だった。一瞬だけ、視線がぶつかる。僕は慌てて、波打ち際の白い泡粒に目を戻す。刹那、優希の小さく笑う声が、耳のすぐ側で響いた。

「飲んでる間、ずっと、気になってたでしょう？」

優希が言う。

「何が？」

僕は視線を海辺に投げたまま、優希が何を聞いているか判って、とぼけた。動揺で裏返りそうな声を、必死に抑えながら。それに気付いたのか、また、優希が小さく、笑う。

「私が島にいること。と、子供のこと。」

ストレートに、回り道もごまかしも前置きも無く、優希は言った。

声色に躊躇も無かった。だからなのか僕も、思わず反射的に頷いた。  
「流れちゃった、子供。」

注意深く聞いていないと、波音と一緒に流されてしまうくらい、あつさりとした口調だった。だから、「え？」と間の抜けた声で、聞き返してしまった。

「流産。」

優希が答えた。その言葉の意味することに矛盾した、澄んでいて柔らかい優希の声が、夜の海辺の闇の中に響き、波の音に溶けていく。

「私たちの子供、流れちゃったんだ。」

笑みの隙間から微かに零れる溜息と一緒に、もう一度、さっきよりも言葉をかみ締めるように、優希が言った。今度はしっかりと僕に届いた。「私たちの」という言葉に、胸が締め付けられた。

そうなんだ。優希に宿ったのは、僕の、僕らの子だった。それが、世界に受け入れられることなく、逝った。優希はそう、僕に告げている。

鈍く、重く、沈みながら、胸が疼いた。

今、僕の胸を満たしているのは、悲しみ、なのか。判らない。そもそも僕に、悲しむ権利はあるのだろうか。重苦しさが嫌で、息苦しさを拒絶して、僕の子を宿した優希の元から逃げ出した僕に果たして、生まれてくるはずだったその命の為に悲しむ権利など、あるのか。

「ごめんね。」と付け足すように言った優希の声のトーンは、急に落ちた。その声は、波の音にかき消されてしまいそうなおどにか細く、弱かった。弱かったから余計に、僕の胸を大きく揺さぶった。  
「なんで謝るんだよ。」

ようやくそれだけ、返せた。

「だって、産むって言ったでしょう？私。でも駄目だった。だから、ごめんね。」

「そんなの・・・」

言葉が継げなかった。そのまま、押し黙った。波の音だけが、沈黙を埋めるように響いた。

薄い雲に覆われていた月が、姿を現す。ゆつくりと、暗闇からフエイドインしていくように、ぼやけた海辺の輪郭がほんの少しだけ、浮き上がる。同時に、優希が再び、口を開いた。

「芝居も結局、駄目だったの。劇団の代表をやった人が、ハコ代用にみんなから集めたお金を持ち逃げして、いろいろと揉めて、結局潰れちゃってね。仲間だったみんなは、他の劇団に移ったり、自分で新しい団体を立ち上げたり、私もあちこちから誘われたけど、流産のこととかもあってさ。なんていうんだろう、嫌なことって重なるなって、転げ落ちるってこういうことなんだろうなって、結局何もする気が起きなくて。周りにも、ずっと断ってたら声をかけるのもあきらめられちゃって、気がついた時には、もうなんにも無いの。独りだし、何も無かったの。」

そこで、言葉が止まる。僕が優希を振り向くと、その気配に気付いて、優希も僕を見た。

優希は、笑っていた。強がって、と言うわけではなく、かといって嬉しさも感じさせず、諦めみたいな投げやりな思いも、逃げ出した僕を責め立てるようなあてつけも、その笑みからは感じ取れなかった。

空っぽ、の笑みだった。その笑みを、優希は夜の空に向けた。

「何も無くなつて、居場所も無くて、孤独で、孤独が怖いから、怖さをごまかすみたいにひとしきり泣いて、疲れ果てて、そうしたらやっと浮かんできたの。サキちゃんの顔とか、声とか。啓太君や拓郎君の顔とか、声とかも。」

そこまで言うてから、優希はまた僕を見る。

「淳のも、だよ。」

優希の笑みが深くなる。今度は、懐かしさを憂うような目の色を携えていた。空っぽが少しだけ、埋まっていた。

「そっか、私には故郷があったなって。帰れる場所が、あるんだ

なつて。凄く嬉しかった。救われた気分になつた。だから、大学を卒業したら、すぐに帰つてきちゃつた。」

優希はいたずらっぽく笑い、「かつこ悪いけどね、トンボ帰り」と付け加えた。

僕は、何も返せない。ただうつろな視線を、波打ち際へ投げることしか、できない。いつそ、優希に責め立てられたほうが、楽だったのかもしれない。と思い、すぐに安易さに逃げる自分のそんなところに、自分で失望して、自分で憤つた。

「そろそろ行こつか。」

優希が立ち上がる。遅れて僕も、のそのそと腰を上げた。

「もし私が子供を生んでたら、パパになつてくれた？」

歩き出すのと同時に、不意に、優希が言った。僕は思わず、立ち止まつた。

「え？」

先に行く優希の背中に向けて聞き返す声が、少し震えた。

「なんてね。ちょっと意地悪すぎるかな、今のは。冗談だよ。」

振り向かないまま、優希は言つて、歩調を速める。

強く脈打つ胸の動悸を優希に悟られぬよう、距離を置いて、その後を追つた。

踏み出す一歩一歩が、足の裏を痺れさせた。

痛いな、と胸の内側で呟いた。

「あの三人は、俺たちのことは知ってるの？」

ビーチからの帰り道、別れ際に、僕は優希に尋ねた。優希はうつむき加減に、小さく「ごめんね」と返した。

「サキちゃんだけにはって思ってた打ち明けたら、いつの間にか啓太君たちも知ってた。」

言って、身の置き場に困ったように、優希は肩をすくめた。秘密がそこで留まらないところが、相変わらず美咲らしいなど、僕は肩を小さくゆすって、笑う。

「いいよ、気にしないで。なんかこういう事あいつらに黙ってるよ、あいつらを裏切ってるような気分になって、落ち着かないし。」

僕の言葉に、優希は安堵したような溜息を漏らした。

進んで話すようなことではない、とは思う。でも、あいつらは知っているべきなのだと、どこかで、思っている。いや、本当は、少なくとも啓太と拓郎には、僕の口から伝えるべきだったのかもしれない。そしてきつとその行為は、容易ではなかっただろう。だから、優希が間接的にでも、二人に事実を伝えてくれたことに感謝して、感謝している自分を、情けなく思った。

「そういえば、写真のほうは、どう？軌道に乗った？」

思い出したように、優希に尋ねられた。少し躊躇した後で、僕は答える。

「乗った、と言えば、乗ったかな。」

優希はまるで自分のことのように、嬉しそうに「よかった」と呟いて、小さく、でも何度も頷き、その嬉しさを溢れさせるように大袈裟に手を振って、家路に着いた。

嘘、ではかったと思う。けれど、胸を張って言えるかといえは、そんなことは無い。だからなのか、後ろめたさが、夜の闇の中に溶けるように消えていく優希の後姿を、引きとめようと胸の内側でざ

わついていた。

### 写真。

僕が日本を飛び出した、トリガーはそこにあつた。ようやく見つけることのできた、僕の新たな居場所。生きるための、目的、糧、支え。

それを見つけたときに、告げられたのだ。僕の子を、優希が宿つた。

言い訳がましいかもしれない。

でも、優希が身籠つた子供のことを僕に告げる前から、僕は優希の元を去ろうと決めていた。優希と子供とを、置き去りする気は無かつた。そんな、自分で自分を庇護する気持ち、その頃はあつた。それがどれ程に浅ましくて醜いのか、今は、判る。判っている、つもりだ。

きつかけは、一枚の写真だつた。

優希と付き合い始めて、一年が過ぎた頃だつたと思う。

目的もなく、気まぐれに立ち寄つた書店で、僕はそれを見つけた。名の通つた、アメリカの経済誌の日本語版。ふと目に付いたその雑誌の表紙の写真に、僕はそれから後の人生を決められた、と言つても過言ではない。

表紙の中央に大きく写し出されていたのは、子供だつた。

ヒスパニック系の、どことなく僕らアジア人と似通つた輪郭の、幼い少年。背後には、くすむように立ち込める煙と、鉄骨をあらわにしたビルの残骸があつた。ああ、ここは戦場なんだ、とリアリティを抱けぬままに、知らない世界のことを思った。

少年は、モノクロの写真の中で笑つていた。

確かに、笑っているのだ。でもその目の奥には、幸せも喜びも無かつた。絶望からやけくそになつたわけでも、憂いを哀れんでいる苦笑でもない、ように、僕には見えた。

何も無い。少年の笑顔には、添えられるべき、笑う理由となるべ

き感情が、皆無だった。そんなふうには笑えるのは、絶望を超えた何かが、胸の中に巣食ってしまったからなのではないのかと、写真を見つめながら、思った。

そしてその写真に添えられた言葉が、僕の直感とは間違っていないと、確信させた。

Who Broke?

誰が、壊した？

それだけで、十分だった。

写真と言うものが持つ、否が応でも真実をつきつける残酷さを知った瞬間だった。その残酷さが、その頃の僕には、とてつもなく魅力的だった。

写真は、真実だけを告げる。

痛感した。

ティム・キルシュスタイン。

写真を撮ったその人物の名を、頭の中に深く刻み込んだ。

それから半年、取り付かれたように英会話を勉強した。

キルシュスタインのような写真を残したい。写真を学ぶなら、彼の前でないと駄目だ、と勝手に思い込んで、彼の住む国の言葉を、必死に頭の中に叩き込んだ。肝心の写真のことなど、その頃は何もわからなかった素人のくせに、それには全く振り向きもせず、胸の奥のさらに隅っこにしまいこんで、まずは、彼の住む国の言葉を身につけることだけを目的に、夢中であがいた。彼の側に近寄るには、その交渉のための武器を、言葉を、備えておきたいと、そればかりを当時は気にかけていた。今でも、そんなアプローチの方法が正しかったのか間違っていたのかは、わからない。

機は熟した、と思えるようになったのが、二十歳になったばかりの頃だった。馬車馬のように働いて、生活を切り詰めて、とりあえずは当面の留学費用も工面できた。優希と別れたのはその直後で、僕は逃げるように、アメリカへ渡った。

何かの足がかりにはなるかもしれないと、留学を斡旋する旅行会社に紹介してもらった、ニューヨークにある写真学校には、失望した。

生徒は全て日本人で、講師は、学生の頃にカメラを手にしていたと言っただけの、プロになり損ねたアマチュアに毛が生えた程度の写真家達だった。それも、日本人の。

ニューヨークにある、というだけで、日本にある専門学校とその実態はなんら変わりはない。箔をつけたいただけなのだ。

ニューヨークの写真学校を出た。それだけで、日本の写真学校をでるよりも優遇される、はず。張りぼての経歴が現実にさらされた時にどんな末路をたどることになるのか、想像すらできない若者たち。僕はそんな群れの中に放り込まれた。

危ない、と直感した。少しでも早くこの環境から遠のいておかなければ、何かが、壊れてしまう、と。

履歴書レジュメを書いた。あえて、通っていた写真学校の名は伏せて。

キルシュスタインの事務所がどこあるのかは、知っていた。無謀だと判っていて、彼の事務所にレジュメを持って飛び込んだ。そして、想像していた通りの、想像はしていたが、望んではいなかった待遇を受けた。

受け付けてくれた若い白人の事務員は、レジュメを受け取ってはくれた。でも、殆ど門前払いに近い感じで、追い返された。経験も無い、言葉もまだ覚束ない異国の人間をそばに置くほど、キルシュスタインも気まぐれではないのだと、改めて現実を痛感させられた。3日後、僕の部屋の電話が鳴った。キルシュスタイン本人からだった。「少し気になったんだけど」と前置きして、驚きのあまり口ごもる僕に、彼は尋ねた。

「君は、ゴウ・サカマキと関係があるのか？レジュメを見たんだ。君の出身がほら、日本の、彼の住んでいるところと同じだったから。君も、サカマキ、なんだよね？性は。」

ゴウ・サカマキ 坂巻豪。父の、名だった。

「僕は、彼のビッグ・ファンなんだ。」

そう言ったキルシュスタインの声は、どこか誇らしげに聞こえた。父は日本よりも海外で評価を得ていたから、キルシュスタインが父を知っていても、おかしくは無い。彼がファンであることも、また。その事実にしがみ付くように、僕は言った。

「僕は彼の、息子です。」

予想外に、さらりと、その言葉は僕の口から飛び出した。父を利用した、憎んでいた父の存在に、寄りかかった、ということに対しての抵抗は、自分が思っているほど、無かった。本当か？というキルシュスタインの感嘆した声が受話器越しに響いた時、少しだけ、鈍く胸が疼いただけだった。

形はどうあれ、僕の望む望まないはどうあれ、それが、キルシュスタインが僕を彼の事務所に招き入れた理由だった。

父から離れ、開放されたと思っていた異国で、思いがけず父に、僕は救われた形になった。正直、悔しかった。だからといって、その現実に逆らうような強さもプライドも意地も、僕には無かった。

僕が拓郎の家の前に着いた時にちょうど、拓郎の乗ったタクシーも玄関先に停まった。タクシーを降りた拓郎は、自分より先に戻っているはずの僕が今帰ったことに、最初は訝しそうな表情を浮かべ、すぐに、悟ったように口元を緩めた。緩めたが、その笑みはどちらかと言うと、苦笑に近かった。

「話、聞いてきたんだな、優希に。」

なんとなく、さりげなく、拓郎は視線を逸らしながら言った。

「うん。」

僕の返した返事は、遠くで鳴る波の碎ける僅かな振動にすら、かき消されそうなほどに弱々しく、か細かった。拓郎の反応が、少し怖かったからかもしれない。

若気の至り。

そんな都合のいい言葉ではごまかせないほど、僕が優希の元を去ったことは酷かったと、今は思う。それは判る。判るから、何も言い返せない自分の立ち位置が、もどかしくて、苛立たしい。

「まあ、二人の問題だからな。」

少しいい足りないように言葉を切って、拓郎は僕を見た。見据えた。夜の闇の中でおぼろげに浮かぶ目の奥の光が、淀んでいた。

責められると思った。責められて然り、と思っていた。怖がりながらも、覚悟はできていた。だからなのか、肩の力の抜けた、どこか投げやりで諦めの籠った拓郎の言葉のほうに、僕の胸を鈍く疼かせた。まくし立てられたほうがまだ良かったと、下唇を軽く噛んだ。

「もう少し、飲むか？」

今度は少し軽い調子で、拓郎が言う。それで救われた気分になった自分が、情けなかった。ああ、と返した僕の声も、さっきよりはいくらか生気が籠っていて、それも、情けなくて、悔しかった。僕

はまた、留めて、受け止めておかなければならない何かを、先送りにしてるんじゃないか？沸いた疑問から、思考を逸らした僕の弱さも、やっぱり、情けなく思えた。

内側で膨らむ情けなさを振り切るように、玄関に向けて踵を返した時、ふと気付いた。

建て直された洋館は、夕方に立ち去ったときよりも、さらにひと気を感じさせない。この家の主であるはずの、拓郎の母親の気配が無いのだ。おぼろげに光っていた二階の一番奥の窓も、今は闇の中に溶けている。

「おばさん、留守なのか？」

頭の中であれこれと想像する前に、反射的に聞いていた。聞いた後で、もしか、という思いが浮かんできた。

悪い予感。それは、的中した。

「おふくろ、死んだんだよ。」

「え？」

拓郎の声があまりにも軽くて、薄っぺらくて、すぐにはその意味を飲み込めなかった。聞き返した僕に笑みを返す拓郎の顔を見ていたら、ようやく、じわじわとその事実が僕の胸の中に染みていった。

「そう、だったのか・・・」

語尾が暗く沈む。

言葉が継げない僕を見て、拓郎は今度は、声に出して笑った。

「そんな縮こまるなよ。もう4年前の事だし、今更しんみりする時期でもないしょ。」

強がってるふうでは無かった。拓郎の中では、しっかりと踏ん切りがついているのだと、無理をしているわけでもない口調で判った。でも唐突にその事実を突きつけられた僕には、拓郎の真似はできない。

僕が知っていた、昔の、拓郎の母親のことを思った。

拓郎にだけじゃなく、拓郎の家を溜まり場に使っていた啓太や僕に對しても、良い言い方をすればやさしい、別の意味では甘い人、だ

った。仕事場である自分の宿に屯す僕らに、本当に本心から、嫌味のひとつも言わない人だった。いつも一歩引いたところから僕らを眺め、いつも笑んでいるだけの人だった。今はもう見ることでできない、記憶の中にあるその笑みが胸に染みて、目の裏側がにわかにな熱くなった。

「どうして

「死んじゃったの？とは続けられなかった。

「癌だよ。倒れた時には手遅れでさ。看護とか介護とかいうもんを覚悟する前に、もう、ほんとに、あっさりだったよ。」

言って、拓郎は笑う。決して乾いてはいない、かといって湿っばすぎない笑みだった。今はいない母親に向けて、そんな笑い方ができる拓郎が、少しうらやましかった。

僕は？

例えば父に、そんなふうには笑いかけられるのだろうか。

無理だよ、と胸のずつと奥のほうから、拓郎の声とはまるで反対の、僕自身の乾いた声が聞こえた。

「だからしんみりするなってよ。飲もうぜ、な。」

拓郎は、僕の纏った沈み込んだ空気を振り払うように、明るく、軽やかに言って、僕の肩を叩き、玄関口に向かった。向かってすぐ、足を止めた。

「どうした？」

拓郎の背中に向かって、聞く。

「人だ。倒れてる。」

そう言うと同時に、拓郎は玄関脇をすり抜け、海側に向いて建てられたテラスへと駆け出した。

「お、おい・・・」

慌てて、僕もその後を追う。

拓郎が駆け寄る先に、確かに人影があった。椅子から転げ落ちたように、テラスの木目張りの床の上に、人影が横たわっていた。

「大丈夫か？」

拓郎が人影を抱え上げる。その腕の脇から、顔を覗き込んだ。

拓郎の胸から零れるように垂れ下がった長い髪の間隙から、顔が見えた。

彼女、だった。

フェリーの上や、父の好きだった岬で会った、あの、彼女だった。

その部屋の壁に立てかけられた絵を見たとき、背後で気配を感じて思わず振り向いた。

誰もいない。

再び視線を絵に戻す。

間違いない。

父の絵だった。

テラスで倒れていた彼女は、もう一人の宿泊者だと拓郎が言った。テラスにある木製のテーブルの上に転がっていた空のワインボトルが物語るように、彼女は飲みすぎて、酔い潰れ、寝てしまっているようだった。何が彼女をそこまで酔わせたのかなんて、もちろん判らない。ただ、彼女は少し荒っぽい寝息を立ててはいるもの、どうやら深刻な状況ではない、ということだけは、判った。

拓郎と二人で彼女の泊まる部屋に彼女を運び込み、ベッドに寝かせてふと壁際に目をやった時だった。

その絵を、見つけた。

きらびやかでいて毒々しい、夜の都会の喧騒の中で、こちらに背を向けて佇む、幼い少女を描いたものだった。

豪快、というより、乱暴な筆遣い。まるで殴りつけたように、キヤンパスに塗り付けられた油絵の具。一見雑に見える仕上がりの端々に、絶妙なタッチが散りばめられていて、それがどうにか絵としての体裁を最低限のところまで保っている。

間違いない。父の業だ。その絵を見た記憶は無い。初めて目にする作品だった。でも判る。悔しいが、判ってしまう。これを描いたのは、父だ。

「その絵、もしかして親父さんが描いたやつなのか？」

引きずりこまれた僕の意識を、拓郎の声が現実に戻した。ま

るで深い夢の中から無理やり引つ張り出される時の、ばりばりと引き剥がされる痛みに似た感触が、胸に残った。

「多分。」

短く、擦れた声でそう返した。意識は離れても、視線は、絵に縛り付けられたままだった。

「別に隠すつもりはなかったんだけど」と前置きして、拓郎が遠慮がちに言う。「宿の予約の電話があったとき、言ってたんだ。彼女、お前の親父さんのファンだ、って。」

父の 僕は反射的に拓郎を見た。なぜか、しかられた子供のように顔を僅かにゆがめている拓郎を見て、すぐにベッドに横たわる彼女を一瞥し、もう一度、父の絵に視線を戻した。

『どこまでを人殺しというのかな』

父が、そして彼女があ岬で漏らした言葉が、耳の裏側の、ずっと深いところで、響く。

彼女は父をしているのだろうか。彼女が拓郎に言ったように、単純に画家とファンという一方的な関係ではなく、もっと双方向的な関係が、父と彼女との間にあったのだろうか。どこかで、父はあの時僕に呟いたように、その言葉を他の誰かにも言い漏らしている。彼女の耳に届いたことがあるのだろうか。真相は判らないが、きっとそうだ、と思うことで、胸の中の靄がほんの少しだけ、晴れた気がした。

でも

だったら、どんな関係？

新たな疑問が沸く。

彼女の纏った艶。陽の指す方向へ背を向けて、どこか翳りのある後ろめたさと開き直りを共有した、夜の香りのする彼女の艶を、思った。その思いが父の、女性に対する悪癖と重なって、考えたくもない、もしかしたら沸いた疑問に対する答えかもしれない予感が胸を過ぎり、慌てて、打ち消した。

「出ようか。」

逃げ出したくなつた。次々に沸いてくる想像を頭の外に追い出さなくては、この絵と彼女の寝息から離れなければ、きつと開放されな  
いと思つて、背を向けたまま拓郎に言つた。

拓郎が部屋を出て行く気配を背中に感じながら、父の絵から視線を逸らす。逸らした先に、ベッドに横たわる彼女の姿があつた。閉じていたはずの彼女の目が、開いていた。驚いて、僕は身を引くようにびくりと体を震わせた。

「坂巻剛を殺したのはあたしだよ。」

眠気でくぐもつて、酔いで揺れた曖昧な輪郭で、彼女の声は僕に届いた。でも、ぼやけてたはずのその声は、僕の頭の中ではなぜかこれ以上ないほどにクリアに響いた。

混乱した。その混乱が怖かつた。だから、彼女の言っていることの意味から、無理やり思考を逸らした。理解するとかしなないとか以前に、僕は反射的に、聞こえていない振りをした。とりあえず、今のタイミングで、あれこれと考えたくなかつた。彼女の瞳から視線を外し、彼女に背を向けた。部屋を出た。

「ほんとだよ。」

背中にぶつかる彼女の声を掻き消すように、僕は後ろ手にドアを閉めた。

閉めた扉の前で、しばらく立ち止まつた。

心臓が強く、不規則なリズムで脈打つていた。

彼女が父の好きだつた岬にいた。父と同じ言葉を漏らした。父のファンだと拓郎に告げていた。父の絵を持っていた。

必然と偶然の境界が僕の中で曖昧になっていく。その裏にあるであろう僕の知らない事実が、見え隠れする。でも、僕の頭の中でそれは、はっきりと実態を象る前に、風に乱される薄い煙のように消し去られてしまう。きつと判らないわけじゃない。無意識に、予測できる様々な事を、象られるべき予感を、僕自身が拒絶しているからなんだろう。きつと。

息苦しい。胸が痛い。

その痛みから逃げ出すように、僕は彼女の部屋を離れた。

故郷の島に戻った次の日、前の晩の酔いも手伝って、僕は昼過ぎまで目覚めなかった。目覚めなかったのは酔いのせいだけなのか、という疑問は、胸のうちでもみ消した。

拓郎はすでに起きていて、昨日、あの彼女が突っ伏していたテラスに、ノートパソコンを持ち出し、インターネットで宿の予約状況をチェックしていた。

「嵐の前の静けさと言うか、シーズン前はな、暇でしようがないよ。」

愚痴を漏らしながら苦笑し、海を望めるテラスに陣取って、青い空の下でカチャカチャとキーボードを叩く。島の自然とテクノロジーとのアンバランスさが逆に、拓郎のような斜に構えた男には、妙にはまって見えた。

実家に行くからと、拓郎からバイクのキーを受け取って、玄関先に出た。バイクのエンジンをかけた後にふと、彼女の泊まっていた部屋の窓を仰ぎ見る。昨日の夕暮れ、ぽつりとおぼろげな光を放っていた二階の端の窓の向こうが、彼女の泊まる部屋だった。今はその向こう側に、人の気配はない。

『坂巻剛を殺したのはあたしだよ。』

彼女の声が、蘇る。父の絵と、ベッドに横たわる彼女と、くぐもった彼女の声。順々に、かわるがわる、頭の中に蘇っては、消えて、また浮かぶ。

それを振り払うようにアクセルを吹かし、そこから逃げるようにクラッチをつないで、拓郎の家を出た。

今日も晴れていた。雲の残骸すら見当たらない、くつきりとした晴れだった。頂点に達した太陽は、昨日と同じように、熱の籠った日差しを容赦なく地上へ向けて降り注いでいる。雨の気配を感じさせない乾いた梅雨入り前の熱気の中を、僕は十年ぶりに帰る実家に

向けて、拓郎から借りたドラッグスターを走らせた。

海沿いの街道をしばらく南へと走っていると、再び、昨日の夜の、彼女の声が頭の中で響いた。どうにも振り払うことができない、それでいて粘っこさのない、どこか矛盾したフラッシュバックに、僕はヘルメットの下で眉根を寄せた。

父は自殺した。

確かに母はそう言っていた。父が死んだ直後に電話してきた母のうろたえようを考えれば、殺されたことを自殺したと、偽っているようには到底思えなかった。偽る理由も、その必要性も、思い浮かばなかった。

でも、昨日出会った彼女は、父を殺した、と言った。

狂言かもしれない。酔った上での戯言かもしれない。父のファンという彼女の、ファンだからこそその妄想かもしれない。ただ、根拠は無いけれど、彼女の声の響きにはなぜか、疑いを抱かせる隙の無いリアリティがあった、ように、僕には思えた。

直接手を下したのではなく、何かしらの状況で父を死に追いやったのが、彼女、なのか。彼女が本当は何者なのかも、父の死の理由も知らない僕に、判るはずがない。

父の、死の理由。

父の死後、母からはじめてかかってきた電話の時にも、その後、帰郷の日程を知らせるために僕から連絡した時にも、僕は母に、父が何故死を選んだのか、聞けなかった。

聞けなかった。

関心が全くなかったかと言えば、きつと、嘘になる。多分、つまらない意地だ。父を憎んでいた自分自身を肯定するために、父に、父の死に、興味が無いような素振りをしていただけだ。

遺書はあったのか。逝ってしまう直前に、父の態度に不自然な拳動はあったのか。死を選んでしまうほどに父が苦しむような、出来事や心当たりはあったのか。

次々と沸きあがるうとする疑問を、自分の中だけに押しとどめ、

もみ消して、結局僕は今、何も知らないでいる。

そんなことを悶々と考えているうちに、昔よく馴染んだ小道に入った。緩い坂を上がりきって、僕は僕の生まれ育った家の前に、10年ぶりに帰った。

バイクを止め、ヘルメットを脱いで、逃げ去りたい衝動を必死に抑えてすごした、かつての我が家を見上げる。当たり前のことだけれど、その立ち姿は、表層的には10年前と何ら変わっているところは無い。無いはずなのに、懐かしさとは相容れない、違和感が沸いた。

翳り。翳りが、そこここに落ちていく。

別に建物が古びてがたついてはいるわけでも、庭の植栽が荒れ放題に伸びきっているわけでもない。ただ、家の放つ空気が、しつとりと湿っていて、重かった。その空間だけ、トーンひとつ分、影を濃く落としているような錯覚が、軽いめまいと一緒に僕に降りかかっていた。それが主を失った家の持つ、独特の存在感、なんだろうか。

僕がその雰囲気気圧されて、玄関前に佇んでいると、ドアが開いた。実際に聞こえたわけではなかったが、ドアが軋むような音の気配だけが、周囲に響いた気がした。

「おかえり。」

玄関から出てきて、そう言ったのは、9年ぶりに会う兄だった。

思いがけない相手が家から出てきて、僕は少し驚き、その感情を隠せないままに、ぎこちなく笑みを浮かべ、「ただいま」とすぼんだ声で返した。

兄は笑う。力ない笑みで目を細め、小さくゆっくりと、頷く。

「母さん、寝ちゃってるんだ。一昨日まで葬式の後片付けなんかで忙しくてな。少し外、歩かないか。」

兄は言っ、微かに顎をしゃくって、僕を促した。僕が黙って頷き返すと、兄は僕の横をすり抜けて、僕がバイクで駆け上がったき坂道を、ゆっくりと下りだした。

9年前、最後に見送った時と同じように、兄の背中はどこか煤けて見えた。

「結婚するんだ、俺。」

9年前、最後に兄に会った時、呼び出された西新宿の居酒屋で兄が唐突に僕にぶつけた言葉が、それだった。

その日は、僕が東京へ出て1年が経とうとしていた頃で、初めて僕が東京で兄と会った日でもあった。それまでの1年間、僕も兄もお互いにほんの少し電車を乗り継げば会える距離に住んでいることを知っていて、会うことが無かった。別に意識して避けていたわけではないが、密に連絡を取り合うことには歯がゆさがあった。その歯がゆさはどこからくるのか、と聞かれても判らないけれど。

「結婚、するんだよ。」

もう一度、僕に向けてと言うより、自分自身に向けた籠るような口調で、兄が言った。僕は黙って頷き返し、あまりにも唐突な兄の言葉に、返答に迷って、その当時はまだ飲みなれていなかったビールを、無理に煽った。

高校を卒業した後、兄は現役で、世間では一流と呼ばれる大学への進学を決めた。高校のときは、盆と暮れには東京の学生寮から島へと戻っていた兄だが、大学へ進んでからは一度も、帰郷することはなかった。

兄のその時の心境は判っていたつもりだ。僕だってもし兄と同じ立場だったら、戻らなかつただろう。あの家から開放された生活を、僕だって、兄と同じように遠く故郷から離れた東京という街で、かみ締めていたはずだ。現に高校を卒業した後の、その頃の僕がそうだったように。

その年の、もうすぐ迎えようとする春に、兄は大学を卒業する予定だった。

外資系のソフトウェア会社に就職を決めて、卒業と同時に、大学時代の同級生と結婚する、兄は淡々とした口調で、そう僕に説明し

た。

「母さんは知ってるの？」と尋ねた僕に、「就職の事は知ってる」と、どこか後ろめたそうに、兄は答えた。

「結婚の事も、いずれ教えるよ。式を挙げるつもりはないし、落ち着いたら、母さんには伝える。」

母さんには。

父に伝えるつもりは無い、と言う意味だ。その兄の本心を、僕は否定しない。かといってはつきりと、肯定もできない。腹の底に溜まったアルコールの熱を、もう一度流し込んだビールで煽り立てて、見えそうで見えない自分の本心を、もみ消すだけだった。

それからしばらくは言葉数の少なかった兄も、酔いがまわるにつれ、饒舌になった。ろれつの怪しくなった口から漏れるのは、父への愚痴ばかりだった。

最初は同感して頷いていた僕も、兄の口調が熱くなるのに反して、どんどん気持ち冷めていくのが判った。何かにとり憑かれたように父を卑下する兄の姿に、何故か、父と同じ匂いを感じたからなのかもしれない。

「夏が終わる頃には子供が生まれるんだ。俺は絶対にその子に、俺みたいないはさせない。絶対に。」

吐き捨てるような告白だった。熱が最高潮に達して、酔いのせいなのか、興奮したせいかわからない、それともその両方なのか、頬を赤く染め、小さくひくひくと震わせながら、兄が言った。

それでようやく、判った。

負のイメージだ。

兄は父を否定することで、自分の存在価値を何とか象ろうとしている。兄の中に浮かぶ父の姿を否定して、嫌悪して、打ち崩すことで、打ち崩した向こう側に、自分のあるべき姿があると、信じて、疑っていない。

卒業、就職、結婚、そして、出産。

本当なら何かを築き上げていく為の、いくつかの道筋。兄の場合、

その道筋を辿るためのエナジーが、父を否定する、という負のイメージから生まれている。

だから結局、兄は父に縛られ、結果、父をいくら否定しようと、拒絶しようと、その背後には、父の影が見え隠れする。

それじゃ、だめなんだよ、兄貴。

胸に沸いた言葉を、ビールと一緒に飲み込んだ。果たしてそれを兄に言えるだけ、僕自身、父という呪縛から解放されているのだろうか。判らない。

ひとしきり飲んで、終電も間近になった頃に、僕らは店を出た。

酔い、というより徒労感で、僕の足取りは重かった。人と話してここまで疲れを感じたのは初めてだった。その相手が兄だったという事実が、少し虚しくて、それでいて、なんとなく納得もできた。

「俺、間違ってないよな？あんな親父、誰だって恨むよな？」

別れ際、唐突に兄に聞かれた。振り向くと、すぐるような目で、兄は僕を見ていた。酔いで白く濁った目の奥が、鈍く光っていた。

「うん。多分。」

擦れた声で僕が返すと、そうか、と更に擦れた、吐息だけの声を漏らし、兄は弱々しく笑った。そしてすぐに目を逸らすと、じゃあ、と軽く手を振り、新宿西口の改札前の人ごみに向けて、歩き出した。人ごみの中に埋もれていく兄の背中が、そこだけ空間が淀んでしまったかのように、どこか煤けて見えて、行きかう人々から浮いていつまでも僕の視界の中を漂っていた。

兄と連れ立って実家のすぐ側にある漁港に出て、防波堤の先端に、外洋に向かつて並んで腰掛けた。昔よく、こうして兄と二人で、釣竿を垂らしていた場所だった。メバルのよくつれる、地元の間人しか知らないポイントで、兄とバケツいっぱい釣りに行っては、家に持ち帰り、母に塩焼きや煮付けにもらった。

「最近メバルも数が減ったみたいでさ、昔みたいには釣れなくなったらしいんだ。」

兄も僕と同じように昔のことを回想していたのか、目を細めながら凪いだ海を眺め、そんな事を言った。

「そうなんだ。」

呟くように返して、僕も視線を海へと向けた。

僅かに揺らめく海面に陽の光が反射して、きらきらと輝いている。あちこちにガラスの破片をばら撒いたようなその乱反射は、少しまぶしくて、でも、綺麗だった。釣りに夢中になっていた子供の頃には気付かなかった、故郷の風景。そんな美しい風景にいつも見守られていたんだと思うと、故郷に背を向けている今の現実が、虚しく思えた。背を向けようとする今の自分の生き方が、愚かだと思えてならなかった。でも、それならば向き合えばいい、と言う心の中の自分自身の声は弱々しく、すぐに掻き消されてしまった。

「いつ、こっちに戻ってきたの？」

胸のうちのわだかまりから目を逸らすように、僕は兄に尋ねた。

「親父が死んで、すぐ。」

意外な答えが返ってきて、思わず兄を見た。兄は、海を見据えたまま薄く笑んでいた。その笑みの奥にある兄の想いは、読み取るこゝろがでなかつた。

僕は、兄は僕と同じだと思っていた。

葬儀には間に合わない。日本に、この島に帰る前、僕は母にそう

告げていた。都合をつけようとすればいくらでもついた。でも、こ  
こは海外だからとか、仕事のきりが良くないとか、とってつけたよ  
うな言い訳を並べて、帰郷をわざと遅らせた。父の葬儀という、父  
の死とまっこうから向き合う場に立つことが、多分、怖かったんだ  
と思う。だから、葬儀の終わった今になって、僕は島に帰ってきた。  
兄も、同じだと思っていた。でも、違った。理不尽かもしれない  
が、少し裏切られたような気分になった。

訝しむ僕の気配に気付いたのか、兄は僕に一瞥を投げると、また  
すぐに海に目を戻し、言った。

「長男だからな、一応。」

少し言い訳じみた口調だった。でも、僕の胸中を察している口調  
でもあった。僕が訝しむ理由はちゃんと判っている、ということも  
本当はらしくないと思っっている兄自身の気持ちも、そこにしっかり  
と、染み込んでいた。だから、僕には返す言葉が無かった。

「それと、確かめたかったんだ。」

しばらくの沈黙の後、言い足りない何かを付け足すように、兄が  
言った。

「確かめる？」

僕が尋ねると、兄はゆっくり視線を海から空に移した。

「これがもう最後のチャンスだろう、と思っただんだ。俺は本当に  
親父を憎んでいたのか、とか、俺にとつての親父ってのは一体何だ  
ったのか、とかさ、今更だけど。例えば母さんに見てみたら、それ  
はもう、本当に最悪な男だったってのは判るし、世間一般に見ても  
さ、やっぱり最低の父親なんだって、判る。でも、母さんも世間も  
関係ない、俺自身はどうなんだろうって、いつからか思うようにな  
ったんだ。そうしたらもう、ごまかせないんだよ。昔はただただ親  
父を憎んでいればそれで良かった。母さんを泣かせて、悲しませて、  
そんな痛々しい母さんを僕らに見せ付ける親父を、憎んでさえいれ  
ばもう、それだけで胸の中のもやもやした異物感を誤魔化したり、  
やりすごせたりした。けど今は、それじゃすっきりとしない何かが、

胸につつかえるんだ。結局俺は、親父っていう人間と真っ直ぐに向き合って、ああ、やっぱり俺はこの人が憎い、なんて確かめたことが無かった。それが、すごい心残りに思えた。だから 最期にさ、確かめたくなった。」

兄は淡々と、淀みなく語って、僕を見た。兄の顔にはまだ薄い笑みが浮かんでいて、深く濃い藍色の瞳を僕に向けていた。何かを探るように。無言で、訴えかけるように。

お前は？確かめなくて、本当に良かったのか？

兄の胸の中の声が聞こえる気がした。

「それで、何か判ったの？」

兄の無言の問いかけから逃げるように、言った。卑怯だ、と思いつながらも、その言葉が口から漏れ出すことを止められなかった。

兄は、笑みを更に深くして、自嘲するような擦れた笑い声を上げた。

「何も。葬式ってのは上手くできてき、遺族はもう忙しくて、あれこれと考える暇なんてないんだ。そうやって、忙しにかまけさせて、故人を想って悲しみに沈むことから遠ざけるようにできる。本当に、忙しかった。でも」

兄はそこで一度言葉を切ると、また海を見た。そして、言った。

「火葬場で骨だけになった親父を見た時は、泣いたよ。自分でも信じられないくらい、思い切り、泣いた。」

兄の表情は変わらない。胸のずっと奥に潜んでいる感情を悟らせない、薄い笑みのまま、海を見据えている。

「どういう人で、どんな風に生きて、どんな風に死んだのかなんて、関係ない。憎んでいようと、恨んでいようと、関係ない。あの瞬間の、あのとてつもない遺失感、血で繋がっているものなら逃げ出せないんだ、きつと、誰でも。」

空と海の青に、兄の声が染み込んでいく。

父の死。

気配はあった。でもまだ、実感はない。

兄の言葉で本当の姿をほんの少しだけ覗かせた父の死も、僕の中  
ではまだ、曖昧な霧でしかない、現実だった。

実家に続く緩い坂を登りきったところで、玄関先に立つ人影が目  
に付いた。

濃い藍色のワンピースの裾を、初夏を迎える直前の季節独特の、  
生暖かい風に僅かに揺らめかして、あの彼女が、そこに立っていた。  
すぐに、彼女だと判った。

服装は昨日とは全く違出し、そこから与えられる印象も別人のよ  
うだったにもかかわらず、彼女だと、一瞬で判った。きつとそれは、  
目に映る彼女の姿そのものを見た、と言うより、彼女の纏った艶の  
ある雰囲気、その空気を、見ていたからなのかもしれない。

帰郷して以来、行く先々でちらつく彼女の姿が気になった。僅か  
一日の間に、偶然にしてはあまりにもよく見かける。確かに大きな  
島ではないが、島民の誰もを知っている、というほど小さな島でも  
ない。彼女が父のファンだから、という思いが脳裏を過ぎったが、  
それだけでは納得できないざわつきが、今度は胸の中で沸く。

『私が坂巻剛を殺した』

彼女の意味深な言葉も、耳の裏側で蘇る。

何かが、ある。僕の知らない、何か。

漠然とそう思って、歩み寄ろうとした矢先に、並んで歩いていた  
兄が駆け出した。あまりにも唐突だったので、僕は思わずその場で  
立ち尽くしてしまった。

兄は彼女に駆け寄ると、彼女に向けてひとことふたこと話しかけ、  
彼女もそれに何かを返す。声を張り上げているわけではなかったが、  
遠目にも兄の表情が険しいことは判った。反して彼女は、笑んでい  
るように見えた。兄に責め立てられて苦笑しているわけではなく、  
楯突くような挑発的な笑みでもない。どこかで見たとのことのある、と  
らえようのない微笑。

どうして？

自分の胸のうちに問いかけた刹那、優希の顔が浮かんだ。  
優希と、淡い暗がりにも包まれた砂浜。

そう。昨日の夜、優希が見せた、あのからっぽの笑みにそっくりだった。

彼女は責めるように彼女に何かを語りかけている兄を無視して、その笑みを僕に向けた。そして、兄にはかまわず、僕に向かって歩き出した。言葉尻を切られてしまったのか、兄は一瞬たじろいだ後、諦めたように、苦い表情で彼女の背を見ていた。

からっぽの、笑み。

昨日の夜の優希と、優希の話に重ねながら、近づいてくる彼女の浮かべた笑みの意味を、からっぽの笑みが生まれるわけを、探った。でも、何も判らなかつた。見当もつかなかつた。情けないくらいに僕は愚鈍なんだと、思い知らされるだけだった。

僕のすぐ側まで来ると、彼女は笑んだまま小さく溜息をついて、呟くように言った。

「私たちにも、権利はあると思うんだけどな。」

「権利？」

「そう、権利。」

「何の？私たちって、君と、誰？」

僕の問いかけを空っぽの笑みでかわして、彼女は何も答えずに僕の横をすり抜け、兄と僕とが登ってきた緩い坂を下りていった。

僕は呼び止めることもできず、呆然と彼女の背中を見送るだけだった。

権利って、何の？私たちって、彼女と、誰なんだ？

どんなに考えても、何も浮かばない。イメージすらおぼろげで、像を結ばない。ただひとつだけ、今まで彼女を見ていた時とは違う、不思議な感触が胸のずっと奥の方にあった。

疼くような、息苦しいようで、でも、失ってしまいたくない、矛盾した微熱。

その正体は、判らない。判らないほうがいい、と誰かの声が胸の

中で響いた。何でそう感じたのかは理解できなかったが、血が、僕の中を流れる血が、語りかけているように思えた。

とにかく、何もかもが判らなくて、考えることを諦めて、振り向いた。振り向くと、兄も呆然と立ち尽くしたまま、彼女の背を目で追っていた。僕の視線に気付くと、ゆっくりと目を伏せて、肩を大きく揺らしながら溜息をつき、もう一度僕を見た。苦々しい表情は消えていて、何かを諦めたような苦笑を浮かべていた。

「彼女のこと、知ってるの？」

兄に歩み寄って尋ねると、兄は小さく首を横に振った。

「別に、気にしなくていい。」

「権利、とか言ってたけど、どういう意味？」

「だから、お前が気にすること無いんだ。」

「でも・・・」

「いいから。忘れる。」

ぴしやりと、兄は言った。突き放すような口調だった。その裏側の真意を知りたかったが、きっとこれ以上しつこく食い下がっても、頑人にはぐらかされるだけだろう。そういう気構えを、その時の兄は背負っていた。

坂に目を向けると、もう彼女の姿は見えなかった。行ってしまった、という事実が、僕の胸の奥の微熱を、ほんの少しだけ、ほんの一瞬だけ、まるで僅かに火を携えた炭に息を吹きかけたときのように、ぼうつと熱を増し、すぐに、くすんだ赤い塊に戻った。

どこかで経験したことのある感触だった。それがいつ、どこでなのかは、見当がつかなかった。

見当なんて、つかなくていい。

何かを誤魔化すような、僕の血の音が、また、聞こえた。

十年ぶりに実家の玄関をくぐると、昔よく馴染んだ、懐かしいこの家の匂いが鼻を突いた。

懐かしいと感じて、気付く。この家に住んでいた頃は、あたりまえだが、そんな匂いなど気にも留めなかった。今、こうしてこの匂いを懐かしいと感じてしまうのはきつと、僕がもう完全に、この家に属さない人間になってしまったということなのだろう。それが寂しいことなのか、気に病む必要も無い些細なことなのかは、判らないけれど。

母は、居間にいた。真新しい仏壇の前に置いた位牌と遺影と、恐らくは遺骨の納められている、白く艶のある布に包まれた四角い箱を眺めながら、力なく座り込んでいた。

小さくなった。縮こまった。母を見てまず、見たままに、そう感じた。

母の体から染み出す衰えという名の人の弱さが、部屋の中の空気に溶け、方々から、今度は僕の体の中に向けて染み込んできて、それは一筋の針となり、胸の奥の、ずっとずっと奥の一点を、ちくりと刺す。

痛い。

僕は口の中で、声にならない声で呟く。

母の衰えは、単純に齢を重ねたからなのか、父が逝ってしまったからなのか、判らない。もし、父が逝ってしまったから、なのだとすれば、死んでしまってもなお母を苦しめる父を、憎むとは言わな  
いまでも、僕はやはり、許すことができない。すんなりと、父が逝  
ってしまったことを、悲しむことなど、できない。

「ただいま。」

黙ったまま、母の姿を見続けることがいたたまれなくて、僕は口を開いた。

母が僕を振り向く。途端に、それまでは血色の良くなかった母の顔に、熱が差した。

「淳ちゃん・・・よく帰ってきてくれたね、よく・・・」

そこで、母は言葉を詰まらせる。目を潤ませて、僕を見上げる。でも、立ち上がるうとはしない。父の残骸の乗せられた仏壇から離れようとは、しない。一瞬腰を浮かせたが、父の遺影と位牌と遺骨とに一瞥を投げ、また、すんと腰を落とした。

痛々しかった。死んだ父に今もなおすがりつこうとする母の姿が、哀れでならなかった。

「納骨はいつなの？四十九日までは待てそうも無いんだ。仕事か溜まっててさ。」

嘘をついた。

切羽詰った仕事の予定など、ひとつも無かった。

ただ、逃げ出したかっただけだ。

あまりにも母が痛々しくて、とにかく用件だけ早く済まして、この場を、この島を離れたかった。だから胸の裡のざわつきを誤魔化すように、早口で、無理に軽い口調で、そう言った。

「いいのよ、大丈夫。淳ちゃんがね、戻ってきてくれただけでいい。それだけで、お父さん喜んでるから、ねえ。」

言って、母は父の遺影に力ない笑みを投げる。その姿は、僕の胸の奥を鈍く軋ませる。

「とにかくほら、お線香、あげて頂戴よ。お父さん、喜んでくれるから、きつと」

力なく立ち上がった母と入れ替わり、僕は仏壇の前に腰を下ろした。

父の遺影を、ちょうど正面から見据える形になる。カメラの前に立つといつも無然とした表情をしていた父が、そのままに、モノクロの写真の中に納まっている。今まで、疎んじ、避け続けてきた父が、写真の向こうから、何もかもを拒否しているような眼差しを、僕に向けている。

今となつては、僕がどんな想いを、どんな感情を返そうとしても届かない、黒光りする額縁の中に収まった父。

僕は思う。僕が父に返すべき想いは、感情は、一体何なんだろう。一体、どんなものであるべきなんだろう。

答えの出ない問いかけから逃げるように、僕はそそくさと線香を手に取り、弱々しい炎を放つろうそくにその先端をかざして火をつけると、掌で仰ぎ消して、香炉に差し込んだ。

香炉の中の灰に線香が沈んでいく時の感触が、生々しく掌に伝わってくる。その生々しさが僕に何かを悟らせてくれるのではないかと、ほんの一瞬、淡く期待したが、無駄だった。僕の胸の中に居座る父の像は、今もまだ、おぼろげなままだ。

「さつきあの人、来たの。本当に来たのよ。」

気持ちも載せられないまま、慣例にただ無意識に従うように、父の遺影に向けて手を合わせた時、母の眩きが背中にぶつかった。兄に向けて耳打ったような、くぐもった声色だった。

「気にしなくていいから。俺にまかせておけばいいから。」

兄が返す言葉も、湿った膜に覆われたように鈍く響いた。もう何も言つな、という威圧も、その口調の中にほんの少し、溶け込んでいるように思えた。

あの人

やはり、彼女のことなのだろうか。

振り向いて兄を見た。目が合うと、兄は逃げるように視線を窓の外に逃がした。

兄は、何かを知っている。

「私が坂巻剛を殺した」

彼女の言葉が、また耳の奥で響く。

『どこまでを人殺しと言つのかな』

父の声とシンク口したもうひとつの言葉も、一緒に。

兄は、きつと知っている。その言葉の意味を。

判るのはそこまでで、それが具体的に何なのかなんてことまでは、

兄の少し引き攣った横顔から、読み取ることはできなかった。

それは本当に、気まぐれだった。

何かを予感したわけでも、勘ぐったわけでもない。ただ単純に行き場が無くて、僕はその場所に向かっただけだった。

線香を手向けた後、母に近況を報告をした。しんみりと頷きながら僕の話聞いていた母だったが、きつと僕の話していることは、母の胸の中までは届いていなかっただろう。

母はただ目を潤ませて、僕を見ていた。

そう。ただ、見ていた。

母だけが、強固で健全で慈しむべきだと思い込んでいる、家族の絆とかいう、本当はおぼろげで脆い母と兄と僕と、今はいない父とのつながりを、母は僕の姿を通して見て、すがり付こうとしているだけだと、判った。判ってしまったから、母の盲目さが、僕には苦痛だった。そして、僕はその痛みから逃げるように、散歩してくるなんてとってつけた言い訳を吐いて、家を出た。

殆ど無意識だった。何も考えずに拓郎のバイクを駆り、辿りついたのは、あの東の端の岬だった。

道端にバイクを止め、岬の先端まで出たところで、先客を見つけた。

彼女だった。

昨日と同じ場所で、昨日と同じようにほんの少し手摺りの向こうに体を投げ出して、海を眺めていた。

本当に期待も予感も無く、衝動に従ってここに向かっていただけだ。彼女が再びここを訪れているなんて、これっぽっちも勘ぐっていなかった。だから驚いて、そして、少し喜んでいる自分に気がついて、なんとなく、悟った。

僕は、彼女を気にかけている。

父のファンだということ。

意図的にか無意識にか、とにかく、父の漏らした言葉をなぞったこと。

恐らく生前の父となんかしらの接点があったんだろうという、曖昧な憶測。

それ以外、何も知らない彼女を、僕は、少なからず気にかけている。

彼女の放つ妖しい艶とか、少しアンバランスで、だからこそ綺麗と感じる顔立ちとか、どことなく漂ってくる危うい空気とか、そういった彼女の印象全てが、僕の胸の奥のほうを、ほんの微かに、火照らせる。ほんの少しだけ、脈を早く波打たせる。

不思議な感覚だった。

「ストーリーカーですか？」

僕の気配に気付いた彼女は、からかうような口調とも、蔑むような口調ともとれる、あやふやな声色で、振り向きながら言った。

「偶然だよ、本当に。つけてきたわけじゃない。」

少しむきになって否定する自分が、滑稽に思えた。

「私はストーリーカー、みたいなもんかな。」

言って、彼女は笑む。やはり、からっぽの笑みだった。

「ストーリーカーって、親父の？坂巻剛のって、こと？」

「やつぱり、坂巻剛の息子なんだね、あなた。」

「君は、親父のファンなんだろう。」

「ファンて言うか、ストーリーカーかな。死んじやっても、あの人のこと追いかけてるし。うん、立派なストーリーカーだね、私。」

「そんなに好きだったんだ、親父の絵。」

僕の言葉に、突然彼女は吹き出した。あまりにも唐突だったので、思わず思考が固まる。

「私がゲージユツのことなんて、判るわけないじゃん。」

ゲージユツ、というイントネーションの軽さが、彼女の若さを感じさせた。やはり若いのだ。笑いながらのけぞる彼女のしぐさのふしぶしから、若いからこそその無邪気さが零れ落ちた。

でも　　と僕は再び、止まってしまった思考を蘇らせる。  
だったら、彼女と父をつなげるものはなんなんだ。

以前にも抱いた、一番当たって欲しくなかった予感が、また脳裏を過ぎり、慌ててもみ消す。でも今度は、上手く消え去ってはくれない。

娘ほどに歳の離れた彼女と、父との関係。

何人もの女性を囲っていた、父との。

彼女は父の

嫌悪感で、肌が泡立った。鈍く重く僕の胸を打った。

父に対する憤りなのか　　違う。

僕の嫉妬？

父に対して？

僕はやっぱり、ただ気にかけているだけじゃなくて、彼女を好きになっちゃった？

判らない。

とにかく、動揺した。体の中の水分がすみからすみまで波打つような悪寒が走った。

「じゃあ、なんで？」

知りたくない。本当は。でも、そんな意志とは無関係に、あれこれと妄想する僕自身の想いの指す方向を、恐る恐る覗き込むように、僕は尋ねた。尋ねてしまった。途端に、彼女の笑い声が止んだ。一瞬押し黙って、でも、からっぽの笑みを携えたまま、彼女は言った。

「判ってるんでしょう？私はある人の恋人だから。」

避けて通りたかった現実を、突き付けられた。鈍器で打ちつけられたような鈍い痺れが、胸に走った。

判っていたはずなのに。何でわざわざ確かめた？知らなくてもいい現実だって、あるじゃないか。自分で自分を責める声が、どこから聞こえる。

「恋人っていうか、不倫相手？情婦？愛人？まあ、呼び方は何でもいけど。」

彼女の淡々とした口調が、ことさらに、僕を痛めつけた。

彼女の語る現実が、僕を打ちのめした。

そして、そこから先、僕はどんな感情を持って行動していたのか判らない。衝動が感情を覆いつくして、隠して、僕の意識とは別に勝手に動く手足に僕は僕自身を委ねていた。

手摺りに寄りかかっていた彼女の手を強引に引き、押し倒し、覆いかぶさった。

彼女の纏うワンピースの藍色がひらりと舞い、尾を引いた残像が、海と空の蒼に溶けた。

捲れたスカート裾から覗く彼女の脚の白が、まぶしく僕の瞳に映りこんだその時、胸の奥から突如湧き出したざわつきが、体中を駆け巡り、肌を粟立たせた。

僕は、止まった。ざわつきが、僕を止めた。

そのまま、僕の下で横たわる彼女を見た。

彼女も僕を見ていた。

からつぽの笑みが、僕を見上げていた。

「やっぱり、臆病なんだね。最初に会った時から、判ってた。」

彼女がそう言うと同時に、僕は跳ね上がるように彼女から離れた。自分の行動が突然くつきりとした輪郭を持って、リアルに僕の脳裏に蘇る。同時に、自分自身に対する嫌悪感が、僕の体を小刻みにわななかせた。

「ごめん。」

震えて、擦れた声を絞り出すように、言った。

言って、素早く踵を返すと、街道へと続く緩い坂を駆け下りていった。

僕はまた、逃げ出した。

何故？

問いかけても、答えは返ってこない。

そもそも誰に問いかけているのか、誰に問いかけるべきなのかすらも、判らない。

衝動。

その一言で片付けてしまえば、それまでのこと。それだけは、判る。何となく。

でも、それじゃ僕は救われない。

胸につつかかる異物感は、消えない。

彼女を押し倒した。

父の愛人だったと告白した彼女を、僕は、壊そうとした。

何故？

母のため？

彼女も、僕や兄や母から父を遠ざけた、僕らを傷つけた人間の人だから？

それとも、嫉妬？

もう死んでしまった父から、彼女を奪い取ろうとして？

答えは返ってこない。何も、判らない。

判らないから、僕は走る。

拓郎のバイクに跨り、島の街道を、ただただ、走る。

兄は知っていたんだろうか。

きっと、知っていたんだろう。

父と彼女との関係。

母は？

『さつきあの人、来たの。本当に来たのよ。』

ほんの僅かに耳の裏側に残っていた母の声が、鮮明に頭の中で響きだす。

母も知っていたのか。

知っていたんだ、きつと

僕は、走る。

そして、ふと、思う。

彼女は何のために、この島に来たんだろう。

父を弔うため？

多分、違う。

遺産が欲しい？

それも違う。そんな安っぽさで、彼女はきつと動かない。

復讐？

本当の家族になれなかった、愛人にしかなれなかった憎しみや恨みや妬みを、僕ら本当の家族に知らしめて、苦しめたかった？

違う。絶対に。そんな感情は、彼女のどこからも漏れ落ちていなかった。

だったら、何なんだ。

問いかけたいことは胸の中にとめどなく溢れるのに、判らない。

何も。何一つ。

判らないから、僕は、走る。

唐突に、背後から排気音が迫ってきた。

昔よく馴染んだ排気音。薄れて消えかけていた記憶のどこかに、ひっかかる音。

それは、一瞬で僕の乗ったバイクを追い抜くと、腹の底に響くようなエンジンブレーキの音を響かせながら減速して、僕を先導するようにすぐ前を走り始めた。

ゼファアの400。

まだ僕がこの島にいた頃、拓郎の運転するこのバイクのタンデムから、よく見ていたテール。それに跨る、肉付きのいい背中。見覚えのある、というより、過去に何度も見たことのある光景。

間違いない。

啓太だ。

啓太の部屋にあれこれと山ほど詰まっていたヤンキー漫画に、必ず出てくるマシン。アメリカン派の拓郎が、容赦なくこき下ろしていた、啓太の愛車だった。

懐かしい。そう感じて、僕がアクセルを空ぶかしすると、啓太はおどけて見せるように蛇行運転をする。昔よくこの街道を三人で走っていた時と同じじゃれ方だった。

本当に懐かしくて、胸が弾んで、そのまましばらく二人で縦に並んで、島の街道を流した。

ヘルメットの隙間から入り込んでくる新緑の匂いに、潮の香りが混ざり、僕の鼻先をくすぐる。

体を突き抜けていく風が、胸を躍らせる。

エンジンの振動と高揚感が、シンクロする。

忘れていた、バイクを走らせている時独特の快感が、ギアを突き上げていくつま先から、全身に染み渡っていくように蘇ってくる。

そうなんだ。本当は、本来は、こういうスタンスで跨らなくてはならないんだと、僕をその排気音で鼓舞するマシンが、それまでの淀んだ胸の中のわだかまりから、ほんの少し、開放してくれた気がした。

島の北端に差し掛かるところで、啓太のバイクは街道を左に折れた。僕も、それに続く。島の中央に佇む山の頂上へ伸びる、ドライブウェイ。ワインディングの続く上り坂を啓太を追うように駆け上がり、山の中腹あたりの、島の南側を一望できる丘の上の休息所で、そろってバイクを停めた。

「やつぱり一人で走るより誰かとつるんで走ったほうが気持ちいいな。」

休息所の隅に置かれたベンチに並んで腰掛けると、大きく伸びをしながら啓太が言った。

「拓郎と走ってないの？」

「なかなかあいつと俺の暇な時間が合わないからさ。」

啓太は苦笑を浮かべながら、ジーパンのポケットに捻じ込んだタバコを取り出して火をつけると、溜息と一緒に紫煙を吐き出した。

「なんだかな、あいつとも昔みたいにはもうはしゃげなくてよ。

まあ、何年か前からそれが当たり前になってきて、別に寂しいとか虚しいとか思ってたわけじゃないんだけど、お前が帰ってくる所高校ん時のこと思い出すだろ？ そうするとよ、なんだかうずうずすんだよな。昔と同じふうにならなくていいか？ 判る？」

言つて、啓太は無邪気な笑みを向けた。僕は黙って頷いて、啓太の指に挟まれたタバコを奪い取ると、大きく煙を吸い込んで、空に向けてはいた。

嬉しかった。啓太が僕を、僕や拓郎と過ごしていたあの日々を、懐かしんでくれることが、体の芯に染み込んだ。

人は変わっていく。人と、それを取り巻く世界は、止め処なく流れていく。そして流れ去った過去は、想像以上に脆く、あっけなく淡くなつて、薄れて、消えていくんだと思っていた。でも、そんなことはない。どうしても消し去りたくない記憶は、ほんの些細なきっかけで再びくつきりとした輪郭を取り戻し始める。

啓太にとつての僕が、そのきっかけになつていたのでしたら嬉しいと、心底思つた。僕にとつての啓太が、そうであるように。

しばらく二人でそこから見える海を眺めて、別れた。

啓太は漁があるからと、港へ、僕はバイクのノーズを、実家へと向けた。

母と兄を、問いたださそうと思つた。

父の死んだ理由。父が死を選んだ、理由。

そして、彼女のこと

はつきりとさせなくてはならない過去がある。はつきりとさせなくては、先に進めない過去が、きつと、ある。過去は、ただ無防備に懐かしむためだけにあるものじゃない。

啓太と会つて、話して、そんなふうにした。

家に帰ると、母は庭に出て、植栽に水を撒いていた。ただただ、いつもの生活のリズムをなぞっているだけで、心が体から離れてしまっているような空虚さを背負いながら。縁側に立ってそんな母を見つめる僕に気付かないくらい、無心に。

「あの人って、誰のこと？」

母の背に向けて、言った。

酷な事を尋ねていると、判っていた。母のその脆い後姿に追い討ちをかけるようなことだと、承知していた。知っていて、聞いた。

母の動きが止まった。手に持ったホースの先から、母の足元にとめどなく水が滴り落ちる。はねた水が、母のサンダルを濡らす。それでも、母は動かない。僕はすぐ側にあつた庭先の蛇口を閉めると、もう一度、言った。

「兄さんと話してたあの人って、誰のことなの？」

母はようやく僕を振り向いた。

何もかもを諦めてしまったような力の無い微笑みが、母の顔に貼りついていた。

「お兄ちゃんには、淳ちゃんに話すなって言われてるんだけど、別に、いいわよね。」

母はとぼとぼと力ない足取りで縁側まで戻って、僕の立つすぐ脇に腰掛けた。僕も、母のすぐ横に腰を下ろし、並んで座った。

間近で見る母の横顔は、遠めで見るとよりもはつきりと、母の老いを痛感させた。単純に10年という年月だけが刻んだものではないのだろうということも、一緒に。

「今ね、島にお父さんが昔付き合ってたって女の人 coming のの。」  
呟くように、母が言う。

やはり、彼女のことだ。

「もう会ったよ、その人。」

僕が言うと、母は少し目を見開いて驚いた素振りを見せたが、そう、と溜息混じりに返して、またすぐに、力の無い笑みを浮かべた。「親父が死んだ理由って、その人と関係あるんでしょう？」

母のくたびれた横顔に問いかける。母を追い詰めているようで、鞭を打っているようで、胸がきしりと音を立てる。が、聞こえない振りをした。

母はゆっくりと、首を横にふった。

「それは判らないの。あの人とお父さんがどの程度の関係で、どいうことを話していて、どんな生活をしていたのかなんて判らない。遺書も無かったし。ただ」

母はそこで一度言葉を切った。そして空を仰ぐように見ると、眉根に皺を寄せた。疲れきった表情の中で、母の瞳だけがざらついた。

「あの人が訪ねてきた理由は知ってる。」

母の目の奥の、どぎつい光に気圧されて、僕は思わずたじろぎ、言葉を継げなかった。黙っている僕に、母がまっすぐにその光を向ける。

「骨が欲しい、って言ったの。」

胸の中の何かを無理やり押さえ込んだようなその母の声は、僅かに語尾が震えていた。

「骨？」

僕が聞き返すと、母はゆっくりと、力強く頷く。

「そう、お父さんの遺骨が欲しいって。ほんのひとかけらだけでもって。」

母の目が、更に強く深く、ざらついた。ものすごい威圧感が、そこからあふれ出ていた。正面からそれを受けきれず、僕は目を逸らした。見たことの無い母の表情にうろたえた。

「なんで、そんなものを？」

「知らない。でも、渡さない。もう、いいでしょう？死んでしまつて、あの人はやっと私のところへ帰ってきてくれたんだから、もう、私があの人を独り占めしたって、いいでしょう？」

途中から、涙声に変わっていた。そのまま、嗚咽を漏らしながら、母は悲しみからなのか悔しさからなのか、くしゃくしゃに崩れてしまった顔を、両手で覆った。

やはり酷な事をした。そう思った。思ったが、釈然としないのも確かだった。

何故は母こうまでして、父を追い続けるのだろうか。

父が母にとつて、最善とは言わないまでも、せめてありきたりな夫であったのなら、まだ納得できる。でもそうじゃない。父はずっと、母を傷つけてきた。傷つけるのはいつも、父だった。

もう開放されたつていいじゃないか。父はもういない。もう、母を縛り付けるものは何も無い。なのに母は、自らしがみ付いて、傷つき、苦しむ。もういいじゃないか。もう

その時だった。

唐突に二の腕を引かれた。無理やり立ち上げさせられ、そのまま引っ張られた。

兄だった。

「ちよつと、兄さん……」

僕の腕を強引に引く兄に逆らおうとしたが、有無を言わさない勢いが、その時の兄にはあった。仕方なく、引かれるがまま、兄に続いて縁側を離れた。振り返ると、母はまだ顔を両手で覆って、背中を小刻みに震わせていた。

記憶のどこかと、重なる光景。

そうだ、まだ幼かった頃に見た、夜中に台所で震えていた、あの母の背中。

確かめなくてはいけない

その決心が、少し揺れた。

玄関を出たところで、ようやく兄は僕の手を離した。

その勢いから、僕は、兄は怒っているものかと思っていた。父の死に打ちひしがれてしまっている母に、追い討ちをかけるような詰問をして、母をことさらに苦しめている僕に、憤っているのだと思つた。でも、兄の浮かべていた表情は、怒りと言うよりもむしろ、怯えているような印象を抱かせるものだった。

「このことは、俺が始末をつけるから、もうこれ以上関わるな。」  
命令口調ではあつたけれど、やはり何かを怖がっているような震えが、兄の声に溶けていた。

「兄さんも知ってたんだ。彼女のこと。」  
僕は僕で、まるで他人のようにつまはじきにされている気分になつて、少しむつとして、そう返した。兄は僕の言葉に眼を見開いて驚き、少したじろぐように身を引いた。

「お前も、知ってたのか？」  
「知つてたつていうか、この島に着いて、彼女とちよつと話す機会があつて、なんとなくそうなのかなつて。はっきりと判つたのは、さつき母さんに聞いた時だけだ。」

「彼女と話す機会つて、何を話したんだ？」  
今度はつつかかるように、兄は僕に向けて身を乗り出す。兄の動揺とか、焦りとか、心の揺れとかいったものが、落ち着かないその拳動から漏れ落ちていようで、でもその源がいまいち曖昧で掴み所が無くて、不自然だな、と僕は思わず眉をひそめた。

「何つて、親父のファンだったとか・・・」  
と、答えたところで、彼女がああ岬で漏らした言葉が脳裏に蘇る。  
『どこまでを人殺しと言うのかな』

生前に同じ場所で父が呟いた言葉を、偶然なのか、彼女も同じように口にしたあの時の光景が、くつきりと脳裏に浮かんだ。

ただ、それを今この場で兄に説明するのは、なんだかいけないことのように思えた。根拠は無かったけれど、何となく。

その代わりに、もうひとつの、彼女の残した言葉を口にした。

「そういえば、私が坂巻剛を殺した、とか言ってた。」

兄の眉が、ぴくりと小さく震えた。

「酔っ払って、寝ぼけてて、ちよつとひどい状態の時に言ってたことだから、信用できないけど。でも、親父は自殺したんだよね？」

僕の問いかけに兄はすぐには答えず、低く唸るような声を漏らした。そして腕を組んでうつむくと、うつむいたままで、ぼそぼそと呟くように言った。

「話したのって、それだけか？」

「それだけだよ。」

「そうか。」

と、面伏せたまま答える兄を見て、昔と変わらず不器用だな、と思った。そんなやりとりをすれば、僕が知らない何かを兄が隠しているなんて事は、誰にでも判る。

「兄貴、なんか隠してることあるの？」

ストレートにそう尋ねた。兄は跳ねるように伏せていた視線をあげ、すぐにそれを脇に逸らして、「別に」と短く答えた。やはり、不器用すぎるほどの判り易さで。

本当に変わってない。そしてきつと、何をどう尋ねても、もう何も答えてくれないであろう頑なさも、昔のままなんだろうと思いつつ、素直にそんな兄の性分を飲み込んでしまうのも、どこか癪に障った。だから僕も意固地になって、少し冷めた口調で、突き放すように、言った。

「親父の骨、あげちゃえば？欲しがってるんでしよう。それで解決することなんじゃないの？」

「駄目だ。それは絶対に駄目だ。」

「母さんが傷つくから？でもこのまま彼女に付きまとわれたほうが、つらいんじゃないの？別にいいじゃないか、骨のほんのひとか

けら、母さんに気付かれないうちに兄貴がそつと抜き取って、彼女に渡せば。それで彼女がおとなしく引き下がってくれるなら、そのほうがいいじゃないか。」

「何も判ってないくせに軽々しく言うな。」

兄が声を荒げる。だから、僕もつられてむきになってしまつう。

「だったら判らせてよ、俺にも。こそこそ隠してないで、知ってること全部言えればいいじゃないか。」

「知ってることなんて無い。」

「馬鹿にするなよ。俺だってそんな鈍感じゃないんだ。兄貴の態度を見てれば、何か隠してることぐらい判るって。」

突然、兄の手が僕の頬を打った。痛さというより驚きで、僕は押し黙ってしまった。

「この家からずつと逃げてたお前に、このことにかかわる資格は無いんだ。」

さつきまでの興奮を掻き消してしまったような静かな、でも厳しい口調で、兄が言った。ただ、兄の言い放った言葉の意味を、かみ締めればかみ締めるほど、身勝手な理屈に思えてきて、じんじんと痺れる頬の痛みと一緒に、憤りも膨らんできた。

「兄貴だって、逃げてたじゃないか。」

怒りに任せて、言った。兄の口調を真似て、静かに、それでいて責め立てるような厳しい口調で。

でも兄はもう、ひるまなかつた。今度は静かに、首を横に振った。「だから、お前は何も判ってないって言うんだ。」

そのとき、兄の発した言葉の意味以上に、兄の顔に落ちた鬨りに、有無を言わさない圧力のようなものを感じた。兄は僕を納得させるようなことは何ひとつ、口にしていない。でも、その兄の背負った空気が、僕をこれ以上抗わせなかつた。

「とにかく、俺に任せておいてくれ。」

そう言つて僕に背を向ける直前の兄の横顔が、妙に胸に突き刺さる虚しさを携えていた。

重く湿った空気を背負って家の中に入っていった兄の後を、追う気にはなれなかった。

僕は兄と実家とに背を向けるように踵を返すと、拓郎のバイクに跨り、逃げるようにそこを離れた。

兄の雰囲気は吞まれてしまって、その時はそれ以上、反論できなかった。けれど、実家から拓郎の家へと戻る途中で、脳裏に蘇る兄の言い放った言葉の理不尽さに、思い出したように怒りがこみ上げてきた。

何を隠しているかは知らないし、何もかもを僕に明かせとは言わない。でも、父さんのことは、この家のことは、兄さんが知っているだけのことを僕だって知る権利があるんじゃないか？僕と同じように、父さんや母さんやあの家から逃げ出した兄さんに、何故僕がこんなふうな責め立てられ、突き放されなければならないのか。そこまで思っ、自分の身勝手さにも気付く。

結局、僕が憤っていることも理不尽だ。

兄も僕同様に逃げ出したとは確かだが、僕が逃げたことも、紛れもない事実なのだ。今の僕はただ、兄の非を立てて、自分の非を誤魔化しているだけなんだ、結局。

そんなふうな思い至って、自分のちっぽけさに自分で情けなくなつて、ヘルメットの中で生ぬるい溜息を漏らした。

それでも。

どうしても知っておきたかった。

彼女のこと。

父の死の本当の理由。

兄の背負う影の正体。

僕の知らない何かはまだ、兄や彼女の向こう側でうごめいて、姿を見せないままに、僕を疼かせた。

とにかくも、兄からも、そして多分、兄の隠している『何か』を知らないであろう母からも、それを聞き出すことはできないだろう。

彼女から、聞くほかは。

考えが彼女に行き当たると、あの岬の上で僕を支配した衝動が、僕をたじろがせた。

あの時僕を突き動かしたのは一体なんだったんだろう。そして、あの時の僕の暴走を止めた、体のずっと奥の方から湧き上がるようなあのざわつきは。そもそも、あんなことをしてしまった後で、どんな顔をして彼女に会えばいい？

感触だけは、妙にリアルに残っていた。あまりにもあっけなく、あまりにも抵抗無く、僕の前に倒れこんだ彼女。まるで何もかもを受け入れるような、無防備な、あの感触。

何故？

何故抵抗しない？

まるでそうなることを、そうされることを望んでいたかのようなあの無抵抗感は一切何なんだ。

いくら自問しても答えは出なかった。出ないままに、気がつくともう、拓郎の家に着いてしまった。

「答えなんて、出るわけないよな。」

思わずひとりごちると、自嘲するような笑みが無意識に漏れた。

玄関脇の駐車スペースまでバイクを引き、スタンドを立てながら、ふと頭上を見上げる。彼女の部屋の窓は、閉め切られていた。エアコンをつけるほどでもないこの中途半端な暑さの中で窓が閉められているということは、留守なんだろうか。

「淳。」

そんなことをぼんやりと考えていたら、背中に声があつかった。

振り向くと、ワインのボトルを片手に持った、エプロン姿の拓郎が立っていた。その格好が少し滑稽に見えて、小さく吹いてしまった。

「なんか、意外とそういう格好似合うのな。」

「仕事だよ、ばかやろう。お前らの晩飯仕込んでんたろうが。」

「つつかかるなよ。褒めてんだから。」

「褒めてるって表情じゃねえだろつが、ばか。」

言いながら、拓郎は手に持ったワインボトルを僕の胸に押し付けた。

「何だよ、これ。」

「ビーチにあの娘がいるから、持ってってくれよ。さっき電話があつて頼まれたんだ。」

「あの娘って、あの？」

僕は、彼女の泊まっている部屋の、閉め切られた窓を指差した。

「そう。」

「まだこんな陽の高いうちから飲むのか？昨日もあんなに酔つたのに。だいいち、あの娘、まだ未成年かもしれないだろつ。いいのよ。」

「頼まれりゃ出すんだよ、酒でも何でも未成年にでも。商売だからな。」

強引な商売論と一緒に、拓郎は無理やりボトルを僕に突きつけると、すつと踵を返した。

「俺も客だろつが。俺に頼むなよな。」

「お前から金は取らないから、それくらいしろ。」

背を向けたまま、軽くあしらうようにそう言うつと、拓郎は家の中に引っ込んでしまった。僕は僕で、渋るようなことを言いつつも、内心、彼女に話しかけるきつかけができたことに安堵していた。

彼女は、昨日の夜僕と優希とが並んで腰掛けていた流木に座り込んで、低い波が寄せる砂浜を眩しそうに眺めていた。そしておらずと近づいていく僕に気付くと、挑発するような少しとがった笑みを投げてよこした。

「さっきの続きがしたくて追ってきたの？でもここじゃ人目につきすぎるよ。」

皮肉と言えば皮肉だったけれど、口調から、悪意とか敵意とか、警戒心みたいなものは感じ取れなかった。ちょうど僕が、啓太や拓郎と戯言を交し合うときと同じような軽快さが、語尾に溶けていた。おかげで、さっきのあの暴走に対して抱いていた窮屈な罪悪感から、少しだけ開放されたような気がした。

「いや、本当であれば、ごめん。なんだか動揺して、なんて言い訳、通じないだろうけど。」

歯切れ悪く僕が返すと、彼女はあからさまに吹き出して、けたけたと笑い出した。

「大胆なことするくせに妙に弱気なの、あの人と似てる。やつぱり親子だね。」

彼女の声には、ふわりと宙に浮いて漂うような揺らぎがあった。少しぼやけた、曖昧な震えと、響き。ふと彼女の足元に転がっていたワインの空ボトルに目が止まり、ああ、酔ってるのか、と気付いた。そして、僕が右手に携えていた、拓郎に託されたもう一本を、彼女に渡すべきなのかどうか戸惑っている、彼女は流木に腰掛けたまま腕を伸ばして、僕の手の中に入ったそれを奪い取った。

「さっきのあれ、悪いと思ってるなら付き合ってよ。」

言いながら彼女は、手に持った紙コップを突き出した。受けとったその紙コップは、もう一本目のワインが注がれたときに目いっぱい水分を吸い込んでいて、破けてしまいそうなほどにふやけていた。

「こんなので飲んででも美味くないでしょ。」

と、言つては見たけれど、無駄だった。彼女は不器用な手つきで僕から奪い取つたボトルのコルクを抜くのに必死になつていて、僕の言葉はどうやら届いていないようだった。仕方なく僕は、小さな溜息と一緒に、彼女の横に腰を下ろした。

こつやつてすぐ傍で彼女と肩を並べると、なんだか不思議な気分になつた。少し距離を置いて彼女を見ている時は、彼女の放つ不思議な艶に惹かれて脈が早くなつてしまふのに、肌が触れそうな程に近くにいる今のほうが、どうしてか、妙に落ち着いた。

唐突に、ぽん、と気の抜けた音がして、同時に、「抜けたー」と安堵する彼女の声が耳に飛び込んできた。

「はい。」

無邪気に笑みを浮かべて、コルクのかすがとどこどここびり付いたボトルの口を、彼女は僕に差し出した。どこか子供じみた、はしゃぐような彼女の笑みが眩しかった。

「それじゃ、いただきます。」

紙コップを差し出すと、彼女はそれにワインを注ぐ。ふやけた紙越しに伝わってくる生ぬるい感触にちよつと顔をしかめつつ、一口飲んでみる。すると、想像以上の渋みが口の中を引き締めた。思ひのほか、おいしかった。

「かなりうまい、これ。」

「でしょ。わざわざ家からあの宿に何本か送つておいたの。」

彼女は自慢げに鼻を鳴らした。

「お酒、好きなんだね。」その歳ではちよつと過ぎるけど、とは思つたけど口にしなかった。

「ママの影響かな。お店やつてたの、私のママ。おじさんたちが行くような、カラオケのあるお店。」

「いわゆる、クラブとかパブとかつてやつ？」

商店街の隅つこで、おぼろげに夜闇に光る、こじんまりした店舗を思い浮かべながら、言つた。

「そうそう、それ。小さい頃から出入りしてたら自然とね、お酒好きになって、若くしてアル中一步手前ってやつ。」

ようやく、彼女の放つ艶の意味が判った。タネを明かして見れば結構月並みなことだ。彼女の内側から湧き上がる、少しつんとしてそれでいて妙に人を惹きつけるような空気。きつとそれは彼女が、淡いネオンの光の中で纏い込んだ、夜の闇の中に生きている人独特の、オーラのようなものなんだろう。

そこでふと、父の顔が脳裏を過ぎった。

父は、その淡い闇の中で彼女を見つけて、そして、彼女の持つ艶の中に飲み込まれていったんだ、きつと。

そんなふうには想像すると、今までだったらふつつつと怒りがこみ上げてきていたというのに、このときは何故か、すんなりと想像の中の父の姿を受け入れてしまった。

「親父の骨、欲しいんだって？」

僕は思い切って聞いてみた。

彼女はちらりと僕を一瞥してから、目の前にはないずっと遠くの何かを見つめるような、焦点の曖昧なまなざしを海の方こうへ投げた。

「私も、遺族だから。だから、それくらいの権利、あるよね？」

無数に碎ける波のしぶきの音に、すつと溶けていってしまいそうな、なめらかな声だった。だからなのか、その言葉は耳と言うより、直接僕の胸の中に染み込んできて、余韻を鈍い痛み変えて、消えた。愛人、という立場でありながら、遺族と言い切る彼女のひたむきさが、痛かった。そして母のように、父に対する独占欲を、僕はどうしても抱けなかった。

だから、言った。言えた。

「俺が取ってきてあげる。母や兄に気付かれないように。親父の骨。」

彼女の顔が、にわかに輝いた。そこにはさつきまでの艶は無く、代わりに、無垢な少女の喜びが満ちていた。でもどこか気にかかる

翳も、彼女の笑顔のそこそこにちらついていた。

何故、あんなことを言い出してしまったんだろう。

再び拓郎のドラッグスターに跨り、実家へと戻る途中で、今更ながら思った。

彼女の気を惹くためだったのか、彼女に同情したのか、僕を突き放そうとする兄にしかえしがしたかったのか。

どの思いも嘘っぽくて、どの思いも、正しい気がする。

自分で自分が本当に意図していることが判らなかつた。けれど、ああ言ってしまったことに、後悔は無かつた。

ビーチから戻ると、夕食はいらないと拓郎に言い残し、宿を出た。「もつと早く言えよなあ」と愚痴っぽく拓郎は言つたが、表情にはむしろ、再び実家へ向かおうとする僕の背を押すような、やさしさが溶けていた。例え過去になにがあつたとしても、十年ぶりに故郷へ帰ってきた今くらい、家族と一緒にいてやれ、という説教じみた暖かさと一緒に。

陽が傾き始めていた。バイクの排気音の向こう側の、それまでは耳鳴り程度にしか聞こえていなかった波の碎ける音が、大きく響きだした。波の音が大きくなつたというより、島が夕暮れの静けさに沈んでいっているのだろう。朝の早い島の人々の息遣いが、徐々に小さくなっている証拠だつた。

アスファルトが夕陽の橙と夜の紫で斑模様にも染まる頃、実家に戻つた。

中途半端な暗がりだが、昼間に訪れたとき以上にこの家の沈んだ空気を際立たせていたが、家の中から漂ってくる懐かしい匂いは逆に、昼間は抱けなかつたぬくもりを感じさせてくれた。

煮魚の匂い。

ごくありふれた、夕時に家々を包む、匂い。

本当にありふれてはいたけれど、誰でも判るはずだ。月並みな匂

いの中に微妙に漂う、自分の生まれた家だけが持つ、匂いの癖。

ああ、帰ってきたんだと、このときようやく僕は、実感することができた気がした。母を感じさせるにおいだった。同時に、そんな母に隠れて、母を裏切ろうとしている自分に気付き、ちくりと胸が痛んだ。

家に入ると、母は台所に立っていた。ゆったり、それでいて淀みない動作で夕食の準備を進めていた母の背は、昔毎日のように見ていた母の背よりも、こじんまりとされていて、それが悲しいのか、胸がきゅつと締め付けられた。

「淳ちゃん？」

僕に気付いた母が振り向いた。

ただいま、と小さく返すと、母は目を細めて笑み、再び夕食の支度に戻った。

「良かった。お兄ちゃんと喧嘩して出てったみたいだから、ちゃんと戻ってきてくれるのか心配だったの。」

背を向けたままで、母が言う。兄と喧嘩、という言葉の響きが妙に懐かしくて、はにかむような笑みが無意識に漏れてしまった。

「別に喧嘩なんてしてないよ。」

いいながら、居間を振り向いた。

兄は居なかつた。誰も居ない、薄暗い居間。その奥の仏壇の前にぼつんと置かれた、父の骨壺が納められた木箱が目にとまった。留まった途端、脈が速くなるのが判った。

「兄貴は、いないの？」

母の背に向けて尋ねた僕の声は、ほんの少し震えていたかもしれない。わざとらしいほどに、そっけない口調だったかもしれない。でも、母は僕の動揺にも緊張にも気付かなかつた。

「ちよつと散歩してくるって、ついさっき出てったのよ。入れ違いだつたみたいねえ。」

のんびりとした口調で、ふりむかずに母が言う。反対に僕の脈は、更に速くなった。掌に、生ぬるい汗がじわりと浮いて出た。

今なら、抜き取れる。

父の骨壺を見やる。

もう一度母の背を見て、振り向く気配が無いのを確認してから、足音を立てないようにそろりそろりと居間に入り、仏壇の前に立った。

父の遺骨の納められた木箱にまなざしを落とし、ちらりと台所の母に一瞥を投げる。

大丈夫。母は夕飯の支度に夢中で、振り向く気配はない。

丁寧に、音を立てないように、そのくせ素早く、木箱を包む布の結びを解き、木箱のふたを開ける。中に収められた骨壺を確認してから、もう一度母の背を見る。大丈夫。やはり、振り向く気配はない。

それでも僕は神経質なほど、母の背と骨壺とに交互に視線を向けながら、素早く父の遺骨のひとかけらを抜き取ってポケットに捻じ込み、蓋を閉め、木箱とそれを包む布とを元通りに直した。

全てが終わった後でもう一度、台所を振り向いた。

母はまだ、背を向けたままだった。

僕の内側で火照っていた熱が、引き潮のように音も無くすつと薄れていった。

しばらくは、腰がふわふわと宙に浮いたように落ち着かなかった。ジープのポケットに捻じ込んだ父の骨の感触が、くすぐりたいというよりも、まるで足の付け根に異物を詰め込まれたように、いつまでも馴染んでくれなかった。

夜になり、散歩から帰ってきた兄と、母との3人で、久しぶりに食卓を囲んだ。

母は、兄や僕がまだここに住んでいた頃の思い出や、兄や僕も知っている昔から馴染みのある近所の人たちの近況を、僕たちの曖昧で貧相な相槌にもめげずに、ひっきりなしに話し続けた。時々うわずる声が、無理をしていることを暗に告げていた。久しぶりにこーうやって食卓を囲む家族の間に、沈黙が流れてしまうのが怖いのだ。沈黙がまた、僕ら家族を引き離してしまうのだと信じているのだ。決してそれは、沈黙の所為などではないと、兄や僕と同じように、母も本当は、気付いているはずなのに。

最初に逃げ出したのは兄だった。読みかけの本があるからなどと取ってつけたような言い訳を残して2階に上がった。そのすぐ後に母も、床につくからと居間を出た。

僕だけが、そこに残った。

ひとり取り残されてみると、昼間、母が台所に立っている隙を狙って、どぎまぎしながら父の遺骨をポケットに捻じ込んだ自分が、滑稽に思えて仕方なくて、苦笑が漏れた。

ポケットの中から父の遺骨を取り出し、どこか薄暗い居間の照明にかざしてみる。

父が焼かれたときに兄の胸を満たした遺失感なんてものは、沸いてこなかった。泣いた、と兄は言ったが、僕には、涙の気配すら感じられない。ただ、こんなもんか、という冷めた思いが、胸の中でゆらゆらと漂うだけだった。

不意に、電話が鳴った。

既にこの家に暮らしていない僕がでるべきなのかどうか、一瞬迷った。2コール目が鳴り終わっても、母や兄の気配を感じられず、3コール目が鳴り止んだ時に、少し慌てて受話器を取った。

「はい。」

反射的に答えたが、受話器の向こうからは何の反応もない。

「もしもし？」

今度は少し訝しむ声で、電話越しの相手に語りかけて見る。すると、長く尾を引く溜息が、かさかさとした乾いた響きのノイズと一緒に、僕の耳に届いた。

「いつ帰ってくるの？」

記憶にない、女性の声だった。苛立ちと諦めとが混ざり合った、湿った声色が、耳の奥に粘ついた。帰ってくる、という言葉の意味が、すぐには飲み込めず、受話器の向こうの相手が誰なのかも判らず、その言葉は何を意図するのか、などと黙ったままあれこれと考えているうちに、再び、溜息が受話器から漏れた。

「あなたがそう望むなら、別に私はいきり立って反対するつもりはないけど、でも、早くはつきりとしておいたほうがいいと思うの。子供たちのためにも。判るでしょう？」

それを聞いて、ようやく状況が飲み込めてきた。

僕を、誰かと勘違いしている。

誰か　　考えて、思い当たったのは兄だった。

そして受話器の向こうの相手は、恐らく、兄の妻である人なんだろう。僕を兄と取り違えている。それほど、僕の兄の声は似ているのかな、と思い返してみたが、自分が思うほどに、推し量れない。似ているようにも、似ていないようにも、感じる。

「あ……」

「どうせその島に、あの女もいるんでしょう？」

相手の勘違いを正そうと口を開いた途端に、責め立てるような声をかぶせられた。

「お父さんのお葬式にかこつけて、本当はそこで、あの女と会ってるんでしょ？もうお葬式なんてとづくに終わったじゃない。まだ帰ってこないのは、あの女もそこにいるからなんでしょう？」

一息にまくし立てられ、完全に言い返すタイミングを逃してしまっただ。いや、相手の勢いに圧されたというより、その言葉の意味するところが、僕を黙らせた。

あの女　誰を指しているのか、想像できてしまう。できてしまふことが、憤りではなく、虚しさを募らせる。

「とにかく、2、3日のうちに一度、帰ってきて。本当にその気なら、必要な書類なんかも、私が用意しておくから。」

一方的にそういい残して、電話が切れた。受話器の向こうの相手の声は、こころなしか、語尾が震えていたように思えた。

そう望むなら、その気なら　曖昧にぼやかされた言葉の裏側の、真意。きつとそれは、『別れ』を指しているのだろう。

分かれなければならない理由。つまり、『あの女』の存在。兄の背後に見え隠れしていたものが、僕の頭の中で、徐々に線を結んでいく。

何故兄が必死に隠そうとしていたのか、むきになって僕を遠ざけようとしていたのかが、くつきりとした輪郭を持ち始める。

父を憎んでこの家から逃げ出した兄は、多分、父と同じ轍を踏んでいるんだろう。

そして、父と同じ相手を、偶然なのか必然なのか、選んでしまったのだ。

受話器を戻しながら、目を閉じる。ゆっくりと。

兄と、彼女の顔が、瞳の裏に交互に蘇り、薄れて、消えた。

驚きはあつたけれど、不思議とショックではなかった。

怒りも憤りも苛立ちも、わかない。代わりに侘しさと虚しさが、胸を満たしただけだった。

取り残された気分、とは、こういうことを言うのだろうか。

兄は僕と同じ理由で父を嫌い、避け、故郷から逃げたはずだった。僕も後を追うように、家を離れた。僕を先導していた兄だったのに、結局は、父と同じ裏切りを、今、兄の持つ家族に突きつけている。

何やってんだよ。

そう怒鳴りつけてやるべきなのかもしれない。

でも、目の前にある兄の背中に、何かをぶつけてやる気にはなれなかった。どんな些細な、小さなことでも、ぶつけたらぽきりと折れてしまいそうなほど、兄の背はか細く見えた。

電話を切って二階に上がり、昔と何も変わっていない兄の部屋に入ると、兄のその貧相な背中が部屋の中央にぼつりとあつた。かつて兄の宝物だったコンポに、お気に入りだったごついヘッドフォンの端子を差し込んで、肩で小さくリズムを取っている兄の背中は、小柄な僕の背中よりもずっと大きいはずなのに、何故か、とてつもなく弱々しく見えたのだ。

電話のコール音など聞こえないはずだ。そう思っただけで声をかけようとした刹那、僕の気配に気付いたのか、先に兄が、ゆっくりと振り向いた。

イヤホンの片耳をずらして、おう、と擦れた声をあげたかと思うと、兄はすぐに向き直って、床に散りばめたCDケースの群れに目を落とす。

兄がまだ学生の頃、夢中になって集めていたヘヴィメタルの仰々しい表紙絵のCDが、兄の落とした視線の先にある。ヘッドフォンからは、連打されるバスドラムの重低音が、くぐもって漏れ聞こえ

ていた。

「奥さんから、電話あったよ。」

僕が言うと、背中越しに「何ていった？」と覇気のない声が返ってきた。

兄の問いに答える前に、はっきりさせておきたいことがあった。

「あの女って、彼女のこと？」

兄の背が、ちいさくぴくりと震える。

そのまましばらく黙り込んで、「そうだ」と、やはり張りのない、擦れた声を返してきた。

溜息が漏れた。それが何を意味するのかは自分でも判らなかつたが、とにかく、湿った溜息が、僕の口から零れ落ちた。

「結局、親父と同じじゃないか。」

責めるつもりは無かつたし、声色も決して、尖っていなかった。

でも兄は小さく被りを振って、「ちがうだよ」と、言い訳じみた、か細い声を返す。

「違うんだ。誤解なんだ。お前も、ウチの奴も、変に勘ぐってるだけだ。」

口ではそう言つが、誤解を解こうという必死さは感じられない。ひらべったく、冷めた声色が、背中越しにくぐもって響いた。

「でも、会つてはいたんだろ？誤解されるようなことは、あつたんじゃないの？」

問い詰めるような僕の言葉もまた、その意味するところに反して、相手に迫る圧力も怒気もなく、ひらべったく響く。

「会つては、いた。」

「何で？」

「いずれ話す。」

「どこで彼女と会つたの？」

「それも、いずれ。」

不毛な会話だった。深く立ち入ろうとすれば、兄はすつと遠ざかつてしまう。昼間と同じ展開だった。そして兄の言ういずれが、果

たして本当にやってくるのかどうか、それも、判らない。

不意に、あの言葉をぶつけて見たくなった。

不毛さに嫌気が差したわけでも、苛立ちやまどろっこしさを覚え  
たわけでもないけれど、衝動的に、ふと、彼女の漏らしたあの言葉  
を、兄にもぶつけてやりたくなかった。

「どこまでを人殺しと言うのかな？」

言ってみた。刹那、兄は物凄い勢いで振り向いた。

さっきの白濁としたまなざしとは対照的な、ぎらついた視線を僕  
に投げた。

「お前本当は、どこまで彼女から聞いてるんだ？」

声も、さっきまでとは違う。熱が籠っている。その予想外の勢い  
に、僕は気圧されてしまった。

「ど、どこまでも何も、俺は何も知らないよ。ただ、彼女がそう  
言っただけで。」

身を引き気味に僕が返す。兄は、射抜くようなまなざしを、僕か  
ら外さない。無言で、本当に知らないのか、と問い詰めているよう  
に。

「本当に聞いてないって、何も。でも、昔、親父も同じことを言  
ってたんだ。だから、その台詞だけ、妙に耳に残って、さ。」

兄は小さく溜息をつき、ようやく刺すようなまなざしを僕から逸  
らした。そして再び背を向けると、くぐもった声で、言った。

「人殺し、みたいなものかもしれない、な。」

その言葉の意味するところは、もちろん、僕には判らなかった。

次の朝、早くに僕は家を出た。

既に起きて台所に立っていた母に気付かれぬよう、しずしずと階段を降り、物音が立たないように玄関の扉を閉めて、拓郎のバイクに跨った。

どこか、急<sup>せ</sup>いでいる気持ちがあった。何故かは判らない。でも、とにかく、ジーパンのポケットに捻じ込んでいた父の遺骨を、早く彼女に渡してしまいたかった。

拓郎のバイクで、街道を北へと向かう。

薄く靄のかかった街道には、潮と新緑の入り混じった匂いがゆらゆらと漂っていて、それをヘルメット越しに大きく吸い込むと、昨日の夜から淀んでしまっていた胸の奥が、ほんの少しだけ、宥められた気がした。

昨日は、殆ど眠れなかった。

過去にも、眠れない夜はあったけれど、どこか、違う感触がした。深夜の台所で母の震える背を目の当たりにして、初めて父を憎むようになったあの夜も、やはり僕は眠れなかった。でも、そのときは何か少し、違った。

興奮も無く、ささくれ立った感情も無かった。ただただ、鈍く重い鉛のような異物感が、胸の中に横たわっていて、僕を熟睡させてくれなかった。

拓郎の家の前へ続く路地へ入ったところで、家の前に二つ、人影が見えた。うちひとつは、バイクに跨っている。はっきりと認識できる距離まで近寄る以前に、それが拓郎と啓太であることがわかった。

二人の傍まで寄ってバイクを停める。

「どうしたんだよ、朝っぱらから」

無理に垢抜けた声を出しながらヘルメットを脱いだ時、初めて、もう一人、小さな子供が拓郎の傍らにすることに気付いた。小学生の、高学年になるかならないかくらいはその男の子は、僕と目が合うとすつと視線を脇へ逸らし、拓郎の陰に隠れるように身を引いた。

「どうしたの？その子。」

僕が聞くと、拓郎は何故か、ぎこちない笑みを返す。

「知り合いの子。ちよつと今日な、預かることになって。」

「なんだよ、お前の子供とかじゃないのか？本当は。」

「違うよ、バカ。」

言ったのは、啓太だった。おどける僕とは反対の、どこか棘のある啓太の声に、僕は思わず萎縮してしまった。

「じゃあ、そういう事で、そっちは頼むな。」

啓太は拓郎に向かって言うと、バイクのエンジンをかけた。

「お前、昨日、漁で寝てないんだろ？大丈夫かよ。」

排気音にかき消されないように、張った声で拓郎が言う。

「明日は休むから、大丈夫。」

ヘルメットを被りながら、くぐもった声で拓郎にそう返すと、啓太は小さくタイヤを鳴らして、まるで逃げるように走り去った。どこか、そっけなさを感じさせる去り方だった。

「何かあつたのか？」

啓太の姿が見えなくなつてから、拓郎に尋ねた。拓郎はやはり、頬を引き攣らせた不自然な笑みを向けて、「ちよつとな」と曖昧に返すだけだった。

二人の漂わせていた違和感を、その時の僕は、全く気にかけていなかった。そんなことより、早く彼女に父の遺骨を手渡したい、急いた気持ちでいっぱいだった。

「彼女、居るのか？」

男の子の手を取つて玄関に向かった拓郎の背に尋ねた。拓郎は振り向かずに、ビーチのある方角を指差した。

「また海に行つてるよ。よっほど好きなんだな。」

「判った。」

僕は踵を返し、ビーチへと向かった。振り向いた途端、背中に妙なざわつきを覚えたけれど、無視して、そのまま駆け出した。

彼女は、ビーチを囲う防波堤の先端にいた。脚を外洋に投げ出して腰を下ろし、朝陽をきらきらと反射させる海にまなざしを向けていた。僕に気付くとおどけたように敬礼のポーズを取って、笑みを投げた。

今時それはないだろう、と思う。

少しレトロで使い古された、そんなしぐさが自分のことのように気恥ずかしく感じる。でも、水面に反射した朝陽を受けて妙に輝いて見える彼女の笑顔は、恥ずかしさも何もかも、すぐに帳消しにしてしまう。本当に、不思議な人だ。

「もしかして、もう持つてきてくれたの？」

再び水面にまなざしを戻し、彼女が言った。

頷きかけて、思い留まる。

納得しきれない思いが、僕を制した。

この、父の遺骨を渡して、本当に彼女は救われるのだろうか。不意にそんな疑問が沸いた。

何故彼女は、これを欲しがるのか。兄や母に疎まれてまで。この島に、足を運んでまで。

判らない。きっと彼女にしか、本当のことは。

だから、尋ねた。

「君は何でそんなに、親父の骨を欲しがるんだ。こんなもの、君にとって何の意味があるんだ。どうやったって、親父は帰ってこないし、君はまだ若いし、こんなもの持ってたって、未練が残るだけじゃないか。」

まくし立てるような口調になってしまって、途中で、自分で自分がわからなくなった。何でこんなに僕は、何にこんなに僕は、必死になっているんだ？それも、唐突に。

自分の今の感情の意図や向かっている方向が、理解できない。

彼女はそんな僕に対して、何もかもを見透かしたようにも、気にもかけていないようにもとれる一瞥を投げて、でもすぐに海へと視線を戻し、唇の端を緩ませたまま、言った。

「いつか、あなたのお母さんが死んでしまったら、あなたのお母さんはあの人と同じお墓に入るでしょう？」

唐突に、縁起でもないことをさらりと彼女は口にした。僕は急に現実に戻されたような気分になって、われに戻ると同時に少しいらだつて、怒気を籠めた視線を、彼女に向ける。

「当たり前だろう。」

「何で？」すかさず、彼女は返す。

「何でって、夫婦だから。」

「夫婦って、何？」

思わず、言葉に詰まる。

「紙切れで契約を交わしたから、夫婦？」

「それだけじゃない。」引き攣る口調で、それだけ何とか返す。

「じゃあ他に何かあるの？」彼女はひるまない。

「家族だよ。俺がいて、兄貴がいて、親父と母さんだけじゃないじゃないか。家族がいるから、例えば君と親父の間だけの話じゃないって、俺らがいるから、だから、夫婦なんだよ。家族なんだよ。」

尖った声色になった。むきになった。むきになって、今まで自分が胸のうちで否定していたことを、勢いで認めてしまった。それに気付いて、思わず、自爆したみたいに、勝手に興奮して、勝手に意気消沈した。みっともなかった。

でも、彼女は笑っていた。

「うん、そうだね。」

あつさりとその返す。穏やかで、やさしい口調だった。そして僕を見て、笑って、続けた。

「だから、私はその当たり前のことを、私のママにもしてあげただけなの。」

「え？」

間の抜けた声が思わず、漏れた。そして、後の句を継げない。彼女の発した言葉の意味を、最初は、理解できないのだと思った。でも、違う。違った。理解できないんじゃない。理解しようとしていない。いや、理解できていることを、必死に、理解できていないことに仕立てようとしている。誤魔化そうとしている。

混乱した。

その混乱を更に際立たせようとしたのか、納めようとしたのか、もう一度、彼女は言った。今度は、一語一語を、かみ締めるように。「だから私も私のママも家族で、それなら、いいでしょう？ほんのひとかけら、死んじゃったママの骨の傍らに、あの人の骨が添えられても。ねえ、いいよね？」

いつのまにか彼女の目は、赤く充血して、潤んでいた。

赤らんで、潤んだ彼女の瞳を見て、泣いているんだな、ということとはかるうじて、判った。でも、口元は緩み、頬の力も抜けていて、笑んでいるようにも見える。不思議な表情だった。

僕自身は、どんな表情を彼女に向けているんだろう。

麻痺したみたいに全身の感覚がおぼろげで、つかみどころがなく、宙に浮いているような気分にもなって、動けない。自分の表情をコントロールするどころか、今まさに自分がどんな表情を浮かべているのかを、認識することすらできない。

頭の中で、必死に彼女の発した言葉の意味と、現実との狭間を僕は埋めようとしていた。

彼女と、父。

最初はそんな単純な思考だけで、何もかもを納得できたつもりでいた。

彼女と、彼女の母。

彼女の母と、父。

彼女と、彼女の母と、父。

いろんなものと、いろんなつながりと、いろんな狭間が、一度に僕の中になだれ込んできて、收拾がつかない。

そして、思い至る。

彼女と、僕。

その先にある、真実。

妹と、兄。

そのもつと先にある、事実。

娘と、父親。

そして、娘と父親の築いた、関係。

逃げ出してしまうみたい衝動が、足の裏をこそばゆく疼かせる。でもきつと、立ち去ってはいけないんだ、という予感のようなものが、

僕をこの場になんとかつなぎとめていた。

「だって君は、父の愛人なんだろう？」

混乱する思考を無理やり遮って、ようやくそれだけ、言った。

彼女は、泣いているとも笑っているともつかない、曖昧な表情を消さないまま、僕を見据える。

「世間では、そう言う関係なのかな。」

「おかしいじゃないか。だってさつき君は、君も君の母親も父の家族だって、それはつまり、君は、あの男の娘だってことだろう？」

「そうだね。うん、そうだよ。」

「じゃあ、何で……」

何で父とそんな関係になったんだ。胸のうちでそう叫んでも、声には出なかった。言葉として、吐き出してしまいうことができなかった。

でも彼女は、僕の胸中の全てを理解したふうに、ゆっくりと頷いた。

「わからなかったの。家族って、親子って、どうやって繋がってればいいのか。なんだか、抱かれちゃうのが、一番手っ取り早くて、一番判りやすいのになって。だから、かな。」

表情とは相容れない、さらりとした口調で彼女は言った。違和感はあるけれど、無理をしているようにも、強がっているようにも見えなかった。

「だからって、やっぱり判らないよ、俺には。だって、親子だろう？ わかんないよ。」

ひとりごちるような声になってしまった。彼女に向けてというより、自分自身に毒づくような、そんな口調になった。

「しかたないよ、親子の実感がなかったんだもん。ずっと会ったことがなかったし。ママは、私のこと、私を生んだこと、あの人に隠してたし。」

「親父は、知らなかったのか？ 君が生まれたこと。」

「私が小学校に上がるちょっと前に、どこかで誰かに聞いたみたい、私のこと。それで、何年かぶりにママの前に現れて、言ったらしいの。俺はその子の存在は認めないって。」

何かが、胸に突き刺さった。ショックだった。その言葉を吐いた父に、憎しみよりも悲しみを抱いた。

その子の存在は認めない。

研がれたナイフのように、その言葉自体がもう、凶器そのものだ。彼女にとって。彼女の、母親にとっても、また。

「それが原因で」彼女は、多分青ざめているであろう僕の顔を見据えながら、続ける。「ママは死んじゃった。私を残して、ビルの屋上から、飛んで。私の身代わりにその言葉を受け止めて、貰われて。」

涙が一筋、静かに、彼女の頬を伝う。僕は言葉を継げない。思わずまなざしを伏せる。沈黙が、僕ら二人の前に降りてくる。凧いだ海の、ほんの小さな細波が、防波堤にはじける音だけが、あたりに響く。

「どこまでを人殺しと言うのかな。」

不意に、彼女が言った。僕は再び、視線を上げる。

「あの人だね、ママのお葬式の時になんて言ったの。ささやかな罪悪感が、きつとあの人の中にもあったんだね。なんでだか私はそれが嬉しくて、耳のずっと奥の方に、その言葉の響きが、今でも残ってる。」

彼女は視線を海の向こうへと投げた。どこか吹っ切れたような表情に変わっていた。

「親父を憎んでないの？」恐る恐る、というような口調になってしまう。父が責められるべきなのに、僕が責められているような錯覚がしたから。

「憎しみとか、怒りとか、そういうのはママが全部持っていったやつみたい。かわりにね、あの人欲しいっていう、つながっていったっていう気持ち、私に押し付けて、いっちゃったの。だから」

ら  
」

彼女は再び、僕を見つめる。

「抱かれないと思っただのは私じゃなくて、私にのり移ったママの想いなのかも、ね。」

「それで、君は良かったの？」僕が尋ねると、彼女は笑みを返す。

「娘としても、こんな境遇でしょ？父親がどういうものかなんてわからないし、わからなければわからないほど、知りたくなるし。でも方法が他に思い浮かばなくて、結局、抱かれちゃうことでしか、親子のつながりを実感できない体になっちゃったんじゃないかな。」

おどけるように、彼女は言った。そのけなげさが逆に、僕の胸を鈍く疼かせた。

「親父は、知ってたの？君が娘だと知って、君を抱いたの？」

「最初は、知らなかった。ママのお葬式の時に出会ったきりだったから、何年も経ってて、私も変わってたし。教える気も無かったし、ね。でも、私の叔母さん、ママの妹なんだけど、その人にバレて、で、言っちゃったのよ、あの人に。もうでしゃばりなオバサンでさ、ママが死んだ時も、あなたたちの家に押しかけたんだよ。」

あの、母の震える背を見た日だ、と思い至る。

「それで、親父はどうしたんだ？」

彼女はほんの一瞬黙り込み、何かを飲み込むように、ゆっくりと頷くようなしぐさを見せてから、言った。

「それで、あの人は死んじゃったの。」

平べったい声だった。でも、ほんの僅かに語尾が震えていた。

彼女が立ち去った後、防波堤にひとり腰掛けて、父を想った。

父のしてきたことの残酷さも、愚かさも、何も変わらない。その過去の現実が変わることは、もう、決して、ない。でも、何も変わっていないはずなのに、母のあの震える背を目の当たりにした夜からずっと、僕の胸の奥底でとぐるを巻いていた溶けた鉛のような異物感、何故か、消えてなくなっていた。

彼女のせい、なんだろうか。わからない。けれど、他に思い当たるものもない。

目をつぶると、ついさっき、父の遺骨を彼女に手渡した時の、彼女の微笑みがまぶたの裏に蘇る。彼女は父の骨をぐつと胸に押し当て、しばらく目をつぶったまま黙り込んでから、澄んだ、穏やかな笑みを僕に向けて、ありがとう、と呟くような言葉を残し、この場を去っていった。

彼女の求めた父と彼女とのつながりの形。

彼女の求めた、父親と、娘のあるべき姿。

それが正しいことなのか間違ったことなのかは、わからない。けれど、その想いの強さが、もつと必然的に息子として繋がっていた僕の想いよりも、遥かに強い意志をもっていたことは明らかだった。だから例え、彼女の求めたその形に僕が違和感を抱いたとしても、きつと僕には、彼女を否定する権利も訝しむ余地もないのだろう。

どのくらい、こうしていただろうか。昨日と同じようにぎらぎらとした陽光が、防波堤のコンクリートを打ちつけ始めた頃、「淳！」という叫ぶような声が背中にぶつかり、僕は我に返った。声のしたほうを振り向くと、駆けてくる人影が目飛び込んだ。兄だった。

僕がのっそりと立ち上がる間に、兄は僕のすぐそばに駆け寄って、目の前で立ち止まった刹那、僕の両肩を強く掴んだ。

「お前、親父の骨、どうした？」

物凄い形相で兄が詰め寄るので、僕は気圧されて、思わず、判るはずもないだろ僕の所業を認めてしまおうように、言った。

「何で判ったの？」

判るはずがない、と思っていた。骨壺に納められた無数の骨のかげらのほんのひとつを抜き取ったところで、母にも、兄にも、誰にも、気付かれるはずなどないと思っていた。

「お前、よりによつて、喉仏を抜き取ったんだよ。」

「喉仏？」

「喉の骨。仏が胡坐かいたみたいな形の骨だよ。お前、よりによつて母さんが一番大事にしたたそのかけらを抜き取ったんだよ。そりゃばれるだろうが。」

はき捨てるように兄は言い、更に肩を掴む手に力を込めて、「そんなことより」と僕に食いかかる。「彼女に渡したのか？」勢いに負けて、弱々しく、僕は頷いた。

「ばかやろう。」

怒りというより、諦めとあせりの混じった声色で言つて、兄はすつと踵を返して引き返そうとする。それを、今度は僕が兄の肩を掴んで止めた。

「兄貴、知ってるんだろう？彼女が何者なのか。彼女の素性も、親父とか、俺らとの関係も。だったら、いいじゃないか。彼女にも権利はあるんじゃないのか？親父の骨のひとつかけらくらい、渡してやっただつていいだろう？」

兄は僕の手を振り解きながら振り向いて、僕を睨みつける。僕だつて、間違つたことは言っていない。胸のうちに自分に言い聞かせ、少したじろぎながらも、睨み返す。

「あの子、死ぬぞ。」

低く、くぐもつた声で兄が言う。その意味が判らず、僕は「は？」と間の抜けた声を漏らした。

「あの子、死ぬ気なんだ。」

もう一度、今度はかみ締めるように、兄が言った。でもその言葉

は、僕の疑問を打ち消すものではもちろんなかった。

困惑と、そこから生まれた苛立ちとが、僕の中で渦を巻く。兄が冗談を言っているとは思えない。でも、兄の言っていることの突飛さと支離滅裂さを受け入れることだって、できるわけがない。

「なんだよそれ、意味わかんないよ。何わけのわからないこと・  
」

うわずる僕の言葉を、「俺だって」と力んだ声で、兄は制した。

「俺だって、納得したわけでも、理解したわけでもない。ただ、彼女の強い意志だけは曲げられそうにないってことしか、判らないんだよ。」

「そんなの、兄貴の思い込みじゃないのか？彼女が言ったの？私は死にますって。なんだよそれ。ばかばかしい。」

「信じないなら、かまわない。」言って、兄は再び踵を返した。

「でも、少しでも疑うならお前も彼女を探すのを手伝え。時間がない。知りたいなら、道すがら俺が知ってる限りのことは、説明してやる。」

僕が答えを出す前に、兄は足早に歩き始めた。

そこまで言われて、この場に取り残されるわけにも行かず、僕もたどたどしい足取りで、兄の後を追った。

兄の言っていることの意味は、もちろんわからない。でも、妙な胸騒ぎが、僕の中で蠢いていたのも、確かだった。

拓郎の家に戻ったときにはもう、彼女はチェックアウトを済ませてしまっていた。

「予約は、明後日までだったんだけど、急用ができたつて。」

食って掛かるように彼女の所在を尋ねる兄に、拓郎はたじろぎながらそう言った。その傍らには、やはり怯えたまなざしで、さっきの小さな男の子が、拓郎の影に身を隠しながら恐る恐る兄を見上げていた。

「いつ頃？」

兄が拓郎に詰め寄る。

「淳が出てったすぐ後だから、もう一時間くらい前かな。」

「どこへ行った？」

「どこつて・・・。」

「兄さん、落ち着けよ。」

さらに前傾になって拓郎に迫る兄を、僕が止めた。拓郎は身を引きながら、飲み込めない状況に目を丸くしていた。

「港だ。」

ひとりごちるように言つて、兄はすつと踵を返す。僕も慌てて後を追つた。

「お、おい」

困惑する拓郎の声が背中にぶつかつたが、振り向かなかつた。

兄は、運転してきた実家の車に乗り込み、僕が助手席に滑り込むのとほぼ同時に、乱暴にそれを発進させた。そのまま荒っぽい運転で街道へ出て、港へと向かつた。

「で、どういふことが、説明してくれるんだろう。」

兄の運転が少しだけ落ち着いてきたところで、僕は視線を車の進行方向へ向けたまま、兄に尋ねた。兄は大きく、溜息を吐き出して、しばらくの間黙り込んでから、口を開いた。

「半年前だ。彼女が突然、俺の職場に訪ねてきた。」  
ハンドルを握り、睨むように前方をみながら、兄は語りだした。

彼女が兄の前に初めて現れたのは、半年前だった。

事前の連絡も無しに、いきなり兄の職場を訪れた彼女は、やはり何の前置きも無く、あなたの腹違いの妹だ、と明かした。そして困惑する兄にかまわずに、父に知られてはならないことを知られたから、よく見張っていてくれ、と兄に頼んだらしい。兄はもう何年も、父に会っていないのにもかかわらず。

そもそも、初めて会ったその日に、いきなりそんな突拍子もないことを立て続けに言われて、兄も、彼女の言うことをにわかには信じられなかった。信じられなかったが、妙なりアリティが彼女の内側から沸きあがっているようで、何をバカな、と浮かんだ言葉を口にすることはできなかった。

別れ際、不審がる兄の背に向けて、彼女は言った。

あの人は、死んでしまいかもしれない。

それから数日、胸騒ぎが止まらなかった。父はもう他人だと思い込んでいたはずなのに、彼女が別れ際に放った言葉が、兄の胸の奥を疼かせた。

結局兄は、父と会った。そうすることで、疼きが収まるのならと、東京の父のアトリエで、十数年ぶりに。

兄をアトリエに迎え入れた父の顔には、濃い翳が落ちていた。

何を語りかけても、生気のないか細い声で、短い言葉を返すだけだった。

彼女に会った。そう告げた時も、父は力なく苦笑いを浮かべ、そうか、そうか、と呟くように繰り返した。

その父の姿が、兄の中のそれまでの父の存在を、揺らめかせた。ずっと憎んできた。恨んでいたはずだった。でも、干からびた藁のように、ほんの少し触れるだけできりと折れてしまいそうな父の姿を見て、憎しみも恨みも憤りも全て、しゅんと萎れてしまった。

兄自身も、不思議なほどに。

その日から、兄は時間の許す限り父のアトリエを訪れるようになった。

あの人は、死んでしまいかもしれない。

彼女の言葉に引き摺られるように、兄は父を見張った。彼女からは時折呼び出され、父の近況を報告し、その度に彼女は、父は生きている、というだけの事実にすがりつくように、安堵の笑みを浮かべた。

数ヶ月、そんな生活を続けるうち、父は段々と生気を取り戻しているように、兄には見えた。こちらの投げかける言葉に対する返事も、それなりに自分の意思を伝えようとする姿勢が見え隠れした。

父が命を絶つ二日前だった。

何気なく、兄は父に尋ねた。

彼女の言う、知られてはならないことって、何なのか。  
責める気持ちもなく、強い好奇心に背中を押されたわけでもない。単純に沈黙を埋めようとしただけの、些細な問いかけだった。少なくとも、兄にとっては。

父はほんの一瞬虚をつかれたようなおどろきの表情を見せ、でもすぐに弱々しいながらも笑みを浮かべ、それきり黙りこんでしまった。

翌日父はアトリエから姿を消し、その更に翌日、再びアトリエに姿を現したが、大量に睡眠薬を飲み込んだ後の、どうにもならない状態だった。

港に着くひとつ手前の交差点で信号につかまった。

兄は少し乱暴にブレーキを踏むと、もう一度、大きく溜息を漏らした。

「彼女と親父がそういう関係だったと知ったのは、親父が死んだと彼女に伝えた時だった。電話越しには、彼女は特にうるたえた様

子も嘆く様子も無くて、どちらかというと明るい口調で、言うんだ、親父の骨をくれって。親父の骨と、彼女の母親の骨と、自分の骨と一緒に墓に埋めたら、初めて家族になれるかもって、な。家族になれるなら、今すぐにでも死んでいい、って。」

僕は何も返せず、ただ、兄の横顔を見た。僕の視線に気付いた兄が一瞥を投げ、すぐに前を向き直ったところで、信号が青に変わった。兄は再び、アクセルを踏み込んだ。

「ああいう娘だろう？どこまでが本気か、本当のところは判らない。でも、冗談を言っているようには、全然聴こえないんだ。わかるか？あの娘の、そういう感じ。」

「判る、気がする。」

素直に、答えた。つかみ所がないのだ、本当に。いい意味でも、悪い意味でも。

「間に合うといいな。」

呟くように兄が言った。

「間に合うよ、きつと。」

やはり呟くように、僕が返した。

呟きと言うより、祈りに近い声の震えが、車の中にくぐもって響いた。

日に3便、本土に向けて出航するフェリーの、2便目。

僕と兄が港に着いたとき、その2便目の乗船が始まる直前だった。今にも船に乗り込もうと列を成す人の群れの中に、視線を投げるが、彼女の姿は見当たらなかった。

「いないな。」

落胆とも安堵とも取れる曖昧な溜息と共に、兄が言った。僕は僕でぞんざいに頷き返すと、念を押すようにもう一度、人ごみの中に視線を走らせた。でも、やはり彼女を見つけることはできなかった。「1便目が出港する時はお前と会ってたはずだから、まだ、この島にいる。」

兄の口調はまるで、自身に言い聞かせるような響きだった。僕も自分で自分を納得させるように、小さく頷いた。

「まだ、この島にいる。」

繰り返し兄が言って、あの場所が思い当たった。

あの岬。

ここにいないのであればもう、あそこしか、考えられなかった。

「兄さん、行こう。」

兄の返事を待たずに踵を返し、ロータリーへと引き返す。

「心当たりがあるのか？」

僕を追ってきた兄が、僕に並んでそう尋ねた。

「俺が運転してくよ。」

言いながら、兄に手を差し出す。兄はたじろぎながらも、ポケットに捻じ込んでいた車のキーを抜き出して、僕に渡した。

「どこなんだ？」

答えるのが億劫だった。億劫と言うより、焦って、言葉を返す余裕が無かった。僕は黙ったまま、運転席へ滑り込んだ。慌てて兄も、助手席に乗り込む。

車を発進させた。さっきの兄と同じように、乱暴な運転になってしまっていた。

獣道のような細い坂を駆け上り、岬の先端へたどり着くと、その穏やかな風景とは相容れない、場違いな紫が目の中に飛び込んだ。

岬の先端で揺れる、紫。

岬の先端の、柵の向こう側に立つ彼女の纏った、紫のワンピース。その裾が、海から吹きつける緩い風に、ひらひらと揺れていた。

きつと彼女はここにいる。その予感は当たった。でも、状況は最悪だった。もう半歩踏み出せば、柵を掴む手を離してしまえば、岬の下の断崖に落ちてしまうような場所に、彼女は立っているのだ。穏やかな笑みを浮かべながら。

「よかった。」

笑みを携えたまま、彼女が言った。「私、大事なことを忘れてた。」

兄も僕も、ただただ目の前の状況にうろたえて、彼女の言葉を飲み込めないでいた。

「いいから、早くこっちへ来るんだ！」

兄が怒鳴るような口調で言う。でも彼女は、笑みを返すだけで、柵の向こうに佇んだままだった。

「これ。」

彼女は何かを僕らに向けて投げる。瞬間、彼女は、少し体勢を崩して、柵の向こう側でよろけた。兄はびくりと体を震わせ、僕は慌てたしぐさで彼女の投げた『何か』を受け止めた。

小さな、布の巾着袋だった。中にはごつごつとした石のようなものが入っているのが、感触で判る。何が入っているのか見当はついた。が、開けて確かめずにはいられなかった。

小さな、白くくすんだ塊が二つ。  
骨。

きつと、彼女の母と、そしてさっき彼女に手渡したばかりの、父

の。

「お願い、私の骨もいつしよに、そこにに入れて。自分じゃできないでしょ。」

おどけるような口調が逆に、彼女の真剣さを感じさせる。本気だ。本気なんだ。膝から下が、小刻みに震えだす。

「早まるな！もう一度じっくり考えてからでも遅くないだろう？とにかく、こっちへくるんだ。」

高揚した兄の声も震えていた。

もう無理なのか。止めることはできないのか。思考を巡らすのが、考えれば考えるほどに、目の前の状況が瞳の奥でふわふわと揺らぎ、リアリティを失って、ぼやけてしまう。

ふと、疑問が沸く。

彼女を止めたい。けれど、僕に、僕や兄に、彼女を止める権利はあるのだろうか。

僕らが彼女を追い込んだわけではない。でも、彼女がこうまでして求めてきたもの、血で繋がるべき絆を反故にして、父を憎むことでそれを拒絶し続けてきた僕らに、果たして彼女の葛藤してきた何が判るのだろうか。彼女がこの答えにたどり着いた道程の、結果の、何を否定できるのだろうか。

できるわけが無い。無理に引き止めるのは、傲慢以外のなにものでもない。少なくとも、僕と兄にとっては。

「わかった。君の言う通りにする。」

僕は言った。自分でも驚くほどに、残酷なほどに、澄んだ響きだった。

彼女はその言葉をかみ締めるようにゆっくりと一度瞬いて、空を仰ぎ、再び僕を見据えて、言った。

「サンキュ」

紫が、宙を舞った。

自殺。

不倫の末の子。

実の父の死と、異母兄弟とを目の当たりにして、背負いきれなくなった現実から逃げるように、彼女は身を投げた。死んだ父にあてつけるように、死んだ父の住まう島で。

安っぽいドラマのような、でたらめな筋書きを自ら並べ立てて、よくあることだと勝手に納得して、ほんの数日で警察の捜査は終わった。

そう。でたらめだ。彼女は、彼女の選んだ選択肢は、そんなに薄っぺらくはない。

否定したい気持ちはあった。でも、本当の彼女の想いを、生き方を、踏みにじられてしまいそうで、あえてその筋書きを僕は飲み込んだ。恐らく兄も同じ理由で、捜査の結果に頷いていた。

彼女は逝った。

生まれたときからずっと、そうなることが決まっていたとでも言うように、何の躊躇も無く、彼女は最期の願いを僕ら兄弟に託して、飛んだ。

お前が彼女の背を押した。

彼女の願いをすんなりと聞き入れた僕を、兄は責めた。僕も、それは認める。でも、聞き入れる以外、何が僕らにできたのだろう。その場を取り繕うだけの引き止めの言葉を、いくらあの時の彼女にぶつけても、結局彼女はこの結末を辿っただろう。そもそも彼女が、それこそ命を賭して、求めてきたものをかなぐり捨てた僕らに、彼女を引き止める権利などあったのだろうか。

きつとそれは、彼女に対する侮辱だ。

少し無理やりかもしれない。こじつけかもしれない。けれど、そうやって僕は、彼女の選び取った結果を飲み込んだ。そうやって、

飲み込むほか、なかった。

彼女が逝ってしまった一週間後、島を出るために港へ出た。見送るといふ母の申し出を断つて、兄と二人で。

「奥さんの誤解、とけそう?」

道すがら、兄に訊ねた。

「どうか。でも、どうにかしなきゃな。」

苦笑を漏らしながら、兄が答える。表情は苦々しかったが、まなざしは、しっかりと芯のある光を携えていた。

「子供たちの為にも、そうしなきゃなんないんだろうな。血のつながりは、理屈を超えたところで、いい意味でも悪い意味でも強固で、ひたむきだ。人が人として狂ってしまわない限りは。それを、彼女に教えられた気がする。」

「そうだね。」

ひとりごちるように返して、僕は彼女を想う。

彼女の死を、仰々しく美化するつもりはない。肯定するつもりも、否定するつもりも。ただただ、血の流れに勇敢に、哀れに、ひたむきだった彼女の存在を、僕はいつまでも胸の奥に繋ぎ止めておきたい。僕らの、妹の存在を。

彼女のなきがらは、彼女の叔母の元へ送られたという。本土へ戻ったら、アメリカへと帰る前に、その叔母を訪ねるつもりだ。彼女の最後の願いを叶えるために。彼女の叔母は、そう簡単には彼女の遺骨を手渡すことはないだろう。それでも諦めるわけにはいかない。そう思い至つて、まるで彼女がこの島を訪れた時と同じだと、苦笑が漏れた。

船着場のロータリーへ出る手前で、ふと、美咲の土産物屋が目についた。

結局あの日以降、警察の捜査につき合わされていた慌しさにかまけて、啓太にも拓郎にも美咲にも、そして優希にも、会えずにいた。でも、本当は違う。慌しいなんて、身勝手な言いわけだ。彼女が駆け抜けていったほんの数日のできごとに浸っていたかったから、

彼らと会って、それまでの現実に引き戻されるのが嫌なだけだった。今なら、それがはつきりと判るし、認められる。認められるけれど、僕の歩みを止めるまでには至らなかった。

臆病。

道を隔てた向こうの美咲の店を通り過ぎたとき、唐突に彼女が僕に向けて言った言葉が脳裏に蘇った。何も言わずに島を去るつもりでいたのに、彼女に後ろ指をさされているような気分になった。不思議な感覚だった。見えない力に引かれるように、最後に、美咲だけにでも声をかけて行こうと、自分でも思いがけない欲求が湧き上がった。

「兄さん、先行つてよ。」

兄を促して踵を返し、美咲の店へ向かった。殆ど、無意識に。

店には、美咲と美咲の母がいた。

「あら、淳ちゃん、そういうえば、帰ってきてたんだよねえ。」

先に僕に気付いた美咲の母が、ゆったりとした口調でそう言った。昔と変わらない、おっとりとした笑顔を向けてくる。相変わらず娘の美咲とは正反対の、おだやかな雰囲気を負っていた。肝心の娘は、店の奥で刺すようなまなざしを僕に向けていた。やはり、不自然なほどに正反対だ。

「すみません、挨拶にこれなくて。」

小さく会釈してそう言った途端、店の奥にいた美咲がつかつかと歩み寄り、僕の腕を掴むと、強引に店の外へ引っ張り出した。

「お、おい、なんだよ・・・」

軒先でようやく僕の手を離れた美咲は、僕に背を向けたまま言った。

「ちょっと、頼まれてくれる？」

とても、何かを頼むような口調ではなかった。尖った、威嚇するような声だった。

「頼むって、何？」

「拓郎んとこで、小さな男の子に会ったでしょ？」

「ああ、あの・・・。」

あの日、拓郎の傍らに、拓郎に隠れるように身を寄せていた男子を思い出した。

「あの子、今、椿山公園で独りで遊んでるの。迎えにいつてくれない？」

この港から10分ほど歩いた公園だった。船がでるのは30分後で、往復でもぎりぎりの場所だ。ただ、何故僕がそんなことを頼まれなければならぬのか、解せなかった。

「いや、もう、フェリーの出る時間になるし・・・。」

「お願い。」

断ろうとした僕の言葉を遮って、強い口調で美咲は言った。ただか子供を迎えにいくだけのことにしては、不自然なほどに緊張感のある声色だった。

「でも、兄貴が待つてるし、行かないと。」

「お兄さんには私が話しておくから、お願い。行って。」

僅かに、美咲の背が震えているように見えて、僕はその雰囲気にもまれるように、頷いてしまった。

おずおずと踵を返すと、少し小走りにその公園へと向かった。

得体の知れない感触が僕を押しとどめようと、背を押そうともしているようで、胸が鈍く疼いた。

陽の光を反射して、青く輝く公園の芝生の上を、あの男の子が駆けていた。

その先に、見覚えのある人影が見える。

小柄な女性。

屈み込んで男の子に視線を合わせ、陽光の中に溶けてしまうような笑みを浮かべて、男の子を迎え入れようとしている。

「ママ！」

男の子が女性に向けてそう呼びかけた時、僕は、全てを悟った。嘘。

その人なりの、優しさだったのだろう。

頑なに故郷に背を向けてふらついていた僕を、身軽にさせたかったんだろう。

そんなことにはこれっぽっちも気付かずに、僕はその人を打ちのめしたのだ。かつて父が、僕や母や兄にそうしたように。

隠れていた事実が、胸に刺さる。啓太や拓郎や美咲、そしてその人が覆い隠していた事実。全ては、僕のために。僕の傲慢さを許してくれた彼らの想い。胸の奥から何かがこみ上げてくる。僕は奥歯を力ませ、必死にそれをこらえた。こらえると同時に、彼らの想いに報いるべきこれからの未来を、覚悟した。

臆病。

妹の声をする。

今は否定することのできない妹の叱咤に、いずれ違つと胸を張つて言い返せる時がくるのだろうか。

いや、言い返さなくてはならない。いつか、きっと。

僕に気付いたその人が、驚いた表情を浮かべている。そして、何かに観念したように、恐る恐る、男の子の手を引いて、こちらへ歩み寄ってくる。

「サキちゃんに聞いたの？」

男の子を自分の傍にくつと引き寄せて、優希が訊ねた。

「本当は、黙ってるつもりだったの。あの3人にも、黙っててもらうはずだったの。」

「もう、いいよ。」

いたずらの見つかった子供のように、さすがのような目を向ける優希の言葉を、僕は制した。それでも、優希は続ける。

「あの、あの日にさ、私ちよつと取り乱しちゃって、淳は淳で、あの、彼女のことで大変だったみたいだけど、その、サキちゃんとか啓太君とか拓郎君にも心配かけちゃって、サキちゃんは淳に全部話すって聞かなくて、今は淳も大変そうだからやめてって、頼んでただけど・・・」

抱きしめた。うるたえて、支離滅裂に言葉を並べる優希を、ただ、抱きしめた。

途端に、いろんなものが僕の中になだれ込んできた。腕に感じる確かな優希のぬくもりから、いろいろなものが、次々と。

僕の子を生み、僕を束縛させないが為に、独りでこの子をこころで育てた優希の、抱えてきたであろう孤独が、僕の胸に染みってくる。自分の愚かさが憎かった。悔しくて、胸が震えて、いつのまにか、頬がぬれていた。

「ごめん。」

震えそうになる声を必死に抑えて、絞り出すように、言った。

「ごめん。」

もう一度、繰り返す。今度は、語尾が震えて歪んだ。途端に、優希が嗚咽を漏らした。

「我慢できると思ったんだけどな。でも、駄目だった。淳の顔見たら、もう、なんだか・・・」

「ごめん、でも、もうだいじょうぶ。」

優希を抱きしめる手に、力を込める。僕の背に回された優希の腕も、更に僕を強く引き寄せるのがわかった。

ふと、腿の辺りを叩かれる。涙でぼやけた視界の向こう側で、男の子が僕の脚をしきりに叩いている。きっと、母親を泣かせている悪い男ように見えるのだろう。その通りだ、今までは。でも、これからは違う。孤独で刻まれた優希やこの子の傷を癒せるのに、どのくらい時間が掛かるかはわからない。でも、いつか、きっと。

少し屈んで、男の子ごと、二人を抱いた。僕の腕の中で必死にもかく男の子を、宥めるように、それでも、力強く。

潮のにおいがする。

穏やかな海風に乗って、故郷の匂いが、僕らを包む。

『そういうカタチも、ありなのかもね。』

遠くで碎ける波の音に、妹の声が重なる。

君の選んだカタチも、ありなんだろうな、と思う。

悲しくて、痛くて、でも、純粹だった。

ふと思う。

美咲の店を通り過ぎた時に蘇った、妹の言葉。

臆病。

彼女が、僕を引き寄せてくれたのだ。優希と、僕の子の元へ。

きっと、彼女が。

片手を、空へかざした。

妹も一緒に、抱き寄せられるような気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3800b/>

---

Descended

2010年10月8日12時27分発行